最低無敵の霊能チン〇、ネギま世界で無双する

人工シメサバ三号

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最強の竿役と化した横島がネギまの女子キャラをやりまくる話

一方的な蹂躙クロスであり、ＹＯＫＯＳＩＭＡ

基本的にクソバカな馬鹿馬鹿しい話です

目次

忍者ＶＳ不審者 ―― 1
剣士ＶＳ不審者　前編 ―― 35
剣士ＶＳ不審者　後編 ―― 58
サウザンドマスター ―― 86
超うすうす ―― 119
近衛近右衛門の失敗 ―― 164
ＪＣにやにや眺め罪 ―― 202
韮じゃない ―― 225
弟子足る者 ―― 244

忍者ＶＳ不審者

埼玉県麻帆良市には学園都市と呼ばれる学校群がある。
下は幼等部から上は大学まで併設され、研究所に都市機能まで備えた
この学園はまさに一つの街と呼ぶにふさわしい敷地面積を誇る。
虫の足音ほどの音も立てず、元々そこにいたかのように
一人の男がその麻帆良学園に足を踏み入れた。
一部の者しか知らない事だが、
この学園には結界があり無許可で一歩でも中に入ると、
すぐに警備員が感づくようになっている。
当然、結界に入ってすぐに感知される訳だから、
学園都市の外周部である事がほぼ必然となる。
ただ、この場合は違っていた。
学園都市の中心部である世界樹のすぐそばにいきなり反応があったのである。
そこにたどり着くまで一切感知されない存在というのは考えづらく、

感知出来た者達は大慌てでその現場に急行した。
ただ異物たるその男は感知されない為の何かを用いた訳ではなく、
実際にその中心部に〝突然〟現れたというだけなのだが、
そのような事分かるはずもない。
そして、その男はそんな騒動が起きている事も知らず、その場を離れた。
問題は気配の消し方があまりにもレベルが高かった為、
他の者からすれば消えたようにしか感じなかった事だろう。
「おい、ジジイ、感じたか？
現れたかと思うと気配が消えた。
とんでもないのが来たのかもしれんぞ」
「みんな、すまない。
学園長からの緊急呼び出しが入った。
残り時間は自習してて欲しい」
「先生、すみません。
一身上の都合で早退します」
「今から下校する子は集団下校して下さい。
未確認ですが、不審者が現れたという情報があります。

今日は寄り道せずに速やかに帰宅してください」
教師、生徒等立場問わず魔法を使える者やその関係者、
裏の事情を知る者達に秘密裡に情報が回され、学園内部に現れた存在の捜索が始まった。
魔法の使えない者に配慮し、当然それぞれが不可知化の魔法を使ってである。
三月、学年末であり卒業シーズンでもあるこの時期は、
只でさえ生徒たちは浮ついているのだ。
降って湧いた騒動の種に関係達は頭を痛めていた。
３―Ａ所属、長瀬楓。
１４歳にして身長１８１㎝、スタイルも細身でありながら
胸や尻は出ているという大人顔負けの容姿の少女である。
しかしながら、彼女の事で特筆すべきは１４にして甲賀の中忍である事だろう。
能力で上り詰められる最高の地位に１４にして得、
外部の土地に住まう事を許された忍びの天才なのである。
ただ、彼女は麻帆良学園では特殊な位置にいる。
魔法使いではないが、一般生徒とも違う。
本人もこの場所が尋常ならざる土地だとは気づいている。

が、公に知らされていないので関係者でもない。
彼女なりに普段から調べている訳だが、
その結果として学園の所有する山に来てしまっていた。
山に来る事自体は修行として週末ごとにやっているのでいつもの事だが、
今日は経緯が違う。
裏の関係者と睨んでいる人物をつけていたら見失い、ここに来ていたのである。
それは相手が途中で不可知化の魔法を使ったからなのだが、楓には分からない。
裏側があるとは分かっていても、その真実にまでは辿り着いてない楓は
好奇心から行った尾行に失敗し、残念がっていた。
自らの尾行の腕の未熟さを反省し、どの時点で気付かれたのか撒かれたのかを
大木の枝から枝へと飛び移りつつ考えていたのだった。
「っ!?」
不意に視線と気配を感じ、楓は空中で身体を捻り
自身の斜め後ろに向かって手裏剣を投じた。
投じてから驚きという感情が来る。
身体が先に動くのは鍛錬の成果である。
１４の齢にして甲賀中忍を許されたのは伊達ではない。

「うおっ？
あぶねっ、気付かれた!?
余りに可憐なスカートの中身に気を取られ過ぎたか。
いや、今時こんなに大胆に下着を見せてくれるなんておかしいとは思ったんだ。
罠だったか……しかし、いきなり刃物を投げてくるとは、
この世界は随分と物騒だなー」
楓が手裏剣を投げつけた気配の主は、二十代のスーツを着た青年のようだった。
ぶつぶつと大きい独り言をつぶやいているが、姿はまあ普通の男性である。
しかし、楓の内心は驚きに支配されていた。
気配を感じ、手裏剣を投げつけた際、青年は楓の至近距離にいたからである。
位置的に考えると青年は息がかかる程の距離まで楓の臀部に迫っていた事になるのだ。
木から木に飛び移っていた楓の、である。
そこまで近寄られるまで自分が気付けなかった事にも、
その青年がどうやら楓の下着を覗き続けていたらしい事にも驚く。
そして何より、慌てたような言葉と裏腹に手裏剣を平然と掴んでいる事が信じられない。

楓の手裏剣を受けたら怪我で済めばいい方で、下手をすれば死んでもおかしくない。
にも関わらず、この呑気な言葉は何なのだろうか。
「……何者でござるか？　」
「ん？　俺？
俺は横島忠夫って言う優しくて気前のいい、君に惚れている男だよ。
お嬢さんのお名前と住所と電話番号と好きなタイプと好きな食べ物、
趣味とスリーサイズを聞いてもいいかな」
「ず、随分と聞きたい事が多いでござるな。
拙者は長瀬楓と申す者。
それ以上の情報はまだやれぬ」
三メートル程の距離を離して、横島と名乗った青年と対峙する。
身の丈は楓より若干低く、１８０は無いぐらい。
細身に見えるがスーツ越しでも分かる程、身体は鍛えられている。
気さくで穏やかなように見えるが、同時に只者では無い事も分かる。
隙だらけのような、隙が全く無いような、とらえどころがない。
里の上忍など「隙が無い」と感じた事がある者はいても、
隙があるのか無いのかすら分からなかった事など楓は今まで一度も無かった。

とても奇妙な存在を不審に思いつつ、だからこそ興味を掻き立てられていた。
「うーん、そっか、それは残念。
どうしたら教えてくれる？
君のような美少女と知り合えたのに、これっきりなんて悲しすぎる」
「そうでござるな。
横島殿の事をもっと教えてくれるのなら、
拙者もやぶさかではござらんが……」
「おう、そう言う事なら何でも聞いてくれ。
楓ちゃんの事を教えてくれるなら、俺の事なんか何でも教えちゃうよ」
横島はふんふんと鼻息荒く、助兵衛な表情を浮かべている。
一見するとただのスケベナンパ男だ。
だが、恰好こそ学園の制服だが、忍者丸出しの楓を前に
ナンパ男が平然と立っていられるはずもない。
試しに殺気を放ってみても、まるで動じる事が無い。
（拙者などどうとでも出来るという自信か……
だが、確かに強さの底が見えぬ……）
冷や汗が流れるが、同時にわくわくしてしまうのは楓の若さゆえか。

甲賀中忍を許されているが、歳はまだ１４。
未知なるものに興奮してしまうのは仕方がないといえた。
「それでは単刀直入に、横島殿は何者でござるか？
何故、拙者の後をつけていたのでござる？」
「何者って言われてもなー。
ただ散歩してたら可愛らしい女の子がスカートで木の上飛んでるの見えちゃったから
近くで見ようと思って来ただけ。
あ、パンツ……ふんどし見た事を怒ってる？
それはごめん。
でも、可愛い女の子があんなに無防備にしてたら見ちゃうのは男の性だよ。
見るだけで済ませた紳士性を評価してくれてもいいと思うぞ」
横島は軽く言ってくれるが、楓としては恐ろしい話だ。
自惚れるつもりは無いが、楓は若くても甲賀中忍としての力量はあるのだ。
その自分が山の中を移動する姿を視認し、
全く気付かれないまま近づいて下着を覗いていたとは、
事実だとすればとんでもない力量差である。

駅の階段で短いスカートの女子高生を覗くのとは話が違うのだ。
楓自身、自分より強者がいくらでもいるとは思っていたが、
里で最も力ある者相手でもここまでの差を感じた事は無かった。
このへらへらとした青年がどれほどの高みにいるのか、
楓の若さがこの青年に対しての興味を湧かせてしまう。
「襲われなかっただけ、拙者はラッキーでござったかな」
「いやいや、もし楓ちゃんを見つけたのが悪い奴だったらの話だよ。
俺みたいに善良で紳士で女性に親切で公正明大、
気前が良くて偶然にも今彼女がいなくて
長身でグラマラスな年下の彼女を募集してる好青年じゃなかったら
楓ちゃん危なかったよ。
そう考えると、この出会いって奇跡だね」
「女子のスカートを覗いてふんふんしてた人の台詞でござろうか……」
横島という青年は楓に対して、好色な視線を隠す事もせず
顔や胸ばかりをじろじろと見てくる。
楓は背も高いが胸も尻も大きく、顔も整っているので
歩いているだけで男性からの視線を感じる事も多い。

だが、ここまで遠慮の無い好色な視線は逆に珍しいレベルだった。
普通の男はスケベな目で見てない振りぐらいする。
ここまで振り切っていると、逆に嫌悪感が湧かないのかと
楓は自分の心の動きに感心と驚きを覚えていた。
「で、本当に横島殿はどこから来たのでござるか。
この学園の者全員を知ってるとまではいかなくとも、
横島殿ほどの手練れの存在を全く知りもしないなど、あり得ぬでござる」
「そう？
うーん、やっぱり知らない世界の平均に合わせるって難しいな。
俺ってそんなに普通の男に見えない？
それって楓ちゃんが俺に運命感じてるとかじゃなくて？　」
横島は少しだけだけども本当に焦っている様子である。
その様子を見て、楓はまだ力量を見誤っていたと思った。
話せば話すだけ得体の知れなさに拍車がかかる。
「運命は感じてござらんので、普通には見えないでござるな。
それに知らない世界とはどういう事でござるか？
横島殿は地下にでも引きこもっていて、

今日初めて外に出たとでも言うのでござるか？　」
「おっ、楓ちゃん俺に興味ある感じ？
でも残念だけど、あんまり話せる事無いんだよね。
ベッドの中でならいくらでも教えるんだけど」
横島から特に邪悪な気配は感じないが、得体が知れないのは確かである。
（仕掛けてみるか……）
特に清掃も行き届かない山の中、季節は春だが足元は落ち葉だらけ、
周りは背の高い木々に囲まれた見知った場所。
忍びである楓にはこれ以上無い程の地の利がある。
裏の関係者らしき者達がそわそわしていたのは、
この横島という青年が侵入してきたからではないのかという気もしている。
それならば通報してしまえばいいのだろうが、
そこは楓の若さゆえに強き者と戦ってみたいという気持ちの方が勝ってしまう。
だが、楓が脚に力を込めようとした瞬間、横島が口を開いた。
「止めとこう、楓ちゃん。
戦えば命のやり取りをする事になる。
殺すつもりは無いけど、戦いというのは何が起こるか分からないもんだ」

軽薄な印象の消えた真摯な表情を浮かべて、横島が警告を口にする。
完璧なタイミングの気の逸らし方。
それだけで向こうが力量は上だという気はする。
命のやり取りになるというのも本当の事だろう。
だが、楓はそれで怯むどころか、戦闘意欲がますます湧き上がるのを止められなかった。
「覚悟はあるつもりでござるよっ！
あからさまな不審者を見つけてしまった以上、捕縛するのが義務でござろう」
「楓ちゃんみたいな可愛い子になら捕まってもいいかなーって思わなくもないけどな。
ちょっと調べたい事もあるから、また今度にしてくれない？
ダメ？」
ちょっと怪しいだけで武力行使など、そこれそ普通ならあり得ない話である。
相手が何も知らない一般人ならどうするのか。
そう思いつつも、楓は横島が一般人でない事を確信していた。
ある種の信頼を元に楓は木々に隠れるように走り、手裏剣を横島に投げた。
当たるとは思わなかったが、どう避けるかを見る為である。
横、斜め後ろ、後方頭上から投げられたそれを横島は全て掴んだ。

そうさせない為に三つとも形状の違う手裏剣を使ったにも関わらず、である。
長老達でも避けはしても、掴み取るなど出来はしないのに。
「うっへぇ、危ないなぁ。
いきなりこんなもんを投げてくるなんて、楓ちゃん危ない子？
こっちの世界じゃこれが標準って訳じゃないだろうな……
ちょっとパンツみたぐらいでこれじゃナンパもし辛いぞ」
「パンツ覗きは通報されても仕方ないでござるっ」
腹話術の一種で別方向から声が出ているように聞こえる術を使いながら、
煙の出る特製の玉を地面に投げつけ、木々を飛び移りながら更に手裏剣を投げる。
横島はまだ全く動こうともしない。
ブレザーを脱いで頭上から落とし、自身は木を駆け下りて姿勢を低くして迫る。
煙幕で視界を奪えていれば、ブレザーの影で上からかかって来るように見えるだろう。
中に鋼線が仕込んであり、形を保ったままそれなりの速度で落ちてくるのだ。
わずかでも気を散らせていれば決まるというタイミングで水面蹴りを仕掛ける。
だが楓の蹴りは何の手ごたえも無く、空を切り落ち葉を舞い上げる。
勢いを殺さずそのまま回転を乗せて掌底を放つが、これも空を切る。

攻撃が不発に終わり、後方に飛びのいて楓は足をもつれさせた。
「なっ!?」
攻めが不発なのはまだいい。
自分がバランスを崩すという事態に、さすがに楓も慌てる。
そして自分の身体を見下ろして驚愕した。
足がもつれたのはスカートが脱がされていたからだったのだ。
今の僅かな攻防の間にスカートのホックを外されていたのだ。
それだけではない。
上半身はネクタイを外されてＹシャツのボタン全てが外され、
前を開いてだらしなく羽織っているだけにされている。
スカートは膝辺りまでずり下がり、拘束具のようになっている有様だ。
「やるでござるな、横島殿……」
スカートとＹシャツを脱ぎ捨て、楓は薄れてきた煙の中に声をかける。
仕掛ける前と同じ場所に立っている横島は、楓のブレザーを手に持ち
先ほどよりも更にいやらしい目で見つめ返して来た。
「いやいや、こっちの台詞だよ、楓ちゃん。
大きいとは思ってたけど、俺の想像以上に大きいな。

９０近いんじゃないか……？
全くけしからんおっぱいだ。
これはお仕置きしないとなぁ～」
空中をわきわきと揉む仕草をしながら、スケベな視線を向けてくる横島だが、
そのような露骨な挑発に引っかかる楓では無かった。
自分の力をこの未知なる格上の相手にぶつけたくて、
戦いを挑んだのだ。
出し惜しみせずの全力を出す。
「にんっ」
「おおっ」
楓の気合の声が上がると、横島が歓喜の表情を浮かべた。
楓の姿がなんと１６体に増えたのだ。
これぞ、楓の切り札『多重影分身の術』である。
高速移動による残像で多重に見えるなどという事ではない、
チャクラから発する気と霊気を融合し、
甲賀の秘術が完成させた質量のある分身である。
それぞれが楓の意のままに動き、攻撃は出来るのに

こちらが攻撃されても痛みはフィードバックされないという極めて強力な術だ。
「楓ちゃんがいっぱいっ！
おっぱいがいっぱいっ！」
攻撃を仕掛けている者が増えたというのに、横島は全く危機感を抱いてないらしい。
曲がりなりにも攻撃を仕掛けて来る相手が増えたというのに、
横島の態度は驚くべきものだ。
いや、微塵も脅威に感じていないからか、と楓は納得する。
だが、重要なのは横島が自分の身体に興味津々である事だ。
色香で実力差を覆すのは、くノ一として当然ある選択肢である。
楓は分身体の一人に胸のさらしを取らせ、飛び掛からせる。
楓とて羞恥心が全くのゼロではないが、そのような感情で敗北しないよう
鍛錬は積んできている。
あわよくば、という程度の仕掛けだったが横島は飛び掛かって来る楓を迎え撃たず
露わにした胸を凝視し、あろうことか抱きとめようとしていた。
分身体一人の身体を影に距離を詰め、攪乱しようとしていた楓には願っても無い事
だ。
実際、くノ一の技に突然全裸になるというものがあるが、

それは意表を突くという事だけでなく好色さに負けて相手が隙を作ったり
手心を加えて動きがぬるくなる事を狙っているのだ。
ストイックに修行を積んできた者にこそ、絶大な効果がある。
楓の胸は同年代どころか、成人女性の中でもかなり大きい、
サラシを取ってその実力を見せれば、好色な男では視線を逸らせはしない。
横島の反応は珍しくはあるが、楓の想定内でもあった。
「うっひょぉ～、楓ちゃんサービスいいなぁ～」
横島はそのまま分身体の胸に顔を埋めて抱き締めてしまっている。
炸裂符でも仕込めていればそのまま仕留める事も出来たかもしれない程の無防備さだ。
だが、制服姿だった事もあり、武装も本来の物ではない。
無い物ねだりをしても仕方がなく、
楓は瞬時に分身体を散らせて横島を包囲し飛び掛かった。
そして、またも楓は驚く事となった。
足元、膝、太もも、腰、腹、背中、肩、頭と四方八方から攻撃した。
姿を視認出来ている相手に１０の分身が襲い掛かり、
飛んで逃げられぬ様に四つの分身が上から襲い掛かったのだ。

避けられるはずが無い。
その必殺のタイミングで楓自身が最後に残った苦無で切りかかった。
だが、結果はその全ての攻撃を横島はかわし、いなし、
最初に抱きとめた分身を盾にもしてやり過ごした。
見ていた楓ですら何が起きたのか分からない程の動きだった。
もし楓の目が今より良ければ、横島が攻撃をかわすだけでなく
分身体全ての胸と尻を撫でていた事を知っただろう。
しかし、今の楓ではそこまでは分からなかった。
ただ気が付けば、切りかかったはずの右手は横島の左手に手首をつかまれ、
横島の右手に胸を掴まれている状況になっていたのだった。
「楓ちゃん、いくらなんでもこれは危ないなぁ。
俺が多少は護身術出来たから良かったけど、
下手したら怪我したり、死んでしまう可能性だってあるぞ」
「うっ」
横島の言っている事は間違いではない。
いくら不審だったとしてもやり過ぎではある。
だが、横島の右手がむにむにと楓の胸を揉んでいて

表情がだらしなくにやけているので、どうにも締まらなかった。
「それにしても楓ちゃん、本当に大きいね」
「あぅ……横島殿、これは婦女暴行ではござらんか？」
このように無遠慮に胸を揉むなど……」
横島はそれは嬉しそうに楓の胸を揉みしだいている。
楓も逃げれないかと隙を伺っているが、アイデアすら浮かばなかった。
右手はびくともしない。
左手は自由だが武器はない。
その上、横島の指が巧みなのか胸からもたらされる刺激で力が抜ける。
睨みあっているような構図だが、楓はもう捕らわれているようなものだった。
せめてもの抵抗として哀れを誘う媚声で非道を訴える。
「……あ、やめ……やめてくだされ……」
嬌声で隙を作るのはくノ一の基本戦術と言ってもいい。
房中術は座学程度しか修めていない楓だが、
女として生まれた以上その程度は習わなくても出来る。
くふん、と甘い声を漏らしながら力を抜く。
感じている振りで膝を曲げ力を溜め、わずかでも隙が出来れば

左上段蹴りで横島の顎を狙える姿勢を取る。
勝利の為に取れる手段は全部取るのが忍びだ。
奇麗事の好きな武芸者ではない。
とはいえ、問題は徐々に演技でない声が漏れ始めている事だった。
「いやいや、最初に言ったよね。
命のやり取りになるって」
「……あっ……あぅ……き、きいたでござるよ……
けれども、身を辱めるのはっ……また、違う話ではぁ……ござらんか……」
「違う話じゃないよ。
殺す、殺されるだけが命のやり取りじゃないでしょ。
楓ちゃんの中に新たな命を育むのだって、命のやり取りだよ」
楓は感情を殺す訓練も行って来たので、
滅多に驚いたり動揺したりする事は無いのだが、
この横島の言葉にはさすがに平静ではいられなかった。
この男は楓を孕ませると言っているのである。
武への興味が勝り、死をも覚悟していた楓だったが
妊娠する覚悟は出来ていなかった。

その動揺のままに、楓は身をよじって離れようとし、
胸部に衝撃を受けた。
「ぐふっ……」
「……一応、まだ戦いは続いているんだよ」
手を平に開いていた横島がまた楓の胸をまさぐり出した。
この技こそ『横島流奥義もみもみ発勁』である。
敵対した女性の胸部をまさぐり、己の欲望を満たし、
感じたり露骨に嫌悪したりと隙を見せればそこに発勁を撃ち込む。
煩悩をエネルギーとする横島は同時に
己の霊力をチャージする事も出来る一石三鳥の技である。
喰らった相手の心理的ダメージも考慮すれば、
ただ痛打を浴びせるよりも効果的な恐ろしい奥義である。
《ちなみに男向けに『もみもみ発勁ゴールデン』という技も一応ある。
喰らった相手は性別を変える事になる可能性もある禁断の大技で、
すくなくとも子供を作る事を諦めなければならないとされている。
横島自身が「なんで好き好んで男のなんか触んなきゃいけねーんだよ」と
行使に消極的なのが救いだろうか。

おかげで考案されたものの一度も世に出た事は無い》
とは言っても、今は非常に軽めに放っただけだ。
必要は無かったかもしれないが、楓はまだ戦意を失っていない。
降伏をうながす意味もあった。
「ううっ……」
はらりと楓のサラシが地に落ちた。
横島が微弱な霊気でサラシだけを切ったのだ。
しかし、それは楓には分からぬ。
乳房を握ったまま、何故サラシを切る事が出来るのか。
その気になれば自分を切る事も出来るのだろうな、と
恐れを抱くだけである。
いよいよ横島の指と手の平が楓の乳房を弄び始めた。
さわさわと乳房をこすり、指を乳房の中に潜らせ、乳首を撫でて転がす。
楓は忍びとして快楽に耐える訓練だってしてきている。
拷問は腹いせにする事が多いが、情報を吐かせようしたり
寝返らせようとするなら快楽で責める方が効果的だからだ。
だが、その楓でも胸から与えられる刺激には耐えれなかった。

甲賀の里に伝わるものを遥かに凌駕した女体への理解が、そこにはあった。
里で行われる耐性訓練はいわいる技巧に対してだけのものだ。
霊気と気を用いて身体だけでなく、
霊体にまで行われる横島の愛撫に耐えられるはずも無かった。
それでも粘れたのは、若くして中忍を許された楓だったからだろう。
三月の夕暮れは短く、赤くなったかと思うとすぐに暗くなる。
まだまだ風は冷たい。
内側から発する熱のおかげで楓は意外に寒さは感じていなかったが、
下手な動きを見せれば、また先程のように胸を撃たれると分かってしまうが故に、
ただ何も出来ず胸を揉まれ続けるだけだった。
かいている汗は冷や汗だけでは無くなっていた。
横島の無骨な手の平がさわさわぷにぷにと乳房を撫でると、
妙に身体が汗ばんでくる。
「はうんっ……」
刺激に耐えかねて楓が身をよじり声を漏らした。
何とか逆転の一手を、と粘っていた楓だったが、
胸先からもたらされる疼きに力が抜けた。

しまった、と思った楓だったが予想外に発勁は撃たれなかった。
ただ、指先はますます遠慮なく楓の乳房を揉み始めた。
乳首を擦られ転がされて楓は一体何を耐えているのか、
自身でも分からなくなり始めていた。
かき乱された落ち葉の上にとすっと苦無が落ちた。
くふんくふん、と自分の口から
演技ではない甘い声が漏れている事を自覚した楓の白旗だった。
勝機を見出せぬまま、足の間の疼きばかりが増していく。
いくら訓練していても楓はまだ年若い少女で
性行為にも妊娠する事にも恐怖と抵抗があった。
その為に逆転の道を探っていたが、尿意まで高まってきては諦める他無い。
「拙者の……負けで……ござるよ……」
「そうか、よく頑張ったね」
「せ、せめて厠に……」
尿意については言う事が出来なかった。
その前に引き寄せられて接吻されたからだ。
舌を舐められ、唾液を吸われる。

口をしゃぶられながら、ふんどしの中に指が侵入してくる。
女陰を触れられて楓は自分が濡れていた事を知った。
「一回、いっとこうか」
返事など出来ようはずもない。
ぬちゅぬちゅと自らの身体が立てる音を聞きながら、楓は絶頂というものを知った。
自慰でも快楽耐性訓練でもイクという感覚は知っていたはずの楓は、
無理矢理もたらされる安らぎと魂からの快感は知らなかった。
思考が真っ白に染まり、何も考える事も出来ず、
ふんどしをじょろじょろと汚しながら幸福な感覚のままに気を失ったのだった。

次に楓が目を覚ましたのは日が暮れた頃だった。
ぼんやりと目が覚めて、状況に驚いて飛び起きると自分が全裸である事と
バサッと落ちた制服が自分の身体にかけられていた事に気付く。
地面にスーツの上下が敷かれ、その上に横たえられていたのだろう。
近くにはパチパチと音を立てて焚火が起こされている。
場所も先ほど横島と戦った所ではない。
週末に泊まる場所に近い河川敷だった。

「おっ、目が覚めたか」
「あっ、横島殿……」
「いいの見つけたからこれで風呂にしようと思ってな」
これまた全裸の横島がドラム缶を片手に現れる。
河そばに降りていたから姿が見えなかったのか、と理解すると同時に
焚火の上にドンとドラム缶を下ろす姿に目を見張る。
ドラム缶自体は自分が泊る時に風呂に使う物だ。
それはいいが、ドラム缶の容量は２００リットルは軽くある。
それに水を汲んだ物を片手で運ぶのは怪力とかいう話ではない。
横島の身体は鍛え上げられた戦士の物であるが、
筋肉の量だけでいえばこのような事不可能だと断じれるものだ。
あの戦闘の後でもこれには驚く。
そして、ぶらぶらとしている横島のブツの大きさはそれ以上に楓を驚かせていた。
（あ、あんなに大きなモノは初めて……）
見たのである。
里の訓練で男を手でイカせる程度の事はしたことのある楓である、
男性器に驚いた訳では当然無い。

その大きさが何十本と見てきた楓からすれば非常識だったのだ。
「風呂湧くまで時間かかるから」
そう言ってぶらぶらと近づいてくる。
いや、ぶらぶらが徐々にググっと固くなって来る。
そこから視線を離せない楓の前まで来ると、それは臍に付くほど反り返ってしまった。
「楓ちゃん、口開けて」
呆気に取られていた楓だったが、言われた事を理解すると
スーツの敷かれた場所に戻り、座り込むと素直にあーんと口を開けた。
忌避感はある。
見る度に、まるで内蔵が外に出てきているかのような印象を持ってしまう。
処女であるが故の潔癖か、おぞましさも感じてしまう。
それでも楓は、もはや抵抗しようとは思わなかった。
勝負も完敗であったし、未知なる快感まで教えられてしまった。
元々、強き者には敬意を表す性質でもあるし、
出来れば初めては自分より強い男がいいなと願ってもいたのだ。
男性器に対する抵抗感はあっても横島に対しては無い。

「んぶっ……」
「そう、歯を当てないようにね」
目いっぱいに口を広げて横島のを口に含む。
突いてくるだろうか、と少し待った楓だったが
横島が動き出さないのを見て舌を這わせた。
「おっ、くぅっ、楓ちゃん上手いな……」
知識はあるし、模型で訓練もしている。
自分よりも圧倒的に強い姿を見ている為、
嫌悪感も屈辱も感じはしない。
問題は味や匂いだが、これがあまりに予想と違っていて
これだけが楓を戸惑わせていた。
美味しい、のである。
これも実は霊力が関係しているのだが、楓は知る由もない。
苦くて不味くて臭くて吐き気がすると教えられてきたのに、
横島のものの先端から溢れる液体は甘露ですらある。
戸惑うのも無理は無かった。
「楓ちゃん、出るよ……」

くちびるで扱き、舌で舐めとり、頬肉でこする。
夢中で奉仕をしている内に、頭を撫でていた手の平がぐっと力を入れてくる。
びゅっうと熱いシブきを口の中にまき散らされ、楓は懸命に飲み干した。
液体というよりはゼリーのような粘々とした感覚のそれを
喉に引っかかりながら飲み込んでいく。
出された物を飲んでしまうと、ちゅうちゅうと吸い取って、更に味わう。
奉仕する側だったはずの楓はその甘露な味わいに恍惚とした。
グロテスクな棒状の内臓と思っていた物が、素晴らしい物に思え
もっと舐めさせて欲しいと思った。
少しだけ元気を失った物が口から抜かれた時に寂しさすら覚え、
楓はいよいよ自分がおかしいと思い始めていた。
「良かったよ、楓ちゃん。
凄く上手だった」
横島の満足気な様子に安堵する。
頭を撫でてくれる手の温もりにうっとりしてしまう。
自分の心の動きがこんなにも理解できない事があると知らず、
楓は甲賀中忍ではなくただの生娘にされてしまっていた。

「さあ、立って、楓ちゃん」
頬から耳の後ろを撫でられて、楓はゆっくりと立ち上がった。
女の子座りをしてしまっていた為に、
ぬちゃりと敷かれたスーツとの間に銀の糸が伸びる。
「よ、横島殿……」
「なんだい」
「せ、拙者……その……せ、接吻を……」
楓が本当に言いたかった事はそうでは無かった。
ふんどしを履くために剃ってしまっている陰毛の事や、
女子として大きすぎる身長や、
汗臭いだろうからお風呂を先にして欲しいとか、
性器の形とか色とか匂いとか、
既に溢れるぐらいに感じてしまっている事とか
何故か妙に恥ずかしくなってしまい、弁明しようとしたのだ。
しかし、どうにも言葉に出来なかった。
ちゃんとしてくれるのかと不安にもなった。
出てきた言葉は思ってもみない物だった。

何故に口を吸われるとこうも幸福感が得られるのか。
何故にもっと舐めて欲しいと思うのか。
何故にもっと唾を飲ませて欲しいと思うのか。
ぐるぐると訳の分からぬ答えの出ない事を考えていると、
片足を持ち上げられ、腰を前に突き出させた。
はしたなくとろとろと液を吐き出すスリットにぐっと固い物があてがわれた。
楓に膜などはとっくにない。
激しい訓練の中で破れていたし、
色に負けぬための訓練の中で張り型を突っ込んだ事もある。
男性経験こそ無いものの、そういう意味では楓は処女では無いとも言えた。
しかし、それでも横島の物を受け入れるのは簡単では無かった。
「楓ちゃん、俺に掴まって」
言葉通りに楓は目の前の逞しい肉体に抱き着いた。
大きな乳房が筋肉に押し付けられ、ふにゅと形を変える。
楓自身はこれ以上無い程に濡れていたが、
横島の侵入はじわじわとゆっくり行われた。
楓は房中術を本格的に習っていない為、

女性器を使った忍術や骨抜きにさせる技を知らぬ。
美貌や肢体を考えれば房中術を修めれば里で一番のくノ一になったであろうが、
楓はくノ一でなく忍びになりたかったのだ。
武の才もまた際立っていた為に許された例外である。
ともかく、ただ力を抜き広げて受け入れる事しか出来ぬ。
「うぅ……んっ……んぐっ……」
「いいよ、楓ちゃん。
凄く気持ちいいよ」
浅い息を吐く楓を横島は優しく抱きしめながら、ゆっくりと貫いていった。
横島のものが大きすぎるがゆえに痛みを覚悟していた楓だったが、
不思議と痛くは無かった。
これは霊波によるヒーリングをチンコから行う高等技術を横島が行っているからである。
霊波を使える者が見れば、驚くべき光景だっただろうが
ここには楓と横島しかいない。
楓は自分の中に男を受け入れる感覚の想像との違いに驚き、
例え霊波の事を分かっていてもそれ所では無かっただろう。

出そうとしていない声が出るというのは初めての事だった。
押し広げられ、引き抜かれ、己の肉が張りついて追いすがるのも
蠢いて締め付けるのも、そうしようという意思がある訳ではない。
訓練の末に己の肉体を完全にコントロール出来るようになったと
思っていた楓は、それが自惚れだったと知った。
色で落とす、落とされるという事を里で重視され警戒されていた理由も。
見惚れられる事は珍しくなく、
いい歳をした男でも己の胸に視線を向けてくる事が多かった。
色で落とすなど本気を出せば簡単だと思っていたし、
落とされるなどあり得ないと思っていたのだ。
激しさを増した抽送に身体を揺さぶられて、
ふわふわと宙に浮くような感覚に浸る。
光る腕に両足を抱え上げられ、いわゆる駅弁と呼ばれる体位で貫かれながら
胸も揉まれて背中も支えられ接吻する時は頭の後ろを掴まれる。
（横島殿は手が何本あるんでござろうか……）
明らかにおかしい事は勿論分かるが、
そういった事も受け入れて楓は身を委ねた。

思考している余裕も無くなっただけ、ともいう。
「いくよっ、楓ちゃん」
返事らしい声は出せなかった。
うめき声を上げる楓をぐっと抱き締め動きを止めた横島は
どろりとした汁を注ぎ込んだ。
ねばねばとした命の素が、貪るように楓の若い子宮の中に侵入しいく。
身体の中で起こっている事を怖れるように、楓はぶるぶると柔らかな肢体を震わせた。
「凄く良かったよ」
横島はそう言って、ふにふにと楓の豊かな胸を撫でたが楓は聞いていなかった。
快感の波に耐えきれず、意識を飛ばしてしまっていたのだった。
この夜、楓は何度も横島に貫かれる事になり、
静寂な夜の森に嬌声を響かせ続けたのだった。

剣士ＶＳ不審者　前編

麻帆良学園の夜は闇が深い。
学園に引き寄せられてくる魑魅魍魎が蠢き、
時折その騒ぎを利用しようとする不埒な輩もいる。
一般の生徒達には存在すら見せられない者達を、
これまた秘匿されている者達が追い返している。
秘密を抱えた者達が跋扈する時間なのである。
春の夜は肌寒く、山の空気は若草の生命力に満ちている。
続報が全く無い、世界樹近辺に現れた不審者を探す為駆り出された
龍宮真名は街の明かりから離れ、山の中を捜索していた。
それは不審者とやらを捜索する特別任務でもあるのだが、それともう一つ。
まだ部屋に帰ってきてないというクラスメイト長瀬楓も捜索しているからだ。
楓の実力も真名はおおよそ分かっていて、
生半可な妖魔などでは相手にならない事は知っている。
それに楓が週末は山籠もりなどをして寮に帰らない事も。

だが、山籠もりする時でも同室者の鳴滝姉妹には一言言い添えていく。
クラスメイトが心配していたというだけで動く真名では無いが、
どうせ手がかりも無いまま不審者を捜索するのだから、
ついでにと楓の足取りを追っているのだった。
「……待て、刹那」
「っ、何かあったか!?」
同行する仕事仲間、兼クラスメイトでルームメイトの桜咲刹那に声をかけて、
真名が立ち止まる。
目に関しては刹那よりも真名の方が数段優れている。
その力を認めている刹那は、真名の言葉に素直に従い足を止めた。
「ここだけ落ち葉がおかしい。
枯れ葉がならしてある。
……見ろ、この木に刃物の跡がある。
おそらく、楓が手裏剣を投げたんだ」
「……っ!?
戦ったのか！」
「多分な。

問題はここから楓の痕跡が無い事だ。
もっともあいつがここから本気の隠形をしただけかもしれんが」
地面を探り、木を撫でてキョロキョロと辺りを見渡す真名を
刹那は苛立ったように見つめる。
別に真名に何か思う事がある訳ではない。
彼女なりに楓を心配する心が、そうなっただけだ。
表現が下手なのである。
「楓はかなり本気だったみたいだな。
だが、おそらく負けている。
相手は人間か同程度の大きさの者。
まあ、まず人間だろう。
そして、楓を無傷で捕らえる事が出来るレベルだ」
真名の言葉に刹那は絶句した。
楓は学園公認で裏に関わっている訳ではないが、実力はひけをとらない。
楓と戦うとなれば神鳴流剣士の刹那でも本気を出さざるを得ない。
ましてや無傷で捕らえるとなれば、本当の姿になったとしてもどうかというぐらいだ。

「……行方は分かるのか？」
「ああ……相手はあまり熱心に痕跡を隠そうとはしていない。
方向は分かる。
だが、おそらく強敵だ。
楓と交戦になった経緯は分からないが、油断はするな。
発見次第応援を呼ぶ。
二人がかりでも安心とはいかん」
刹那の喉がごくりとなった。
真名はプロの傭兵だ。
多くの魔法使いのように無償で奉仕している訳ではない。
それゆえに仕事に望む態度はシビアで、希望的観測で進めたりしない。
逆に小さな事で応援を呼ぶような、報酬に響く事もしない。
真名のこの態度だけで刹那には油断ならない相手に向かっていくのだと理解できた。

山中を二人連れでこそこそと歩いていく。
痕跡が罠で、誘い込まれている可能性も考慮し慎重を期す。
そうして一時間以上歩いた所で、真名が立ち止まった。

「……見つけたか?」
期待を込めずに刹那が問う。
真名が立ち止まるのは初めてではない。
どうせ、また「いや……」とか言われるだろうと思っていた。
「ああ……見つけた。
楓と……もう一人男がいる。
知らぬ顔だ。
気配もな」
「何っ!?
もしや件の不審者か!?
それに楓も一緒だと!
まさか捕らえられているのか?」
少し退屈そうだった刹那がいきなりやる気になって困る真名だったが、
状況を説明する事にはもっと困っていた。
かなりの距離があり、真名の魔眼でもはっきりとは見えないが、
見知らぬ男と楓は性交しているのだ。
それに楓も悦んでいるように見える。

無論、そういう態度を強要されているとか、
何か薬でも盛られたとか可能性はあるが、現段階では判断できない。
ただ、踏み込むのも躊躇われた。
「捕まっているという訳では無さそうだが……
仲良くしているようにも……見える……
まあ、待て。
今は不味い」
「不味いって何がだ!?
楓がいるのなら合流した方がいいだろう?
その男があの不審者なら一石二鳥だ。
尋問しよう」
「いや、だから待て……
応援も……今はまだやめておこう。
楓の今後の学生生活にかかわる……」
刹那からすれば真名の態度は全く理解出来なかった。
ここまで積極的に捜索してきたのに、
今になって妙に躊躇っている。

「何を言っているんだ?」
発見したのに合流しない理由など……」
刹那なりに合流出来ない理由とか、そういった状況を考えたが
まるで想像も出来なかった。
残念ながら彼女はあまり頭の出来は良くなかった。
「不味いっ、気づかれた!?」
「なにっ」
横島がこっちを見ている事に気付き、真名は木の後ろに身を隠した。
だが、刹那の動きは逆だった。
「ならばっ」
「あっ、待てっ」
真名が止めるのも聞かず、刹那は飛び出した。
正体を出さずに出来る最大の速度を持って、木々の間を縫って
開けた河川敷の方へと駆けていく。
前衛の刹那が敵を足止めし、真名が後方から狙撃するのがいつものフォーメーション
だ。
刹那の判断が間違っているとはいえない。

戦闘する事を前提とするなら、だが。
一方、横島の方はと言えば、真名と楓の事には気づいていた。
楓に地に手をつかせて、後ろから腰を掴んで貫く。
手押し車のような体位で楓の尻を鳴らしていた。
「楓ちゃん、山の中からこっちを見てる女の子がいるんだけど……
楓ちゃんの同級生？」
「はわっ……だ、誰でござるかっ……あぅっ……んぅっ……」
快楽にうっとりと浸っていた楓が慌てて辺りを探るが、集中出来ない。
横島は見られているなんて言いながらも動きは止めないのだ、
横島のモノを受け入れている時は大きすぎるソレに、ほとんど意識が持っていかれてしまう。
「こっちを見てるのは褐色の割と背の高い子だな。
とんでもなく目がいいんだろうな、結構距離あるのに目で見てる。
もう一人刀を持ってる細身の小さな子がいるが、
こっちは一緒にいるだけでこっちに気づいて無いな」
「あっ……そっ……その二人っ……」
横島の口から出る情報に、楓は心当たりがあった。

そのコンビなら同級生の真名と刹那だろう。
二人して夜出かける事があるのも知っている。
自分を探しに来たのなら放って置いて欲しいと思うが、
伝えようもない。
こっちに気付いているのなら来るかもしれない、
ならば当然性交を止めるべきなのだが、横島が止めてくれない。
体勢が楓に不利なのも良くなかった。
腰を掴まれて浮かされているし、貫かれている時は力が入らないし、
脚の付け根を掴まれてるから、手を離してもじたばたして宙を掻くだけだ。
「あら、こっちに来るみたい」
「やっ……ちょっ……」
木々の間から刀を構えた刹那が勢いよく飛び出して来た。
「楓を離っ……せ……？」
そうして数十メートル先で固まってしまった。
不審者が楓と一緒にいるという情報しか無かったし、
刹那は性的な事に免疫が無かった。
全く想定もしていない事態に頭がついていけず、

視線を逸らす事も出来ずフリーズしている。
楓もまた慌てていた。
いかに訓練していても、まだ羞恥心をゼロには出来ていない。
裸は別に同性であるし、寮の風呂で一緒に入る事もあるからいいのだが、
性交中はさすがに見られたくなかった。
しかし、横島は腰の辺りを掴んで離してくれないし、
じたばたすらしようがない。
手の平を突き出して、刹那からの視線を遮ろうとするのが精一杯だった。
受精する瞬間をクラスメイトに見られて喜ぶ趣味は無かった。
一方、横島だけは平然としていた。
ここで出てきたのが男なら横島は楓を隠していただろう。
他の男に楓の裸を見せてやりたくない。
だが、飛び出して来たのが女性なら行為を止める理由もない。
この男は女に見られて喜ぶ事はあっても、恥ずかしいなどとは思わないのだ。
「楓ちゃんの友達かな？
ちょっと待ってね、終わらせるから」
「あぅぅんっ……こ、こっちを……はぅぅ……」

結果、片手を刹那の方に出した楓を横島が高速で突きまくる事になった。
言葉も発せない楓を横島は容赦なく攻め立て、
短い言葉を吐いて動きを止めた。
びゅるびゅると楓の中に横島の体液が注がれていく。
楓はクラスメイトの前である事も忘れ、思考がスパークし
小さく甘い声を漏らしながら、ぶるぶると身体を震わせてしまうのだった。
横島は楓の中にしっかりと出し終えると、
すっかりと元気を無くしたモノをずるりと引き抜いた。
楓の若々しい女陰からぼたぼたと白い液体が零れる。
赤黒い成熟した男性器の姿に刹那はますます声を失った。
動けない刹那の前で、横島は腰を開放され力無く女の子座りをする楓の前に回り込み
ぬとぬとになった性器を突き出した。
この夜、何度もさせられた事だ。
条件反射的に楓は口に咥え、刹那がいる事を思い出して
せめて、と先ほどと同じように手を広げて前にやった。
横島に対して奉仕を拒否出来る関係では無かった。
そうして楓の舌で自身のモノを奇麗にさせると、

楓を正面から抱きあげてすっかり温くなったドラム缶風呂にそっと入れた。
横島は羞恥心や倫理観が壊れているだけで、女の子に優しい部分もあるのだ。
「で、君は何なんだい？」
ようやく乱入してきた刹那に横島は向き直った。
横島は裸である。
友達のセックス見て固まったのか、と
ようやく横島は思い当たり刹那に近づいた。
「俺は怪しいもんじゃないよ。
一応、言っておくけどレイプなんかじゃないからね」
などと言いながら近づいてくる。
横島は裸である。
ぶらぶらしている。
剣の道をひたすら歩み続けた刹那は性の知識も乏しければ、免疫も無い。
セックスしていたらしいのは分かるが、
その後の口に咥えさせるのは全く理解できない。
ましてや楓は泣き声にも聞こえるような声を出し、
性交中も口に咥えさせられた時も手をこちらに伸ばしていた。

あれは助けを求めていたのかかも、と今頃気付く。
何よりもぶらぶらしながら近づいてくる。
「来るなぁっ！」
結果、刹那は悲鳴じみた声を上げ、刀を上段から振り下ろした。
潔癖な処女らしい反応ともいえるが、
そのとっさの一撃はそんな反応程可愛らしいものでは無かった。
人非ざる者が十年磨いた渾身の一振りである。
尋常の速度ではない。
だが、ドラム缶の下にある焚火と星明りしか光源の無い闇に
白刃の煌めきが振るわれた後、立っていたのは横島だけだった。
「うわっ、あっぶないなぁ……
楓ちゃんといいこの子といい、
若い女の子は刃物振るうのが常識なのか、ここ？」
横島の声は呑気だ。
とても当たれば即死の斬撃をいなした態度ではない。
楓には横島が何をしたのか、見えなかった。
ただ刹那が刀を振るっている最中で腰砕けになり、

気付けばへたり込んでいた。
行為の余韻でぼうっともしていたが、
この距離で何も分からぬ力の差に楓は恐ろしくもあり、嬉しくもあった。
自分を抱いた男には底が見えぬ程強くあって欲しい乙女心が楓に芽吹いていた。
「な、何をしたでござるか……？」
「ん？
ちょっと無力化しただけだよ。
傷つけてないから」
そう言って、横島は指を一本立てた。
そう今横島が行ったのは『一指拳』である。
簡単に説明してしまうと最適な威力の高速カウンターだろうか。
相手が５の力で来たら５の力で、相手が９の力で来たら１の力で迎え撃つ。
相手を傷つけず、壊さずに無力化する為の技である。
しかも、今横島が行ったのは更に洗練・高度化された究極秘技
『横島流究極奥義・乳首一指拳』
であった。
相手の攻撃を先読みし、身体の動きを察知し、急所を一撃で突く、

そこまでは一指拳と同様だが、
乳首一指拳は更に相手の乳首の位置も感度も見抜かねばならないのだ。
それを刹那が刀を振りかぶってからの〝後の先〟で動き、
刹那の斬撃よりも早く、踏み込んできた刹那の乳首を突き
絶頂させて刀が振り下ろされるよりも早く飛びのいた、
これが今見せた横島の動きの全容である。
神業としか言いようのない、元の世界でも横島以外に使える者のいない秘技だ。
相手を傷つけずに無力化するだけでなく、
快感までも与えている優しすぎる技だが何故か女性陣からの受けはすこぶる悪い。
ちなみにこの技に対男用は無い。
開祖である横島が「男を無傷で鎮圧する必要がどこにある」という考えだからだ。
男相手には5の力に対して１００、９の力に対して１００で構わないらしい。
「あっ……あ、あ、あんっ……」
横島流奥義を喰らってしまった刹那はといえば、
座り込んだままびくびくと震え甘い声を漏らしていた。
率直に言ってしまえば絶頂していたのだ。
これが乳首一指拳の恐ろしさでもある。

中国拳法に伝わる一指拳に霊気を上乗せしているのである。
乳首を性感帯として開発されてない処女でも、
命の根源、魂を愛撫されれば一溜りもない。
楓も刹那も気づいていないが、刹那の制服の胸部分には
丁度指サイズに穴が開いている。
もう少し余裕があれば服越しの完璧な感度をも探れたかも知れないが、
不意打ちを受けてはさすがの横島も乳首ぐらいは露出させねばならなかった。
物理に干渉できる程、凝縮した霊気で乳首部分にだけ穴を開け、
乳首を刺激すると同時に優しい霊波で相手の霊体を愛撫したのだ。
「やっ……やぁっ……」
脚にも腰にも力は入らず、立ち上がれない。
何をされたか知らないが、身体は火照りぴくぴくと震えている。
それに甘い電流のような刺激が止まらず、
刹那は無意識にスカートの中をとろとろに汚してしまっていた。
刹那の乏しい性知識と経験では自分の身体に起きている事が理解できなかった。
何しろ刹那は自慰すらした事が無かったのだ。
イッた事すら生まれて初めてでは何も分かるはずはない。

分かるのは自分の渾身の斬撃は通用しなかったという事だけだ。
「意識があるのか。
凄いな、久しぶりに見誤った」
絶頂失神させるつもりだった横島が本気で驚いている。
だが、刹那にとってどっちが幸せな事だったのかは分からない。
下手に意識がある事で、刹那の身体は目の前の強烈な雄に反応してしまっている。
只でさえ筋骨逞しい成熟した男が、全裸でぶらぶらさせながら
絶頂に導いたのである。
刹那の身体が雌としての反応を始めてしまうのも無理は無かった。
「あうぅぅ……」
涙目で男を見上げながらも、
刹那は腰がぴんぴくんと跳ねてしまうのを止められない。
本人にそのつもりは無いだろうが、
その様子は男を誘っていると言われても仕方のない姿である。
「で、君は何なんだ?
いきなり斬りかかって来るなんて穏やかじゃないなぁ」
そう言いながら横島はへたり込んだ刹那の前でしゃがみこんだ。

戸惑いと恐怖と混ざった涙越しの視線が、横島に向けられる。
「んー……イクのが初めてだったのかな？
怖くないよ、怖くない」
「はぅ……」
てっきり刹那にもいやらしい事をしようとしていると思っていた楓の前で、
横島は以外にも刹那の頭をそっと撫で始めた。
「俺はただ気持ちよくしてあげただけだよ。
気持ちよかったろ？」
優しい声で横島は問いかけると、刹那は動けないながらもこくんと小さく頷いた。
元より刹那を知る楓にはその素直さが意外でもあったが、
あまりに想定外な出来事に反発する心すら湧いてこないのかと推測した。
「俺は横島忠夫って言うんだ。
君の名前教えてくれる？」
「さ、桜咲刹那……です……」
横島は頭撫でから肩抱きに移行して、刹那の目を見つめている。
刹那は状況が分かっているとは思えないが、
何故か横島の腕の中で安らぎを覚えているようだ。

楓からすれば驚くべき事だが、勿論裏はある。
一つは恐怖の後に安心させるというヤクザな手口を地でやっている事。
抱いていた恐ろしさが大きい程、そして与える安らぎが大きい程効果的である。
そして、もう一つは接触と共に霊波を送りこんでいる事だ。
優しく労わる心で霊波を繋げれば、安らぎを伴う気持ちよさがある。
横島はそれで、強引に好意を勝ち取っているのだ。
魂の安らぎを与えてくれる相手を嫌う事は、よほど意識しなければ難しい。
ましてや修行に修行を重ねた横島は魂の磨き方が違う。
霊格が圧倒的に上なのだ。
いかに刹那が神鳴流の修行をしていても、
何をされているのか理解出来ない状況では抵抗など出来ようはずも無かった。
「刹那ちゃんは楓ちゃんを探してたのかな？
誰かに言われて？」
「あ、いえ。楓捜索はついでで……
不審者を探すのが本来の目的で……」
横島のやり方も、効果的な相手とそうでもない相手がいる。
それは言ってしまえば寂しさの度合いである。

安らげる相手が多い者には横島はただその内の一人でしかない。
会ったばかりで親友扱いされるのは有効ではあるが、それだけだ。
だが、安らげる相手がいない、もしくは極端に少ない場合は恐ろしい事になる。
人生で初めて出会った心から安らげる相手。
依存されてもおかしくない程の場所に入り込む事になる。
刹那の場合が、正にそれだった。
両親は既に亡く、出自の一族からは疎まれて、
保護してくれた親代わりは京都にいて滅多な事では会えない、
唯一の親友だった娘とはろくに話す事も出来ないでいる。
そもそもが人間の中で、自分だけが違うと思って暮らしている刹那だ。
効果はばつぐん、である。
「不審者って？
それにどうして刹那ちゃんみたいな若くてぴちぴちの美少女が
こんな夜中にそんな事してるんだい？
もっと他の人はいないのかな」
「び、美少女って……そんな……」
頬を染める刹那に横島がにこやかに微笑みかける。

「もしかして言われ慣れてないの？
刹那ちゃん程の美少女が。
この世界の男はふがいないないなぁ」
二年間クラスメイトだった楓も見た事無い笑顔を刹那が浮かべる。
無表情にクールぶってるか、仏頂面をしているか、
物陰で近衛木乃香を心配そうに見つめているかぐらいしか
顔のパターンが無いと思っていた刹那が、である。
楓はようやく横島がただとんでもなく強いだけじゃないと気付き始めた。
「あ……」
「服も汚れちゃったみたいだからね」
横島が左手に刹那を抱きながら、右手で刹那のシャツのボタンを外し始めた。
上から順にぽつぽつと外していく。
ゆっくりと丁寧に。
強引さは無く、抵抗しようとすればいくらでも出来るはずだが、
刹那は顔を赤くして見下ろしているだけだった。
そうして、前のボタンをすっかり外してしまうと、横島の手はその中に侵入した。
刹那のキャミソールをめくり、白い地味なブラに手がかかる。

「や……」
背中のホックに手がかかった時、刹那の口から小さな声が漏れた。
その音に反応した横島と刹那の視線が交わり、
唇も重なっていった。
断らなそうだと見るや否や、手を出す。
それが横島だった。
「んん……」
刹那の小さな唇がべろべろに舐められて、こじ開けられる。
初めてのキスで何をしたらいいかも分からぬ刹那の
初雪のような口腔にぬるりと舌が差し込まれた。
歯茎も歯の裏側も舌も横島の舌が味わうように舐めていく。
唾液を飲まされ、震える小さな桜色の舌も余すことなく舐めつくしていく。
もちろん、舌からも霊波は送り込まれ、
熱に浮かされたまま刹那は悦んでしまっていた。
横島の舌が刹那の口に侵入した頃、
横島の右手はそのままブラを外し、刹那の小さな胸を露わにしていた。
キスされながらでも刹那は身動ぎをして

コンプレックスの一つである小さな胸を隠そうとしたが、
それは横島が許すはずもなかった。
真っ白い肌の僅かな膨らみを壊れ物を触るように、
そっと横島の指が這う。
ふもとからそろそろと撫でさすり、頂きに押し上げるように
ふわふわと撫でていく。
ぷっくりと膨らんだ桜色の頂きを指の腹で掻く。
「あぅっ……」
乳首への刺激に耐えかねて、刹那が唇を離して声を上げた。
その瞬間、横島の右手は刹那から離れ、空中を掴んでいた。

剣士ＶＳ不審者　後編

「ったく、本当に物騒だなー、ここ」
「えっ、な、なに……？」
横島の手の中にはライフルの弾があった。
それも二発。
音がほぼ一つに重なる速度の連射、それも精度も完璧だ。
とてつもない手練れである。
しかし、所詮は銃。
戦う相手と言ったらもっぱら人外相手だった横島からすれば、致命的に遅い。
「刹那ちゃんと楓ちゃんのお友達かな？」
そう言いながら横島は呆然とする刹那を離して立ち上がり、空中に手をかざす。
するとそこから光る縄のような物体が現れ、音もなく山中へと伸びていった。
楓も刹那も見た事の無い力に目を見張る。
二拍程の間を置いて光る縄がしゅるしゅると戻って来た。
その先に亀甲縛りされた少女をつけて。

「よっと」
「うおおおおっ」
巫女服の上から亀甲縛りされた褐色の少女が降って来て
横島の腕の中に納まった。
俗にいうお姫様抱っこの状態である。
「いらっしゃ～い、ってね」
「くぅっ……」
「真名っ」
「真名……」
龍宮真名もまた横島の腕の中で、驚きと恐怖の混ざった顔をしている。
それはそうだろう。
未知なる力で無力化されては平然とは出来ない。
むしろ、恐慌をきたしてないだけ凄まじいといえる。
「で、どういうつもりなのかな？
俺、なんか君に狙撃されるような事したかな？」
「……変質者からクラスメイトの貞操を守ろうとしたのさ。
正当防衛とまでは言わないがね」

「へ、変質者……まあ、否定も出来んが……」
「出来ないんですか!?」
「出来んでござろうな……」
何しろこの場にいる女子中学生は全裸と半裸と亀甲縛りだ。
「それだけでライフル狙撃かー。
全く酷いな」
「女子中学生をこんな縛り方する方が酷いと思わないかな？
なんなんだい、この光る縄は」
真名は山の中からじっと観察していたのだ、
失敗に終わってもこの男は自分を殺しはすまいと思っていた。
それがゆえに、この口の利き方である。
ドスケベみたいだから貞操は危ういが、
逆にドスケベな分だけ生存率は高い。
分の悪い賭けだと思いながらも狙撃したのは、
成功した場合のメリットとデメリットを計算したからだ。
もっといえば、刹那に挿入でもしていれば成功率はほんのもう少しは上がっただろうが、

さすがに一応とはいえ相棒の処女を見捨てる事は真名にも出来なかった。
それに躱されても距離はある。
逃亡すら許されない程だとは真名も思っていなかった。
「これは霊気だ。
分かるかな？
楓ちゃんは少し使ってたみたいだけど」
「霊気!?」
「そんな……物質化してますよ!?」
「いやはやこれが……霊気でござるか……」
三者三様に驚いているが、認識は当然違う。
真名はそのような力があるらしい、程度にしか霊気を知らない。
楓は分身の術等で実際使っているが、甲賀の秘術の助けがあってだ。
刹那は神鳴流剣士として多少は扱える、が符に込める程度である。
使っている二人の方が驚きは大きい。
何しろ修行の果てに僅かに使えるのが精々なのだ。
目に見える程の霊気など伝説上の話だ。
神とか仙人とか、そういうレベルである。

「霊気が目に見えるなんて聞いた事無いんだけど……」
「当たり前でござる！
甲賀の開祖ですら霊気そのものを可視化出来たのは
僅かな時間だったと聞いてるでござるよ？」
「そうですっ。
神鳴流でも霊気の剣を作れるのは一つの大きな到達点とされてますっ！
昔はそんな達人がいた、という伝承でしか聞いた事ありません。
そ、それに服が破れたりしてないのはなんです？
霊気で縛るなんてしたら八つ裂きになっちゃうんじゃ……」
驚きすぎて楓は風呂から飛び出し、横島の腕の中の真名をまじまじと見つめている。
刹那もそうだ。
立ち上がって、真名を縛る霊気縄を見ていた。
「それは霊気の収束が荒いからだ。
霊気はそもそも形が無いものだから、心がそのまま反映される。
戦おう、相手を傷つけよう、という意志が混ざるから剣になるんだ。
霊気はただ霊気だ。
心を制御出来ればただの便利な物だよ」

はぁ～っと楓と刹那が感嘆の声を上げるが、
居心地が悪いのは真名だ。
どれだけ凄い技で縛られていようが、
亀甲縛り姿をクラスメイトにまじまじと見られて嬉しいはずがない。
それに、だ。
狙撃してきた者を攻撃する意思も無しで拘束する、など考えられない話である。
普通に考えれば殴られてもにこやかに応対できるのは相手が幼児のような超格下相手だろう。
つまり、この横島という男からしたら自分は超格下、という結論になる。
実際の所、それだけでも無いのだが真名からすればそう考えざるを得なかった。
「横島さん、そろそろ降ろしてくれないか？
逃げやしないよ。
逃げられもしないだろうけどね」
「ああ、そうだな」
そういって真名を地面に降ろすが、さわさわとお尻を撫でるのは忘れなかった。
横島からすれば尻を撫でるぐらい、挨拶でしかない。
本当にスケベなのだな、と改めて真名は横島を認識した。

それに霊気の話に合点もいった。
何しろ、この光る縄は股に食い込んでいる部分だけ、
時々揺れたり、太くなったり細くなったりと刺激してくるのだ。
横島のドスケベな意思が反映されてるとかしか思えなかった。
「拙者との仕合では使ってなかったようでござるが……」
「いや、手裏剣掴む時に使ったよ。
毒塗ってあったら嫌だし」
うぬ、と楓が唸る。
確かに手裏剣は掴まれた時の為に毒を塗ると言い伝えられている。
だが、手裏剣を掴めるような敵などそういない為に今では廃れているのだ。
自らが怠っていた一手にまで対策されていたと知り、楓は羞恥で顔を染めた。
「楓は死合ったの？」
「完敗でござった。
手も足も出ぬ、とは正にあの事でござろうな。
霊気の力も引き出せぬ有様……」
武に生きる者としての純粋な好奇心で刹那が問う。
その答えはとんでもないものだった。

とはいえ、刹那自身一瞬で無力化されているのだから納得ではある。
「で、君の名前を教えて貰っていい？
俺は横島忠夫って言うんだ。
君は知ってたみたいだけどね。
読唇術？」
「ふっ、目がいいんでね。
私は龍宮真名だ。
それで、私はどうされるのかな？
貴方がとても強い事はよく分かったよ。
降参だ、負けだ、参った。
出来れば命は助けてもらいたい」
真名は手こそ後ろ手に縛られているが、足は自由だ。
股縄がきつく食い込んでいるので、走るのは困難かもしれないが逃亡できなくはない。
しかし、真名自身もう諦めてしまっていた。
大人しく慈悲を乞う方が得だろうと計算している。
「それに、ここで殺人を犯すのは横島さんも困る事になると思うよ。

今でさえ楓が失踪したって騒ぎなのに、
更に続けて女子中学生が行方不明になれば捜査は苛烈になって、
あなたがどれだけ強かろうと、いつか追い詰められるだろう」
「いやいや、別に殺す気なんか無いよ。
君たちのような美少女を殺すなんて世の損失だ。
あり得ない」
そう言ってくれるだろうと思いつつも真名は内心安堵した。
圧倒的強者に生殺与奪の権利を握られて、不安を覚えない訳が無い。
「でも、因果応報、自業自得なんて言葉もある。
よく殺そうとしたんだから殺されても文句は言えない、なんて言うだろう？
俺はちょっと違うんだ。
殺そうとしたんだから孕まされても文句は言えない、って主義だ」
うぐっ、と真名は絶句し刹那は顔を赤くし、楓はお腹に手を当てた。
「……私は麻酔弾を使ったよ。
殺そうとはしてないが……」
「そうだなー。
じゃあ避妊セックスぐらいが妥当かな」

「……海の見えるスイートルームとまでは言わないが、
もう少しロマンチックな場所でお願い出来ないだろうか。
私はそういうの大事にしたい主義でね」
どうにか今日この場でというのを回避しようと真名はあがく。
今日さえ乗り切れば明日は情勢も変わるかもしれない。
魔法協会が出てくれれば、
学園長が出てくれれば、
明日はもっといい女に夢中になるかも、
諦めてくれる可能性は色々ある。
ただ真名自身がスタイル抜群の美少女である為、
よほどの事が無い限り諦めてくれるというのは期待し辛いのだが。
しかし、助け船は現れた。
刹那が口を挟んできたのだ。
「あの、横島さん……
私と立ち会って頂けないでしょうか。
私で勝てるとは思えませんが、力を試したいのです。
勝負の結果はどうあれ……いえ、私が負けるでしょうが……

この貧相な身体で良ければ好きにしてもらって構いません。
そして、出来れば真名を許してやって下さい」
刹那の表情は真剣そのものだった。
霊気の物質化を成しえる程の実力者と立ち会ってみたい。
つい先ほど苦も無く負けてしまっているが、
あれは立ち合いと呼ぶのもおこがましい物だった。
正面から挑みたい、という思いが湧いてきたのだ。
他に趣味らしい趣味もなく、
ひたすらに剣の道に打ち込んできた刹那からすれば
何を支払ってでも、叶えたい欲望だった。
それに、刹那とて学力以外はバカでもない。
現実主義者の真名があのタイミングで狙撃してきた意図には気付いていた。
「刹那……」
助かった、という思いと
いいのか、という思いで真名が見上げる。
「……友達思いの刹那ちゃんに免じて、それでいいよ。
ただ、また襲ってきたら無効だけどね」

「では……！」
「恰好もタイミングも刹那ちゃんの好きにしていい」
そう言われて刹那は自分の恰好に気付く。
慌てて半脱ぎの制服のボタンを止めようとして、手が止まる。
そうして、刹那は逆に制服を脱ぎ捨てた。
上だけでは無い。
スカートもだ。
更には、靴も靴下も脱ぎ捨て、裸足で地面を踏みしめ、
パンツ一丁という女子にあるまじき姿で手放していた刀を拾いにいく。
「刹那……」
「全力を出す……そう決めたんだ。
それに無策という訳でもない。
何も言わないでくれ」
刹那がそうしている内に、横島は楓を抱えてまた風呂に放り込んでいた。
「湯冷めするよ」
そう言って横島は楓入りのドラム缶を少しだけ抱え上げて、焚火の上に置いた。
楓は既に見た光景だが、刹那と真名はやはり驚く。

しかし、二人の視線を気にも止めず横島は楓の口を吸って、
駄賃とばかりに湯舟に浮いた楓の胸をふよふよと揉んだ。
「横島さん……いいでしょうか」
「いいよ」
刹那の気合のこもった声とは対照的に横島は軽い。
ぶらぶらと無造作に歩いて来て、霊気の塊を地面に投げつけた。
光り輝く弾がバフッっと弾けて、地面から砂利を一掃する。
「これは……」
「やるんなら全力出したいんだろう？」
「……ありがとうございます」
刹那は礼を言うと、目を閉じた。
横島の態度から受けてくれると信じ、己の力を高める。
刹那の背は１５１㎝と低い。
体付きも細いが、身体は間違いなく引き締まっている。
烏族は空を飛ぶ為に小柄で細身なのである。
その為、その血を引く刹那は肉の付き辛い体質なのだ。
胸も尻も慎ましやかなのはもうしょうがない。

だが、それでも鍛錬してきた時間は刹那の身体にしっかりと宿っていた。
刹那は極限まで気と霊気を高めると、
体中に巡らせて自分の全てを開放した。
「ッ……!」
刹那の華奢な背中から真っ白な翼が現れる。
同時に元々白かった肌が更に白くなる。
滑らかさも相まって、まるで白磁のような肌をさらす。
いっそ幻想的ですらある光景だった。
夜の闇に純白の翼がひろがり汗で磨かれた白い裸身が浮かんでいる。
同性である楓や真名でも見惚れる美しさだった。
「ハァっ!!」
裂帛の気合の踏み込みと共に
最も信頼する相棒「夕凪」と上段から振り抜く。
京都神鳴流奥義『斬空閃』
刀から斬撃を飛ばす奥義である。
そして、それだけでは無い。
自らが振るった斬撃に追いつく程の速度で突撃、

振りかぶった刀に雷をを招来する。
京都神鳴流奥義『極大雷鳴剣』
刹那の扱える技の中で、正真正銘最大の威力を誇る技であり、
斬空閃と合わせたこの刹那オリジナル究極奥義は
その威力を十倍に高めるとかいう噂もある。
落雷のような轟音を立てて振るわれた刀。
その斬撃速度は雷速と同等以上と言われ、
威力もまた雷の直撃にひけをとらないという。
しかし、人工的に地に落とされた雷は、
横島の光る手の平の間に受け止められていた。
「白刃取り……」
風呂に浮かんだ楓が驚嘆の声を上げる。
縛られたままの真名は見えてしまっただけに、声すら出ない。
「……やはり、届きませんでしたか……」
「いや、凄いよ、刹那ちゃん。
霊気の盾なんて使ったの久しぶりだ。
凄いな、刹那ちゃん。

まさかギガストラッシュクロスを撃って来るとは思わなかった」
きょとんとする刹那に、横島は笑いかけた。
「いや、ごめん、何でもない。
ただ、戦いの前に負けたら身体を自由にしていい、なんて言うべきじゃなかったね。
あれで、やる気になっちゃったから」
「あ……あぅ……」
横島の光らない方の剣が見せつけるようにギンギンに奮い立っている。
赤黒くそそり立ち、血管を浮かべてはち切れんばかりに怒張して、
先からは透明な液体をにじませ、雄の臭い臭いをまき散らしている。
「あ、あの、横島さんは私が嫌じゃないんですか？
こんな穢れた身体なんて……」
今度は横島がきょとんとする番だった。
刹那の自虐的な言葉の意味が分からない。
「いや、あの、私人間じゃないですし……」
まるで通じていない事に何故か刹那の方が焦り、弁解をする。
これが刹那のもう一つの策だった。
いや、策などというには稚拙にすぎる考えだが、

刹那の中ではそうだったのだ。
本性を見せれば、横島も汚らわしさに眉を顰め
性的な要求などするはずが無い、という。
無論、横島という男がそんな事で萎えるはずが無い。
「俺も色々やってきたけど、さすがに天使とは初めてだなー。
天使共ってなんか俺を毛嫌いして滅多に会ってくれないし……」
「い、いや、そんな天使だなんて……」
刹那は自分を天使だなんて言われて照れているが、
真名と刹那は横島の言葉に引っかかりを覚えていた。
「あいつらって妙にタカビーで偉そうだかんな。
刹那ちゃんみたいに可愛い天使は初めてだよ」
「あっ……そんなっ……」
そう言って横島は羽を出したままの刹那を抱き寄せた。
刹那の手から夕凪が零れ落ちる。
「わ、私、烏族のハーフですっ……
そんな天使なんかじゃ……」
「そうだな、あんないけ好かない奴等と一緒にしたらいけないね。

ごめん、刹那ちゃん。
嫌いにならないで、お願い」
「嫌うだなんて……そんな訳ない……」
種族の事すらも受け入れてくれるらしい、と刹那の瞳がうるうると輝く。
もはや、横島しか見えていない様子だ。
横島もまた刹那を抱き寄せて、だらしない顔で小さなお尻を撫でている。
「横島さんは天使に会った事あるのかい……って、聞いてないね」
「今の口ぶりだと会った事あるみたいでござるが……」
「うん……この人ならマジで有りそうだ……
是非、話を聞きたいけど
今、邪魔したら刹那がキレそうだから黙っとくか」
「そうでござるな。
拙者もあのタイミングで邪魔されたら怒りたくなるでござるからな」
蚊帳の外に置かれた楓と真名がひそひそと話をする。
もう二人も刹那が横島にどういう感情を持っているのか気付いている。
パンツを引き下ろされて頬を染めているのだから、勘違いすら出来ない。
「わ、私でこんなになってるんですか……？

こんな穢れた翼の貧相な身体で……」
「刹那ちゃん、見たらわかるだろう？
刹那ちゃんのこの小さな、奇麗なまんこに入りたいって、
この中にずぼずぼと突き刺して、妊娠させたいってこいつは訴えてるんだ」
つるつるの真っ白いマシュマロに一本線を引いたような性器を
横島の鍛え上げられた指がさわさわとくすぐる。
刹那の腰が引かれようとするが、それはお尻を撫でていたもう一つの手が許さなかった。
ぐいっと前に突き出させて、色素のまるで無い割れ目をぐにぐにと撫でていく。
「あっ……んんっ……妊娠……妊娠するの……困る……
困りますけど……っ……」
困る、困ると言いながら刹那はとろとろと蜜をこぼして、
顔もまた、眉を寄せながら何かを期待するように見上げている。
「刹那ちゃんは負けたんだ。
負けたからには孕まないとね。
ほら……もう、刹那ちゃんのおまんこは準備できてる」
「あっ……」

ぐいっと刹那の身体が持ち上げられ、横島のバキバキに漲ったモノの上に降ろされる。
小さな肉の薄い尻を掴まれて、前後に揺らされ、
割れ目から溢れる蜜を肉の棒に塗らされて、あてがわれた。
「ほら、入っていくよ、ほら」
「あ、ああ……」
刹那の体重が彼女の華奢な身体を少しづつ少しづつ沈みこませていく。
横島の首に縋り付いて、小さな胸を逞しい筋肉に擦り付けながら、
彼女の穢れ無き割れ目はゆっくりと押し広げられていった。
「ああっ……やぁっ……」
亀頭がぐぐっと刹那の肉を押し広げて入っていく。
刹那は逃れるように横島に抱き着いていたが、
横島の手は刹那の細い腰を掴み、下の方へと力をかけていった。
楓も真名も声も無く見守っている。
じたばたと白い脚が暴れるが、逃れる事は出来ず、
やがてだらりとぶら下がると、
ずるずると横島と刹那は一つになっていった。

「あうぅぅ……」
「大丈夫だよ。
大丈夫」
ふぐふぐと泣き出した刹那の頭を横島の手が撫で始める。
そもそもがサイズが違い過ぎるのだ。
１８１㎝あり膜の無かった楓でもきついサイズなのに、
刹那は１５１㎝しか身長が無い。
当然、身体も小さくあそこも小さい。
その上、正真正銘の処女だ。
激しい修行はしていたので膜は無いかもしれないが、
楓と違い張り型を突っ込んだ経験も無いのだから、無理があった。
それでもなんとか入ったのは刹那が人外とのハーフだったからかもしれない。
そうして、横島は身体の小さな中二の少女の狭すぎる膣を無理矢理に押し広げ、
暴れる様を愉しんでから、霊波ヒーリングを行った。
「あ……あ……」
自分の中に入った大きな異物から暖かい波動が送られて来る。
痛みしか無かった身体の内側からじわじわとぽかぽかとした感覚が染み始め、

刹那は抱き着いていた手を横島の肩に置きなおして、
結合している部分を見下ろした。
自分の腕ぐらいあるモノを飲み込んで、刹那の性器は広がり切っている。
自分の身体がこんな事になってしまうのかと刹那が目を見開く。
「よ、横島さん……」
「すぐに気持ちよくしてやるから」
見ただけで痛そうなほど広げられて、突き刺されているにも関わらず、
刹那は不思議な感覚を味わっていた。
痛みはある。
しかし、痒みが収まるような快感も同時にある。
みちみちと音を立てて、肉を裂かれながら
自分が中から蕩けているような、
横島との境目を失っていく感覚。
痛みと快感が交互に襲って来て
心は安らぎと興奮を同時に味わっている。
視界が開けていくような、狭まっていくような感覚だった。
（横島さんって、いい匂いするな……

お風呂入ったのか……私も入ってからが良かったかな……）
痛みだけに囚われていた感覚から解放され、
ずんずんと貫かれる衝撃が徐々に徐々に心地よくなって来る。
目の前の裸の男に抱き着きたい気持ちと、
恥ずかしくて逃げたい気持ちが全くの同レベルで湧いて来る。
「可愛いよ、刹那ちゃん。
目も鼻も口も髪も、胸もお腹もお尻もこの羽も、全てが可愛い」
囁いてくれる言葉の一つ一つが刹那には嬉しい。
上下に揺すられても、お尻を触られても、背中を撫でられても嬉しい。
翼を撫でて気遣ってくれるのが嬉しいし、
小さな胸を撫でてくれるのが嬉しくて
自分に興奮してくれるのが、嬉しい。
出来損ないで薄汚いはずの自分でも、女として見て貰えるという安堵。
内壁を擦られる度に、顔に口に首にキスをされる度に、
肯定される喜びが刹那の胸を満たしていく。
「出すよ、刹那ちゃん。
綺麗で可愛い刹那ちゃんの中に……」

「はいっ……出して、出してくださいっ」
額に汗を浮かべている刹那の為に、早くイくぐらいの気づかいはする。
横島という男は己の欲望に素直だが、
女の子の為に優しくする事も一応は出来る男ではあった。
「あっ……あっ……」
刹那が戸惑いと喜びの混じった声で、自らのぼこっと出っ張ったお腹を見下ろす。
横島のものが大きすぎる事や、勢いがありすぎる事、
そして霊気を感知できる素養のある刹那と、
高純度の霊気を持つ横島の組み合わせだったからだろう。
刹那はびゅるびゅると自らの子宮に入って来る熱いしぶきをはっきりと感じる事が出来た。
身体は雌としての悦びに陶酔し、白い翼をピンと大きく広げてしまう。
心は温かい物に満たされ、膣でいかせた事が女として誇らしくもなる。
「くうっ……良かったよ、刹那ちゃん。
凄く気持ちよかった」
「……本当ですか……？
私でも、横島さんを気持ちよく出来たんですね……」

うっとりとした表情で刹那は横島の首に抱き着いた。
二人の顔の距離が近づくと、ぼろんと萎えたものが抜けて
ぼっくりと開かれていた穴からぼたぼたと白い物が零れ落ちる。
無理矢理に広げられた穴がきゅうっと白いスリットへと戻っていった。
刹那は白い翼をくたっとさせて、恍惚とした表情で横島の腹に脚をまわし
がっしりと抱きしめて、幸せを噛み締めていた。
「あ……よ、横島さん……」
お尻を撫でていた大きな手が、酷使されていたスリットにあてがわれた。
「痛かっただろう?
頑張ってくれたからね」
さっきはチンコから行っていたヒーリングを、手から行っているのだ。
その温かさと優しさに刹那はえへと微笑んで、浸り始めた。
「楓ちゃん」
「あいあい」
ざぶっと楓が風呂から出て、横島の前に跪いた。
名前だけで何を要求されてるのかぐらい分かる仲になった、
というと大げさだろう。

ただ、横島が名前を呼ぶ時は「尻を出せ」か「咥えろ」しか無いと
楓が学習しただけだ。
「……」
口奉仕が平気、というより横島のなら
むしろやりたいぐらいになっている楓だったが、
今回ばかりはさすがに躊躇した。
何しろ、刹那から抜かれたばかりである。
精液と愛液がねとねとにまとわりついていて、
その上、血らしきものまで混じっている。
更に刹那が横島に抱き着いたままである為、
横島の腹ぐらいの位置に刹那の白い尻があり、
そこからはまだぽたぽたと汁が零れているのである。
刹那が嫌いでは無いが、レズっ気の無い楓には少し辛いものがあった。
救いは刹那が美少女な事だろうか。
容姿が美しいと体液まで美しいような錯覚は同性同士でもある。
迷いはほんの一瞬。
敗者である自分に拒否権など無い、と

楓は萎えた横島のモノを手に取ると鈴口をちろりと舐めた。
もうそれだけで横島のものは少し硬くなる。
今度はもう少し大胆にキスをして、ちゅうっと吸ってみる。
するとまだ残っていたどろっとしたものが楓の舌に乗る。
これが甘露に感じるのは、楓も霊気を感知できる素養があり、
横島に好意を持っているからである。
精液というのは命の素であるから、霊気を多分に含んでいる。
修行の果てに圧倒的に霊格を上げている為、
横島の精液は霊薬のようになってしまっているのだ。
口に甘露で、力にもなる為身体も悦ぶ。
そのような存在の精子だから、価値が分かる雌は子宮を疼かせてしまう。
楓はその典型の一人だった。
先程躊躇してしたのが嘘のように、
しっかりとペニスについ汁を舐めとってしまうと
新たに飲ませてくれないか、と刹那の尻の下でじゅぼじゅぼ音を立ててしゃぶり始めた。
堪らないのは真名である。

もはやクラスメイトは自分の存在を忘れてしまったらしく、
刹那は股から精液をたらたらと垂らして横島に抱き着き、
楓はその尻の下でじゅぽじゅぽと口奉仕を始めている。
こんな光景を亀甲縛りされて見させられているのだ。
さすがに冷静沈着を旨とする真名でも、呆れるし混乱する。
横島の見せる雄ぶりに身体が反応して、少し火照っているのは秘密だ。
「もしかして、朝までこのままなのか……？」
ひきつった顔で奇妙な体勢で絡まる三人を見つめる真名。
刹那の処女なんか守ってやろうとするべきじゃなかった、と
目を閉じてうっとりと横島にしがみつく元相棒に溜息が出るのであった。

サウザンドマスター

目を閉じて静寂に耳を傾ける。
パンパンと肉を叩く音は無視。
息も絶え絶えな嬌声も、卑猥な水音も無視。
あれは虫の声だ。
全く、最近の虫は変な声で鳴いて困る。
意識をしてはいけない。
今、私は野外で瞑想しているだけだ。
何もおかしな事はっ……無い……
現実から必死に逃走していた真名の意識を、股間の刺激が呼び戻す。
股に食い込んだ霊気縄がコブのように太い部分を作って、
前後に往復し始めたのだ。
ぐりぐりと身動きできない真名のスジを服の上から責め立ててくる。
巫女服を着てきた為、布地は分厚い。
それでもこう食い込まれては刺激は無視できない。

むしろ、もっと強ければ良かったのかもしれない。
そうすればさっさとイってしまう事が出来た。
この縄の意地の悪いのは、動きが不定期で続かない事だった。
小刻みに揺れたり、太くなったり細くなったり、蠢いてみたり、
目の前で行われている宴を忘れさせてくれない。
かといって、絶頂までは導いてくれないのだ。
「はぁ……はぁ……」
いっそ、刺激に集中してしまおうか、と思った時、
霊気縄はただの縄のように静かになった。
本当に意地が悪い。
目を開けば楓が後ろから貫かれていた。
前屈のように楓は自分の足首を掴んで尻を突き出して、
あの大きなモノを激しく出し入れして貫っている。
体躯の差か、経験の差か、刹那は二度ほどでダウンし
横島の作った不思議な球体状の膜のような結界の中で
幸せそうにすやすやと寝息を立てている。
真名は今ほど楓を恨んだ事は無かった。

横島の性欲の底は知れない。
楓が降参しない限り、いつまでもやり続けそうに思える。
楓が泣き言を言いながらでも、何度も付き合うから終わらないんだ、と
真名は恨み事を呟いた。
目の前でこうも激しく交わられては、いくら真名とて身体が反応する。
もう袴の上からでも分かる程、しみを作ってしまっているのだ。
手が動かせるなら、自慰していただろう。
身体での支払いは刹那が肩代わりしてくれたが、
これではむしろ……と考えそうになって真名は首を振った。
負けてはいけない。
意地の悪い縄にも横島にも。
きっと待っているのだ。
真名から欲しがるのを。
それにしても楓は本当に気持ちよさそうだ。
ここで見ているクラスメイトがいる事も忘れて、
遠慮無しに声を上げてぶるんぶるんと大きな胸を揺らしている。
あんなに太くて逞しい固そうなモノが、肉をめくるように出入りしている。

動きを止めたと思うと、横島は悪い顔で自らを差し込んでいる尻を指で開き、
指をぐっと押し込んで楓に悲鳴を上げさせている。
チン長が長いので先を入れたまま、尻穴を弄れるらしい。
身をよじって泣き声を上げた楓をまた前後に揺すって、
扱かせている。
言えば、きっとすぐに乗って来るだろう。
楓も刹那も美少女だが、私だって負けてない。
刹那があんな事を言い出さなければ、犯されていただろう。
それぐらい興味は示されていた。
目の前にあるせいでどうしても考えてしまう。
アレが私の中を抉ったら、と。
それだけで胎の中が疼く。
女の部分がはしたなく涎を垂らすのが分かる。
ダメだ、何を考えている。
忘れろ。
無視だ。
使命を忘れてはいけない。

風の音が卑猥に聞こえるだけだ。
ああっ、また食い込んできた。
くぅっ、揺れるな。
震えるな。
せっかく正座で誤魔化してるのに、腰がひくつく。
うう、せめて向こうから言って来てくれたら……
少し営みを愉しむくらい使命には影響無いんじゃないか。
いや、むしろ身体を差し出して横島に協力して貰えれば……
違う、何を考えている。
妊娠などしたら動きが取れなくなる。
でも、一度くらいなら……
強引に迫られたという事ならまだしも、
このような状況から私にも、なんて言えるはずが……

どれ程の時を耐え忍んだだろうか。
長く辛い戦いだった。
今、真名は下着姿で夜の闇を走っている。

真名は勝ったのだ。
楓がようやく「勘弁して欲しい」と降参したと思ったら、
刹那が目を覚ました。
あの時ばかりはさすがに覚悟をした。
しかし、横島もさすがに寝ぼけ眼でえへーっと抱き着いてくる刹那を
押し倒しはしなかった。
性欲だけでなく、情も一応あるらしい。
真名を解放すると霊気縄を広げて絨毯のようにして、二人を脇にはべらせて横になったのだ。
霊気縄が消えた瞬間、真名は走り出していた。
途中、邪魔くさくなった巫女服も脱ぎ捨てていた。
５００メートルは離れただろうか。
これ以上離れると、横島が追いかけてくるかもしれないし、
何よりももう限界だった。
川の下流の方に来ていた真名はずるっと思いっきり下着を降ろしてしゃがみこんだ。
脱いだだけでぬちゃっと粘っこい糸が引いた。
ぷりんとしたお尻を外気に晒すと、

むわっと自分でも分かる程きつい臭いの湯気が出た。
ぷっくりと顔を出している芽に指を擦り付ける。
苛めて欲しくてじんじんとしていた肉豆をぎゅっと摘まむ。
「くふぅ……！」
思わず声が出て、噛み締める。
が指は止まらない。
僅か数回の刺激で、真名の意識は飛んだ。
じょろじょろと堪えていた小水も飛び出してくる。
排泄は解放感や快感があるが、そう大したものではない。
だが、この時ばかりは違った。
真名は初めて、尿を出す事が気持ちいいと知った。
我慢していた疼きからの解放を大きくしてくれていた。
野外という事も解放感を強くしたのかもしれない。
勢いが弱まりちょろちょろと名残が出ていくと、
真名はふうっと大きく息を吐いた。
かつてないほどの充実して自慰と放尿をした。
気持ちよかった。

ただ、これから服を回収して、横島達の所に戻る事を思うと途方に暮れる。
勝ったはずだ。
耐えきったのだ。
だが、幸せそうに抱かれていた二人を思うと、
ちょっと空しさも覚えてしまう真名だった。

パチパチと気の爆ぜる音が静寂を破り、
じゅうじゅうと香ばしい香りが腹に響く。
夜も白み始めた頃、横島が起き出し
次いで刹那と楓が起きて来て、食事を取ろうという事になった。
と言っても道具も豊富な食材なんかもある訳でも無い。
獲ってきた川魚を木の枝に刺して焼くだけのシンプル朝ごはんだ。
横島が川に向かったと思うと、ぽいぽいぽいと魚が二十匹程飛んできた。
どんな漁の仕方だ、と真名はツッコミもしなかった。
呆れていたともいう。
「美味いな」
「美味いでござる」

「美味しい……」
「まあ、確かにこういうのもアリだね」
ドラム缶をどかした焚火を四人で車座になって囲み、ハフハフと焼き魚にかぶりつく。
楓はともかく、刹那と真名には新鮮な食事だった。
川の水が綺麗で魚に臭みが少なかった事も良かったのだろう。
ちなみに四人とも服は着ている。
横島が何だかよく分からない技で奇麗にした。
何か光ったと思うとクリーニングしたように奇麗になっていたのだ。
もう真名は「便利だね」としか言わなかった。
「水もあるよ。
喉乾いてない？」
そう言って横島が差し出したのは光る桶状の物体。
霊気を凝縮し、物質化した桶で川の水を汲んできてるのだ。
「頂いていいでござるか？」
「どうぞどうぞ」
数時間とはいえ先に接触した分、楓は横島の非常識さに最初に慣れ始めた。

横島から伸びる霊気の桶を受け取り、ぐびぐびと喉を鳴らす。
「ふい～、冷えてて美味しいでござるな」
「他はいいの？
刹那ちゃんいらない？」
「あ、じゃあ、私も……」
「おっけーい」
横島が軽い返事をすると光る桶はびょーんと伸びて行って、
水を汲んでぎゅーんと帰って来る。
「霊気の物質化ってだけでも信じ難いのに、
こんな使い方をするなんてね……」
刹那が水を飲んでいる横で真名が呆れた声を出した。
「随分、便利そうだ。
まるで触手だね」
この夜にされた事は忘れてない真名だった。
「まあ、最初に開発した時はそのつもりだったからね。
触手プレイの術～ってノリだったんだけど、
これ感覚は通ってないからつまんないんだよ。

これからの課題だよ」
楓や刹那はほえーっと感心しているが、真名は疑わしそうに横島を見た。
本当は触感あるんじゃないの、と。
セクハラされまくった恨みは消えない。
「その霊気で作った物って強度はどうなんだい？
そんだけ伸ばして水汲んで来れるなら、かなりの強度がありそうだけど」
「そうだなー。
霊力を消費するだけで壊れはしないから何とも言えんな」
「その霊力切れって起きた事あるのかい？」
「真名……！」
あまりに露骨な戦力の聞き出しに楓が真名を睨むが、
当の横島はへらへらと手を振った。
「いいって、いいって。
真名ちゃんからすれば俺の力が分からなくて不安なんだろうし、
何もかもわかりませんじゃ報告も出来ないもんな」
「横島さん」「横島殿」
「……協力的で助かるよ」

実際、真名がどれほど安堵したか、
早々に篭絡された楓と刹那には分からないだろう。
横島の強さは底が見えない。
暴れ出したとしたら、魔法関係者総がかりで鎮圧出来る保証も無いのだ。
実際に戦力の底まで話してはくれないだろうが、
協力的な態度でいてくれるなら対立しないで済む。
対立しないなら戦力がどれ程だろうと関係ない。
「俺は別に戦うのが好きな訳じゃないんだ。
話す事で揉め事避けれるならそれでいい。
見返りに真名ちゃんが脱いでくれるか、
デートしてくれるならもっといいんだが」
「いやいや、そんな事をしたら刹那に睨まれそうだ」
「わ、私は別に……」
煽られた刹那はちらっと横島を伺い、微笑まれて頬を染める。
「刹那ちゃんが代わりにデートしてくれるの？」
「わ、私はその日中は任務がありますので……」
戸惑ったように刹那が答える。

しかし、誘われて喜んでいるのは明らかだった。
「じゃあ、夜のデートだ。
次からはもっと気持ちよくなるから、楽しみにね」
「そ、そんな、もっと……？
あ、、じゃなくて、横島さんはこれからどうされるんです？
で、でーとしてくれるって、ここに住んでくれるんですか？」
「あー、多分そうなると思う」
今度こそはっきりと刹那は顔を輝かせた。
自分の事を肯定してくれる存在と一緒にいれた事の無い刹那だ、
手放したくない思いは非常に強かった。
「それなら、私の雇い主に会ってくれないか？
この街で強い権限がある人だ。
揉め事を起こさないでくれるなら力になってくれると思う」
「うーん……そうだなぁ。
いいよ、その方が真名ちゃんも刹那ちゃんも任務達成になるんだろうし」
「あ、ありがとうございます」
「ありがとう、本当に助かる」

二人が頭を上げるともぐもぐと魚を食べながら黙っていた楓が、口を開いた。
「聞いていいなら、拙者も聞きたい事がいっぱいでござるが……
横島殿は天使にあった事があるのでござるか？
刹那との会話を聞いていたら、どうもそのような事を言っておられたが」
「ああ、あるよ。
あいつら見た目は綺麗なんだけど、性格わるくてなー。
しかも腹立つ事に女の子じゃねーんだよ。
男でも女でもない中性とか抜かしてさ。
一回、腹立ったから無理矢理脱がしたら何にも無いんだぜ。
つるつるで何にも無いし、泣き出すしキレまくるし大変だったよ」
事も無げに言う横島に三人とも絶句してしまう。
しかも、天使に会った感想が女じゃない事が腹立つというのだから、
理解出来ない。
言うべきとこって、そこ？
ってなもんである。
「そ、そうなんでござるか……
というか実在するんでござるなぁ……」

「あー、こっちじゃどうか分かんないか。
でも、多分いるだろ。
そんなに世界の在り方が変わるとも思えんし」
「こっち……？
そういえば横島さんってどこから来られたんです？
天使に会える場所なんて見当つきませんけど……ここから遠いんですか？」
刹那が可愛らしく首を傾げる。
考えているのはご両親に挨拶しに行ってもいいだろうか、なんてことだ。
だが、そんな事を知ってか知らずか、むしゃむしゃと魚を頬張りながら横島が返した。
「あー、俺、平行世界から来たんだ。
だから、すぐそこも言えるし、とっても遠いとも言えるな」
ぱちぱち、と木の燃える音がする。
三月のうすら寒い空気が彼女達の間を通り抜けていった。
「ええーーーーっ!?」
真名ですらが声を上げた。
色々と無茶苦茶な男なのは分かっていたが、さすがに予想出来るはずもない。
「へ、へいこーせかい……？」

「ちょ、ちょっと待った。
霊気とか言うのはそんな事が出来るのか？」
「まさか！
聞いた事ありません！
平行世界って、あのドラえもん的なあれですよね」
「ドラえもんはタイムスリップじゃないか。
あ、でも、あってるのか。
あれも平行世界と枝分かれしたとかいう設定で……」
楓は残念ながら漫画もあまり読まないので、
よく分かっていない。
ただ、とんでもない事だけが分かった、という状況である。
真名も刹那も大して変わりはしない。
驚きの余り、話が脱線し始めている。
「……ちょっと待って。
落ち着かせてくれ。
横島さんは平行世界から来た。
平行世界ってつまり、よく似た別の世界って事であってるかい？」

深呼吸した真名がとっても疲れた様子で問いかける。
「そうだよ。
俺にはどうしても叶えたい目的があって、
力を振り絞って世界の壁を越えたんだ。
自分で超えてきたから、平行世界なのは間違いない」
横島の語り口は軽いものの、だからこそ嘘を言っているようには見えない。
真名は自分の目に自信がある。
絶対にとは言わないが、ある程度は嘘を見抜ける。
狂人という風には見えないし、どうやら本当に平行世界から来たらしい。
「その目的がなんなのか、聞いてもいいかい」
「ああ、別に大げさな事じゃないんだ。
子供が欲しかっただけ」
「子供でござるか？
それで拙者達を手籠めにした、と……」
冗談めかして楓は身体をくねらせる。
最初はどうだったか知らないが、真名が知る限り楓はノリノリで腰を振っていた。
手籠めにされた、という感じではない。

「うーん、なんていうか……
俺って不思議な事に子供が出来ないんだよ。
医学的には全く問題無いのに。
魂とか霊能的な部分でも問題は無い。
１０００人以上に膣出ししたけど誰一人孕まなかったんだ。
それで、知り合いの神族の力も借りて、
俺の子供が産まれてくる世界に来たんだ」
しんみりと口調で語る横島の表情はどことなく寂し気にも見える。
初めて見る顔に三人ともしばし黙って見つめていた。
神族とか１０００人とか、もう真名も突っ込まなかった。
この男の恐ろしいのは千人切りという事ではない。
千人以上の女に子供を産む事を決意させての膣出しをした事である。
「待ってくれ、横島さんの話は色々とついていけない。
子供を作りに来たって、どういう事なんだ？
平行世界から来た事を信じるにしても、
こっちなら子供が出来るってのはどういう事かな？」
「まあ、説明は複雑だから、そういう事だと思ってくれてたらいいよ。

そうだなー。
こっちでもドラゴ○ボールって漫画ある？
あの集めたら願いが叶う奴に、
子供が出来るように願ったらここに来たって感じかな。
それが一番分かりやすいと思う」
ただし、そのドラゴ○ボールは自前で作ってる。
力の限界はあるものの、あらゆる事象を起こせる万能の霊能『文珠』
言わずと知れた横島の切り札である。
子供が出来る可能性を探りまくった結果、
『ル』『シ』『オ』『ラ』『転』『生』
『可』『能』『世』『界』『転』『移』
『対』『象』『横』『島』『忠』『夫』
という、１８文字連結で世界の壁を越えてきたのだ。
「はー……なんか、もう訳が分からない……」
「横島殿はそれほど子供好きなのでござるか」
「あ、あの、私、頑張ります！」
横島の話を聞いての反応は三者三様だ。

真名は思考放棄したい顔をしてるし、
楓は何やら妙な方向で感心してるし、
刹那は顔を赤らめて拳をぐっと握っている。
「この世界の何が可能にするのか俺も分かんないんだ。
ここに来ただけでいいのか、
ここで何かしないといけないのか、
この世界に俺の子を孕める女がいるのか。
何か手段があるのか。
今からそれを探っていくつもりなんだ」
少しだけ真面目な顔でそう言うと、
横島は話している内にちょっとづつ距離を近づけていた刹那をぐっと抱き寄せた。
「刹那ちゃんは協力してくれるんだね。
ありがとう」
「あ、そんな私なんて……じゃなくて。
私で良かったら……あっ」
胡坐をかいた脚の上に刹那を横抱きに乗せると、スカートの中に手を入れた。
すべすべの細い太ももを撫でて、付け根へと指を這わせる。

下着をずらしてつるつるのスリットを揉み、くにくにと柔らかさを確かめる。
クリトリスを指の腹で撫でて顔を出させて、蜜を滲ませていく。
「んっ……やっ……」
横島の指先に光が収束し、大人しく弄られる刹那の中に潜り込んだ。
『妊』の字の文珠を膣に押し込んだのだ。
更に『護』の字の文珠もぐにゅっと押し入れる。
本人の性格を引き継いでるのか、粘り気が強く
まだたらたらと零れていた精液が蓋をされて膣に留まる。
何かを入れられたと感じ、伏せていた顔を上げた刹那にキスで返事をする。
キスをしながら返事をする。
（後でまた説明する。
お守りと思って入れてて）
自分の中から横島の声が聞こえて来て、刹那は慌てた。
これは霊体から霊体へ直接語りかけているのである。
幽体離脱していても会話出来る事に着目し、開発された技だ。
おっぱいを吸いながらでも「ええんか、ええのんか」が出来る
男なら誰しもが習得したい技の一つであるが、

意識を持ったまま自由自在に霊体だけを動かせる技量がいるので
実はかなり難度の高い技でもある。
「あのう、拙者もやぶさかではござらんが……」
いちゃつきだした二人の横で楓が小さく手を上げる。
嫉妬では無いが、除け者は寂しい。
「おお、楓ちゃんもありがとう。
お礼に明日はクンニしてあげる」
「そ、そんなお礼は別に……」
戸惑う楓を霊気の縄で引き寄せて、耳元で横島が囁く。
「いいの？
本当に？
俺は正直、かなり上手いぜ。
ねちょねちょにしてあげる。
ぺろぺろと大陰唇から丁寧に舐めて行ってさ。
中の肉のひだの一枚一枚を舐めるよ。
ふにゃふにゃにふやけるぐらい、
カチカチになったクリをしゃぶって。

おまんこを舌でこじ開けて、
楓ちゃんの気持ちいいとこをぐりぐりしてあげるんだよ」
楓はもう自分が信じられなかった。
横島の言葉を聞いてるだけで、下半身がとろとろになって、
胎がきゅんきゅんとときめいているのだ。
とても舐めて欲しい。
この自分より圧倒的に強い御仁に
自らの汚い所を舐めて貰えるという背徳的な行為。
想像しただけでゾクゾクする。
そして舐めたい。
あの逞しいものをで口をいっぱいにしたい。
喉をぐいぐいと押し広げて、
あのカチカチのでお腹の内側をごりごりと突いて欲しい。
まぐわっている時の己の媚態ですら、信じたく無い程なのに
言葉だけで期待が膨らんで、もうスカートまで染みそうだ。
「し、して下さるなら断る理由はござらんが……」
「あれ？

して欲しくないの？
じゃあ、刹那ちゃんにだけしようかな……」
「わ、私にもしてくれるんですか」
刹那は素直に嬉しそうにして、横島に抱き着いている。
楓の脳裏に嫌な想像が巡る。
きっと、今日の夜はもう外では無いだろう。
どこかのホテルとか、もしかしたら女子寮の部屋かもしれない。
そこで刹那にばかりかまける横島。
刹那のだけ舐めて、刹那にばかり突っ込む横島。
それを横で眺める自分。
感情抑制訓練をしてきた自分が、と思うほど楓は心揺さぶられていた。
「そんな、殺生な……
拙者も、拙者もして欲しいでござる」
思わず詰め寄った楓に、横島は微笑んでキスをした。
そうして霊体で会話しながら、スカートの中の肉溝に文珠を詰め込んでいく。
『孕』『護』
字が違うのはどれが効果的か分からない為だ。

「すぐいちゃつくの止めてくれないか……？
会話が進まないよ」
真名が思わず愚痴る。
結局、これ以上聞きだすのは諦めた。
横島は学園長に会ってくれると言っているから、後は丸投げだ。
いい加減疲れた真名はそう決めて、まだ残っていた焼き魚にかぶりついた。

夜が明けて、午前六時過ぎ。
横島は麻帆良学園のトップ、近衛近右衛門と面会していた。
真名、刹那、楓も同行している。
「ふむ、事情は分かった。
子供を作る為、との事だが無理強いなどせんのなら
儂からどうこう言う問題じゃないしのう」
学園長との話し合いはスムーズに進んだ。
横島は真名にも話したように、素直に目的を話した。
横島はかなり女好きのようだが、知り合った女子から悪感情は持たれてないようだ。
勘違いから襲撃した女子生徒に報復していない事も好感が持てる。

実際は報復として性交している訳だが、そこは横島達も伏せた。
結果、時系列の誤認が起きている。
これは楓と刹那が明らかに横島に惹かれている様子を見せたのが原因である。
報復セックスされて惚れるとはさすがに学園長も思わない。
戦った結果、好意を抱いたのだろうと考えたのだ。
まあ、あながち間違いでもない。
「しかし、世界を移動するとは何とも凄い話じゃのう。
儂も長く生きておるが聞いた事も無い、途方もない話じゃ。
その、霊気というのは修練すれば儂でも使えるのかの？」
「それはやっぱり素質が関係しますね。
素質が無ければどうしようもない部分はあります。
貴方たちの使う魔法はどうなんです？
あれは俺も使えるようになりますか？」
学園長は内心驚いていたが、どうにか顔には出さなかった。
立場上、韜晦するのは得意だ。
「魔法……？
はて……？」

「いやいや、とぼける事ないでしょう。
あんな箒に乗ってぶんぶん飛び回ってるじゃないですか」
「ふーむ、横島どのには見えてしまっていたのかの。
しかし、吹聴して貰っては困るのじゃ。
我々の世界では魔法や魔法使いの事は秘匿されておるでのう」
横島と、その後ろに控えている楓に視線をやって、学園長が言う。
「魔法使いは魔法使いだとバレる訳にはいかんのじゃ。
分かってくれんか」
「あー、だからなんか妙に認識し辛い感じの膜を張ってるんですね。
別に言いふらす気はないですよ。
なんで秘密にしとかないといけないのかも分かりませんが」
「それはまあ、この世界の理というものじゃからの」
ひょひょっと学園長が笑う。
見た目も合わさると妖怪にしか見えない。
今の横島は種族など見るだけで判別できるのだが、
目の前の爺さんが人間離れしすぎていて少し自信がなくなりそうだった。
「それでな、良ければその霊気の力というのを見せてくれぬか？

無論、タダとは言わん。
代わりにこの街で暮らす為の戸籍等は用意させてもらう」
「いいですよ。
まず、貴方が集められるだけの美女を集めて下さい。
あと遠慮なくぶっ飛ばしていい相手も。
スコーンと地球の裏側にでもぶっ飛ばして見せます」
渡りに船、とばかりに横島が乗って来る。
逆に学園長の方が慌てるぐらいだった。
「い、いや、そんな大げさな話じゃなくて、
ちょっと見せてくれればいいんじゃよ。
爺の好奇心の問題じゃから……」
「なんだ。
誰かいないんですか、強さを信奉する美魔女とか。
俺が力を振るったら尻から走って近寄って来るような美少女とか」
「お主は尻から走って近寄って来る美少女とか嫌じゃないのかのう」
心底つまらなそうに溜息を吐いた横島は無造作に霊波刀を出現させた。
「おおっ」

学園長の目がくわっと見開いた。
後ろにいた楓も真名も、何よりも刹那が興味津々で見つめている。
それもそうだろう。
横島の手から生えている光は凝縮した個体にも見え、
かつ滑らかさも輝きも地球上のどんな物質でも無いと断言できる。
危ないと言われなくても分かる恐ろしさと、
惹きつけられる怪しい魅力がそこにはあった。
「触らないで下さいよ。
これは刀として出してるから触れれば斬れてしまいます」
「ど、どれくらいの切れ味なんじゃ」
「さあ？
斬れなかったものが無いので分かりません」
ごくり、と誰かの喉がなった。
「見た目からして縄とは違うんですね。
輝き方が、といいますか……」
「お、分かる？
刹那ちゃん、本当に素質あるなぁ。

霊波刀使いでも分からない人結構いるんだけど」
「ぐぬぬ……拙者には何とも……」
褒められて刹那は嬉しそうだ。
えへーっと微笑んでいる。
近衛近右衛門はそんな刹那の姿を見て、横島という男の評価を一つ上げた。
志願してとはいえ己の孫娘の護衛の為に、
同じ年の少女の青春を犠牲にする事に心を痛めていたのだ。
あの頑なだった刹那から笑顔を引き出しているというのは素晴らしい事だ。
「ふむ、素晴らしい力を見せてくれてありがとう。
それで横島どのはこれからどうされるおつもりじゃ。
先立つ物も必要じゃろう」
「まあ適当に占い師でもしますよ。
どうしても大金がいりそうなら悪い事してる奴等襲えばいいですし」
何の気負いも無い様子で事も無げに横島は言う。
悪い事してる奴からいくら毟っても心は痛まないらしい。
ここらへんは元上司の薫陶が生きている。
文珠で心や過去を読めば冤罪も無い。

「あまり物騒な事はして欲しくないのう。
提案があるんじゃが、うちで働いてみないかね」
「学校でですか。
用務員？
いや、警備員かな？
どっちにしろ、嫌です。
金はどうにでも稼げるし、時間を拘束されるのは困りますから」
「仕事の種類は横島君の希望になるべく沿うようにしよう。
正直に言うと目の届く所におって貰いたいんじゃ。
世界が違うとなれば常識もズレてくるじゃろうし、
ここに来たという事は場所にも意味があるんじゃないのかのう。
ここで何かをするんなら融通も利かせられるし、
学校関係者の方が自然じゃ」
ここは学園長も譲れない。
目的も分かったし、悪い人間では無さそうだが野放しにするのも怖い。
しかし、力づくで言う事を聞かせるという訳にもいかない。
「学園都市って事ですけど、ここって学校関係者しかいないんですか？

都市機能を維持しているんだからそんな訳無いですよね。
学生相手の飲食とか娯楽施設が無いはずないし」
「うぐっ……それはそうじゃ」
「ちょっと街を見て回って溶け込みそうな仕事にしますよ。
決まったら連絡先を教えます」
結局、そこらが妥協点かと学園長も了承した。
既に刹那達と繋がりを持っているようだし、
監視は出来なくともある程度の動向さえ分かればいいという判断だった。
実際、上手い所で収めたと言えるだろう。
横島は自分に不都合な方向で話が決まりそうなら、
『洗』『脳』でひっくり返すつもりだったからだ。

「どう見たかね、タカミチくん」
横島が去った後の学園長室。
白いスーツの中年男と頭の長い妖怪爺の絵面の汚い豪華対談が行われていた。
「やってみない事には分かりませんが……
おそらく勝てないでしょうね。

僕にも気付いていたように見受けられる」
「そうじゃのう。
儂の見立てでもそうじゃ。
儂とタカミチ君の二人がかりでも怪しいの」
白スーツが静かに頷く。
隣室から音を様子を探っていただけで額に汗をかいた。
あれ程の存在はついぞ例を見ない。
それでいて飄々とした態度、
どこぞの千の呪文の男（サウザンドマスター）を思い出す。
「ナギ……」
不意に懐かしくなって呟く。
奇しくも、横島という男もまた元の世界で
千の種族を犯した男（サウザンドマスター）という
異名を持っていた事は知る由も無かった。

超うすうす

女子中学生が二人でも集まればきゃいきゃいと五月蠅く、
三人以上集まろうものならぎゃーぎゃーと五月蠅い。
勿論、物静かな女子中学生というのも存在しない訳ではないが
大体はそんなもんだ。
ましてや1クラス集まった場合の騒がしさというのは推して知るべし、である。
昨夜、横島と関りを持った三人の女の子が所属する2―Aは、
その中でも特に騒がしく、学年指導の先生からも要注意とされているクラスだった。
始業前、ギリギリになって楓、刹那、真名が飛び込んでくる。
一度帰ってシャワーを浴びて急いでまた来たのだ。
この三人の身体能力でなければ遅刻確定だっただろう。
「楓ねえ、間に合ったね」
「さすが楓ねえだね」
「かえでー、あんた昨日どうしてたのっ！
心配かけちゃダメじゃないっ！」

「いやー、すまんでござる。
ちょっと修行に熱が入りすぎてしまって……」
只でさえ賑やかだったクラスが増々騒がしくなる。
といっても人が来るのは楓の周りだけだ。
刹那も真名もあまり級友とは関わらないようにしている。
楓も一旦寮に戻った際に同室者の鳴滝姉妹には謝っていたので、
混乱は少ない。
純粋に心配していた者、騒ぎに乗っかって楽しもうとする者が
入り乱れているだけである。
わいのわいのと囲まれている楓がちらりと目をやると、
先に席に着いた刹那も視線を返した。
一緒に来たように見えて、実は違う。
刹那は寮から近衛木乃香の護衛をして来たのだ。
疲れ切っていても、この使命だけは忘れはしない。
一時間ぶりに再会した楓と刹那は視線だけで昨夜の事を確認しあった。
互いの痴態を見せあったライバルであり戦友である。
「ん、今、桜咲笑わなかった?」

「え、いや……」
「き、気のせいだ」
刹那の口角が上がったのを目ざとく見つけた、自称ジャーナリスト朝倉和美が話しかけてくる。
だが、返事をした事は悪手だ。
昨日までの刹那なら仏頂面で無視したか、睨みつけたかだろう。
横島にコンプレックスを取り除いて貰ったおかげで、
態度が柔らかくなっているのを本人も気づいていない。
「んん？
本当にどうしたの？」
ぐっと朝倉が身を乗り出してくると、
今度は何かを嗅ぎつけた図書館探検部の早乙女ハルナが声を上げる。
女子中学生ともなれば他人のでも色恋沙汰には目が無いが、
この二人はその中でも特に騒がしい。
「はっ、桜咲からラブ臭がするっ！」
「……そんなものはしないっ！」
ツッコミを入れてしまったのは更に不味かった。

また、すぐに反応しなかったのもリアル感がある。
朝倉と早乙女が騒ぐ分には相手にしないクラスメイトも
こうなってくると目の色を変えてくる。
結果、いつも以上の喧しさの中に珍しく刹那がいる事になってしまった。
「せっちゃん……」
結局、ネギ先生が来るまで彼女達が大人しくなる事は無かった。
いや、来てもならなかったのだがネギが困った事により
いいんちょこと雪広あやかがクラスメイトを一喝し、静かにさせた。
近衛木乃香のもらした呟きは誰にも聞かれる事無く、クラスの喧騒に溶けていった。

一方、横島はというと麻帆良学園の中をぶらぶらと歩いていた。
やった事と言えば銀行口座を作って、携帯電話を契約しただけだ。
学園長との約束というより、楓と刹那と連絡する為だ。
女の子との繋がりが最優先である。
それだけ確保したなら、好奇心のまま街の散策を開始した。
「ほえ～、路面電車まであるのか。
凄いな。

っていうか、初めから計画的に作った感じが凄い。
コンセプトアートならぬコンセプトシティってか」
巨大校舎に横も広い大階段、学園都市だからか、
車の往来よりも歩行者の往来を重視している広い道、
街路樹の配置も街灯のデザインも日本とは思えないものだ。
レンガを敷き詰めた道といい、ヨーロッパの方に雰囲気は近い。
「なーんか、洒落てるなー」
もっと学生の多い時間帯だと人の多さに印象も違うのだろうが、
今は授業中である。
メインである学生がほとんど出歩いていないので、
広さの割に閑散としている。
ナンパ対象がいないので横島はのんびりと街を観察していた。
大人達の為か、サボリ生徒の為か、
喫茶店やファストフードなどのわずかに開いている店もあるが、
ほとんどは準備中である。
「意外に店も多いなー。
学園を支える程度の都市機能じゃないぞ」

『そうね。
初めは貴方の言う通りだったけど、
今では一般人も多いからね』
『魔法使いの街と言いながら、もう数は逆転しとるしのう』
『魔法使いはどうしても『立派な魔法使い』への憧れから
商売っ気の薄い人が多いみたいだ。
魔法で便利な事も出来るから発明も遅れてしまう』
傍から見たら横島は独り言を話しているように見えるだろう。
だが、実際は会話をしている。
相手は麻帆良の街の霊達だ。
初めは荒んでいる霊だった。
なんでだ、なんでだと聞こえない叫びを上げる男に、
安らぎの霊波を与えて落ち着かせた。
このぐらいは通り過ぎるだけで出来る。
次に、泣きに泣き続けて悪霊化しかけている子供の霊を清め、
微笑んで抱っこしてやると成仏していった。
他に見えてる人のいない子供と遭遇したら、誰だってそうする。

実際はどうだろうと横島はそう思っている。
するとこっちを見ていた女性の霊がいたのでナンパした。
断られたが、とっても嬉しそうだったので世間話をした。
ここら辺りから霊の方から寄ってき始めた。
横島からすれば特別な事はしていない。
前の世界でも野良霊を悪霊化しないよう、
見かけたら声をかけたり、時間がある時は話を聞いてあげたり。
祓うだけがＧＳじゃない、と言うのが横島の指針だった。
金だけの話をすれば悪霊化するのを待って、
迷惑をこうむった誰かがお金を払うから除霊してくれ、というのを待つ方がいいだろう。
そういう事をするＧＳも実際に存在する。
しかし、それは横島のやり方では無かった。
霊の気持ちを誰よりも分かる女の子と親しかったせいもある。
どうにもならない感情に振り回されて悪霊と化す者の悲しみが分かるのだ。
ともあれ、そんなこんなで霊達を引き寄せ始めた横島だが、
これが横島にとっても有難い事になった。

この街の事を知るのに、彼等の話ほど有益な話は無かったのである。
霊体となった彼等は秘匿義務も何もなく、
認識阻害は働くが、そもそも魔法使い達も彼等の目を気にしてないので、
死んでからこの街の裏側を知った者達も多い。
中には元魔法使いだ、という幽霊もいたりする。
彼女の話から「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」
という存在の話まで聞き、横島は今日の予定を変えた。
当然の事ながら魔法使い達は霊力を重視している者は少ない。
いない、と言い切ってしまってもいい。
よほど生まれつき霊力の才能に恵まれていなければ、意識すらしないだろう。
極稀に才能のある子が生まれても体系だっていて先達のいる魔法があるのに、
好き好んで霊力を磨こうという人間はいない。
おかげで横島は対策されてない情報ソースを得ている。
とはいってもほとんどが一般人であり、
魔法使い達の裏側だとか、個人情報だとか深い事を知っている訳ではない。
ただ、それでも横島には非常に有益だった。
何しろ違う世界から来たのだ。

この街の常識すら知らない。
楓や刹那もどうも一般人とは言い辛く、
この視点からの情報を怪しまれずに聞く事が出来るというのは有難かった。
幽霊達もこうはっきりと自分達の姿を見て話す人間が珍しいので、
自分から寄って来てくれるし好意的だ。
現世とのつながりに飢えてもいる。
物質と関りをほぼ持てなくなった幽霊達にとって、
向けられる思慕の念、敬愛とか心慰こそが何よりも嬉しいものだ。
「ちょっと付いて来てくれるか？
買い物してくる」
スーパーのような店を見つけた横島はそう言って
ぞろぞろと幽霊達を引き連れて、買い物をした。
両手いっぱいにレジ袋を5，6個程下げた横島に幽霊達が
「すごい、すごい」と褒めそやす。
重そうな気配もさせずに横島は今度は人目に付きにくい場所へと移動する。
と言っても街の中だ、
昨日の山にまで行くのは遠い。

そこで横島が選んだのは閉まってしまっているビルの屋上だった。
元は何だったのか、通りから少し離れた三階建ての廃ビルである。
横島は荷物を両手に下げたまま、壁を蹴って登りきると、
買ってきた箒で素早く掃除をし、
塩をまいて酒を四隅に振り、祝詞をあげて場を清めた。
簡易な清め方だが、横島ほどのＧＳがやると十分効果がある。
というか、効果が出過ぎて幽霊達を祓ってしまわないよう気を付けたぐらいだ。
『おお、なんという暖かな……』
『ああ、なんかとっても安らぐわ』
『神社でもこんなにキレイな空気では無いぞい』
幽霊達が清められた場に顔を輝かせた。
コンクリート剥き出しで、中には抉れたりしているのに
彼等から見れば光に溢れた美しい空間となっていた。
中には徐々に恨みを抱き始めてたり、悪霊化しそうになっていた者もいて、
清められた事に喜んでいたりもする。
「さあ、これは俺からのお供えだ。
遠慮なく頂いてくれ」

そう言って横島はスーパーで買ってきた酒や魚、料理や菓子を並べた。
物品を幽霊は食べれない。
極稀に例外は存在するが、普通はそうだ。
だが、お供えされた物に宿る心は味わう事が出来る。
幽霊達の喉が鳴る。
法事でも無いのに降って湧いたご馳走である。
喜ばないはずが無い。
中にはもう血縁からもお供えされたり、
顧みられたりする事の無くなった幽霊もいて、大喜びだ。
横島としては情報料として、当然のお礼だった。
聞こえる者のいない宴会が白昼の廃ビルの屋上ではじまった。
勿論、横島も一緒になって輪に加わり、食べて飲んだ。
ただでさえ心地よい波動を出しているのに、
このような事をされて幽霊達はメロメロになった。
横島はわずか数時間で麻帆良の幽霊達のカリスマになったのだった。

昼休み。

女子中学生達の昼休みはやっぱり騒がしい。
特に2―Aの騒がしさは他クラス以上だ。
喋るな、と言われていても騒ぐ彼女達が、自由時間に静かな訳が無い。
そんな中、何も食べずにいる娘がいた。
前髪を切りそろえたロングヘア―の古風な女の子である。
「ねえ、桜子、購買に付き合ってよ。
あんたが来てくれたら限定美容幕の内弁当買えそうだし」
『あら、美容幕の内弁当ってなんだか凄いですね』
「いいよー。
ジュース一本で手をうとう」
「もう、ちゃっかりしてるわねぇ」
チア組三人が連れ立って教室を出ていく。
「わぁっ、ちづ姉の弁当すっごーい。
手ぇこんでるねー」
「私のはどうも所帯じみててねぇ。
お野菜取らなくちゃと思うとつい和食になりがちで。
裕奈さんこそ、お上手ですわ」

『本当ですねー。
どちらもすごくお上手だし美味しそうですよ』
「にゃはは、お父さん忙しいからって、
遅くなるとすぐコンビニ弁当とかで済ませてるからさ。
お昼のお弁当ぐらいバランス取れたの食べさせてあげないと」
『裕奈さんはいつもお父さんの事を気遣ってて偉いですー』
お弁当自主製作組が互いに批評したり賛辞したり、
お弁当を広げて楽しそうに話をしている。
だけど、彼女に返事は無い。
ずっとずっと話しかけてるけど、返事をして貰った事は一度も無い。
それもそのはずだ。
彼女、相坂さよの姿はクラスメイト達に見えていないのだから。
「桜咲ー、ご飯一緒に食べようよ」
「……勝手にしろ」
「勝手にするね」
『うふふ、今日は仲良しさんですね』
ふよふよと近づいて仲間に入れて貰った気分でいると、朝倉が不意に振り返った。

『あ、朝倉さん、私の声が―』
「龍宮も一緒にどう？」
「私は遠慮する」
「あ、そう」
さよはがっくりと項垂れた。
彼女もまたさよの向こうの人へと話しかけただけだった。
だけど、くじけない。
いつかきっと、見えるはず。
いつかきっと、聞こえるはず。
そうして相坂さよは６０年過ごして来たのである。
聞き慣れない声が聞こえたのは、その時である。
『あの子？
わっ、すっげー可愛い。
貴女によく似てるよ』
『そう？
ありがとう。
……ありがとう、本当に。

貴女が力を貸してくれなかったら、学校でのあの子は見れなかったわ』
さよが振り返ると、いつの間にかクラスの中に二人の霊が入って来ていた。
男と女の二人づつ。
男性はビカビカに光ってるスーツ姿の青年で、
女性は昔話の魔法使いみたいな恰好の２０代の美女。
『あら、あなた達はどちら様です？』
話しかけてはみたが、聞こえてないらしい。
さよは幽霊仲間にすら感知されにくい体質らしく、
たまに見かける幽霊さんにも返事を貰えた事は無い。
女性はうるうるとクラスメイトを見ていて、
男性は口に指を当てて「しー」っとウインクしている。
しかし、そのジェスチャーでお願いされた事とは逆に、
刹那は百面相をして周りから心配されていた。
『はー、幽霊さんでもあんなにビカビカだと気付かれるんですね。
凄いなぁ、私もあんな風に出来ないですかねぇ……』
さよはいつの間にか、心の中で黙っている事をしなくなっていた。
口に出しても誰からも聞かれないから、である。

だけど、この時ばかりは違っていた。
『ん？
君、気づかれたいの？
じゃあ、そうしようか』
『……え』
気のせいだと思い、さよは反応が遅れた。
『今日はもうずっとここにいるんですよね。
家には帰れます？』
『ええ、帰る事は出来るわ。
家の周りだけははっきりと分かるから』
侵入してきた幽霊同士で会話を始めている。
『え、嘘、いま私の声に返事しました……
……偶然？
で、でも……』
期待を裏切られる事には慣れない。
何度目だって辛いものだ。
だけど、どうしても期待してしまう。

もしかしてと見つめていたさよに、青年は笑いかけた。
『君、可愛いね。
でも、確かに他の人じゃ見え辛いかもな～。
君が望むんなら、他の人にも気付かれるようにしてあげようか』
『え、ほ、本当に私に言ったんですか……？
私が見えるんですか……？』
恐る恐るさよが尋ねる。
ついに、ついに貰えた返事だ。
涙が出そうになる。
『見えるよ、勿論。
確かに君は存在感が薄いみたいだけど、大丈夫。
この俺、ＧＳ横島忠夫に任せておけば、
美女と美少女の悩みは絶対に解決してやるから』
『はわ～、お話出来てますっ。
今、私、お話してますっ。
私、相坂さよです。
横島さんと仰るんですね。

よろしくお願いします～』
話をする事、という実に低レベルな願いを叶えて貰ったさよは
大喜びで横島に話しかけた。
６０年の孤独である。
それはもう喜んだ。
喜びすぎて霊視出来るのに普段見えてないクラスメイトに見えてしまったぐらいだ。
『取り合えず、場所を変えようか。
今、向こうで宴会やってるからさよちゃんも行こう。
きっと楽しいと思うよ』
『え、宴会ですか。
私、初めてです。
宴会行ってみたいですっ』
はしゃぐさよの肩を横島が掴み、引き寄せる。
何故か、クラスメイトの一人がそれを見て立ち上がったが、
さよはそれどころでは無かった。
初会話の後に抱き寄せられ、そのまま教室の外へと飛び出したのだ。
誰にも知られないまま皆勤賞だったさよの初めてのサボリは、

霊体同士の空中浮遊デートだった。
『わっ、うわ～。
と、飛んでます。
飛んでますよ～』
『さよちゃん、飛んでなかったの？』
幽霊になれば基本的に浮けるし、飛べる。
逆に歩く方が難しいのだが、ここは個人差がある。
飛ぶという感覚は生きてる時には無かったものだから、
生前の感覚を忘れてない者は下手だったりするのだ。
空を飛んでしまえば、中学校から廃ビルまで大した距離では無かった。
空のデートではしゃいで、きゃーきゃー言ってたさよは
廃ビルに着いてまた驚く事になった。
『おーっ、やーっと戻ってきた』
『お主がおらんと始まらんぞい』
『お神酒がぶがぶやってたくせによく言うよ』
『おいおい、横島の旦那の前で喧嘩なんかすんなよ』
ここら辺りの幽霊達が何人も何十人もいるのだ。

長年、住んでいるだけあって顔は全員知っているさよである。
しかし、彼等が集まっている所なんて見た事が無かった。
「おう、ただいま。
そんで、一人仲間の追加だ。
この可愛い女の子は相坂さよちゃん」
幽体離脱していた横島がさよを抱きしめたまま身体に戻り、
紹介する。
生きてる人だったの、とか
じゃあなんで私を触れるの、とか
目を白黒させていたさよだったが、
幽霊達の視線が集まってる事に気付いてぺこりと頭を下げた。
『あ、あの、相坂さよです。
６０年幽霊やってます。
よろしくお願いします』
『６０年だって！
儂らより先輩じゃないか』
『待て待て、俺は見かけた事無いぞ』

『おめえ、さっきまで地縛されてたから、
そば屋の電柱しか知らねえじゃねえか』
『なんだと、俺は電柱登れるから遠くまで見渡せるんだよ』
『範囲が狭いつってんの』
『あんだと、てめー未練解消したろかっ』
『いいから先輩に御饌の良い所を差し上げろ』
様々な年代の様々な幽霊達が楽しそうに騒いでいる。
そして、その誰もが横島を慕い感謝している様子も見せる。
いよいよ何か凄い所に来ちゃった、とさよはわくわくし始めていた。
「この子、ちょっと存在感が薄いみたいだから気付かなかったんだろうな。
今は俺が触ってるから認識できるけど。
これから仲良くしてやってくれ」
『よ、よろしくお願いします』
改めてさよが挨拶すると、幽霊達も当然のように受け入れてくれた。
ここが清浄な場になっている事も幽霊達のハイテンションに繋がっている。
「という訳だから、さよちゃんは俺の膝の上ね」
『は、はい、よろしくお願いします』

あぐらをかいて座り込んだ横島の太ももの上にさよが横向きに座る。
そして、その前に何とか物理干渉出来る霊が、お神酒や御饌なんかを置きだす。
まあ、横島がスーパーで買ってきたものだが、
本気の思いを込めて供えればスーパーの総菜でも御饌となるのだ。
それは別に横島の霊力とは関係なく、込められた気持ちの話である。
「ほら、さよちゃん、あーんしようか。
ほら、あーんって」
『そんな子ども扱い、恥ずかしいですぅ』
これはさよの容姿が可愛くて、セクハラしたいというだけでなく
干渉力が弱いさよの為にやっている事でもある。
脚でさよの尻の感触を楽しんでいるし、
セーラー服の胸元覗き込んでるし、
自分に寄りかからせて柔らかさを愉しんでいるけども、
さよの為にもなる事なのは確かだ。
実際、さよは大喜びしている。
それは間違いない事だった。

それから宴はどれ程続いただろうか。
昼休みの半ばにさよが連れてこられて、
もう小学生達なんかは下校し始めている時刻となった。
幽霊の中に子供達の登下校見守り隊がいた事からお開きとなった。
幽霊達に予定も何も、と思うかもしれないが
実は結構縛られているのだ。
「じゃあまたな。
みんな、成仏したくなった時は俺の所に来いよ」
『ふふ、その時は頼むわね。
さよちゃん、また会いましょうね』
『へへ、旦那、今日はありがとな。
相坂さんもまたな』
「お互い様だろ。
俺も話が聞けて助かったし」
『はい、またお話ししましょう』
霊達は口々にお礼を言うと、また街の中に戻っていった。
地縛は横島が解いてしまっているが、

それでもぞれぞれに気に入った場所や見ていたい人間がいる。
清浄な土地でリフレッシュして気分爽快、
また新たな霊生活を、ってなもんである。
「行ったか」
『はい、皆さん、優しい方達ですね』
「霊は現世のしがらみを忘れて、心穏やかに
恨みも苦しみも忘れてしまえば後は楽しいばっかりなんだよ。
優しい自分を取り戻させるのが、成仏させる基本だしな」
『そーなんですか』
「そうなんですよ」
話しかければ返事がある。
笑いかければ笑顔を見れる。
それだけの事がとても嬉しくて、他の霊達が解散しても
さよは横島に抱き着いたまま、離れる事が出来なかった。
「じゃあ、さよちゃんが皆に気付かれるように特訓しようか」
『そんな事が出来るんですか』
「最初、なんて言って付いてきたんだっけ」

『……そうでした。
よろしくお願いします』
他の人と会話できる事が嬉しすぎて、忘れてしまっていたさよである。
「うーん、でも、明るすぎて雰囲気出ないな。
場所変えるか。
ちょっと待ってて」
そう言って横島は宴の後を片付け始めた。
といっても散らかっている訳ではない。
物質的にはほとんど動いてないのだ。
ただそのままにはしておけない。
それは場に対して礼を失した事になる。
土地神と交流したり、無機物だった物に芽生えた魂と
気持ちいい事したりしていた経験から横島は自然とそういう考えをする。
今はまだ、自我の芽生えてない物でも
これから芽生えた時にどう扱われてきたかで性格が変わるのだ。
どうせ土地神とか付喪神とかになるなら、
可愛い女の子になれよ〜、という邪念が混ざるのはご愛敬だろう。

「こんなもんかな。
でも、場所どこにするかなー。
山は遠いし、ホテルも遠いし……」
さよは特に何も言わず、にこにこと横島にひっついている。
一緒にいれる、ただそれだけで嬉しいらしい。
少し考えこんだ横島は不意に一階のシャッター前に飛び降りた。
シャッターに張り紙はしてあるが、売り物件とは書いていない。
ただ、連絡先として学園事務局の電話番号が書いてあるだけである。
騒めく通行人を無視して、横島はまた屋上に駆け戻った。
「あ、もしもし、学園長さん？
ちょっと言いたい事があるんですけどいいですか？」
買ったばかりの携帯電話を取り出し、
横島は嫌そうな顔をしつつ学園長に電話をかけた。
よりによって、最初につかう相手が爺さんか、と思うが
楓や刹那はまだ授業中だろう。
仕方がない。
「もしもし、学園長さん。

ちょっと話したい事があるんですけどね」
横島の要望は簡単だ。
このビルをくれ、というものだ。
普通にこんな事を言えば狂人だろう。
図々しいクレクレとかいうレベルを超えている。
だが、横島の力と立場でなら成り立つ。
ここを活動拠点にしてやるから、と。
学園側にとっても横島の居場所、連絡先の把握は重要である。
学園長室で美女もいないのに力の一端を見せたのはこういう時の為だ。
ただ、それだけでは暴力を背景にした脅しのような物だ。
だから、それだけではない学園側のメリットも提示してやる。
それは霊達の鎮魂、慰撫。
行うだけでなく、霊達への接し方から指導する。
学園の霊能方面でのアドバイザーになってやろうというものだ。
魔法使いばかりがいて、そちら側の知識、力が不足しているのは明らかだ。
街にいる霊達の不満まで合わせて教えてやると、学園長は
「儂の方からお願いしたい話じゃ」と言って承諾した。

横島が電話をして２０分足らず。
それで一つの物件を手に入れていた。
しかし、話術は使っても詐術ではない。
霊達の為に、この街の住人の魂の安らぎの為に横島がいた方がいいのは事実なのだ。
横島はしめしめ、と悪い顔をしていたが、さよは単純に感動していた。
霊達の不満、不安を解消してくれる人。
生身の状態のはずなのに、さよには横島がきらきらと輝いて見えていた。
「という事で、ここが当面の俺の家だね。
さよちゃん、おいで。
一緒に中を見よう」
『はいっ』
屋上のドアのノブをバキッと力づくで壊し、中に入る。
廃墟探索であり、新居探訪でもある。
屋上階段部屋には何も無い。
照明が点いているはずもなく、古びた窓から差し込む光だけが光源だ。
コンクリート剥き出しの壁に、急な角度の階段。
エレベーターも無いし、階段に手すりもなく、滑り止めも無い。

「結構、年代物って感じだなー。
散らかってないだけマシってとこか」
『そういう物なんですか』
差し込む光の中をホコリが舞い上がる。
下に降りようとすると、さよはひしっと横島の腕に抱き着いてきた。
「柔くて気持ちいい……じゃなかった。
もしかして、怖い？」
『は、はい……』
恥ずかしそうにしながら離れないさよの頭を撫で、横島が微笑む。
気弱な幽霊なんてどうしても、元同僚の女の子を思い出す。
「明るくするけど、離れないで欲しいな。
いや、もっとぎゅっとしてくれたら嬉しい」
さよは横島のスケベな思惑に気付いていないのか、
無邪気に抱き締める力を強めてふにっと喜ばせた。
『わぁぁ、明るくなりましたぁっ。
凄いですっ、
何したんです？』

文珠である。
『明』で光る玉に変えて転がしたのだ。
それだけでフロア全体を照らす光源になる。
楓と刹那という安定供給源があるから、こんな事にでも使えるのだ。
「中は何も無しかな」
階段スペースとフロアの間にも区切りは無い。
階段を降りたら、ただがらんどうのフロアがあるだけだ。
きっちり片づけてある辺り、ちゃんと再利用する気の建物なのだろう。
窓はガラスは外され、外から木の板を張ってある。
光源を作らなければ本当に真っ暗になる。
『結構広いですね』
「住居にするには広いなー。
店舗にすると思うと、ちょっと狭い。
微妙だ」
場所も大通りには面して無い。
形式的には店舗というよりオフィスビルだったのだろう。
『お店するんですか?』

「いや、今の所そのつもりは無いよ。
情報は色んな方向から必要だから、そのうちやるかも知れんけどな」
二階に降りてみる。
こっちも三階とほぼ同じ。
フロア一面何もなく、物もない。
「住居にすると思うと全方面に窓があるの邪魔臭いな。
こっちなんかは隣のビルのおかげで日は射さんが……」
『そうなんです?
私、お日様好きですよ』
仮にも幽霊とは思えない発言である。
静かな夜の方が好きなのが一般的な霊である。
さよは色々と規格外な霊のようだった。
一階。
外に繋がる両開きのガラスのはまったドアがあり、その向こうにシャッターがある。
店舗のドアにしては小さい。
オフィスビルだった可能性はより高まった。
「ドアとか窓とか、取り合えず後回し。

まずは、さよちゃんだな」
『え、え、私ですか？』
「うん、待たせたけど、やっと処置できるよ」
そう言うと横島は『清』の文珠を作り出し、
一気にビルの中の汚れやほこりを取り除いた。
そうして、さよと向き合い両手を彼女の頭の上に置いた。
『あ、あのぅ……』
「これから、俺がさよちゃんを撫でていく。
身体の表面をずっとね。
さよちゃんは撫でられてる所を意識して。
自分の輪郭をはっきりと強く認識するんだ」
『自分の輪郭を、ですか』
「この処置が終わったら、俺がいない時でも皆から見えるようになる。
頑張ろう」
『はい、頑張りますっ』
ぐっと拳を握るさよの頭をてっぺんから横島の手がゆっくりと撫でていく。
切り揃えられた前髪も、ストレートに長く伸ばした後ろ髪も、

丁寧にゆっくりと。
傍から見れば横島は何もしてないように見えるが、
勿論そうではない。
薄く、非常に薄く、霊気を纏っているのである。
霊気を見る事が出来る者でさえ気付かない程。
よくみたら肌艶がいいような気がする、ぐらいのものである。
しかし、これこそ横島の真骨頂。
神族、魔族すら倒せる力に同業者ですら勘違いしている者が多いが、
横島の最も得意とする所はその繊細な霊力コントロールにある。
薄く薄く生身と変わらないレベルに霊気を纏う事で得られるメリット。
それは幽霊を押し倒せる事である。
攻撃意思を一切持たず、更にうすーくする事で
ほぼ生者との交わりと変わらない感触を双方が味わう事が出来るのだ。
開発経緯は正にそのまま。
温もりが欲しいと悲しむ女幽霊と出会った横島は、
ヤル事で成仏させる事が出来ると気付いた。
そして、相手も自分も悦ぶ最高の浄霊方法だとこの技術を磨いたのだ。

横島流奥義『超うすうす』
この技を身に着けた後、横島はどんなタレントなんかよりも
「最も抱かれたい男」となった。
ただし、アンケート投票者の生死問わずの条件付きだが。
「さあ、次は顔を触るよ。
おでこ、こめかみ、まぶた、目の下、ほっぺた……
『あ、あ、温かいです……横島さんの手、あったかい』
触る場所を言いながら、さよの身体に触れていく。
すると、触られた場所の透明度が減って、はっきりと色づいていく。
認識を強化する事で存在力を増やす処置である。
「次は首なんだけど、その前にキスするね」
『き、き、きす？
きすってあの、キス……？
お魚じゃない方の……
こ、恋人同士がやるとかいう、伝説の……』
「そうだよ。
外側だけじゃ、片手間だし。

さよちゃんの可愛らしいピンク色の舌を舐めないと」
『ふわぁぁぁ……』
目をぐるぐるさせているさよの桜色の唇に、横島の霊気を帯びた舌が這って行く。
あくまで、処置である。
唇の裏側、歯茎、歯、歯の裏側、舌、舌の裏からほっぺたの内肉。
丁寧に丁寧に舐めていく。
そうして霊気を含んだ唾液を飲まされる。
するとさよの身体全体が色濃くなっていく。
凝縮された霊気を取り込み、さよの霊としての力が上がっているのだ。
そうしている間にも手はほっぺたを包み、顎の下を撫でて、首をさすっていく。
さよが舐め返すまで、横島はたっぷりとしつこく舌を舐め続ける。
「じゃあ、いよいよ身体の方いくよ。
セーラー服着たままも素晴らしいけど、今日は脱がすから」
『は、はぃ……』
生きている者なら服の下には身体がある。
当たり前の事だ。
だが、霊となった者は自分に一番しっくりくる恰好をしているので、

身体というのが無い事もある。
だからこそ、横島は予告する。
相手が自分の身体が女だったとはっきり思い出すように、
強く意識するように。
幽霊抱いた数なら世界一を自称していた男は、
しっかりとノウハウを確立していた。
「さよちゃんのおっぱいってどんなだった？
脱がす前に教えてよ」
『ひゃっ、そんな……ふ、ふつうです。
そんなに大きくも無いですし……』
だから、この発言も別に言葉で辱めている訳ではない。
しっかりと自分の身体を思い出させているのだ。
決して、さよの反応が可愛いから苛めている訳ではないのだ。
多分。
「はい、ばんざいして？
みんなに気付かれて、お話するためだから、ね？」
さよは６０年前の１５歳なのだ。

婚前交渉などもってのほか、と言われてきた世代である。
恋愛したい、というのはさよの未練の一つだったが
ここまでの事は奥手のさよは想像していなかった。
それでも真っ白な肌を桃色に染めて、さよが頷く。
クラスメイトとお話したいという欲は羞恥を超える。
リボンをほどき、横島は手早くさよのセーラー服と下着を脱がせてしまう。
６０年前の古いセーラー服だろうと、脱がせ方を熟知しているのは横島だからだ。
そして、手で隠そうとするさよの腕をつかみ、
ぷるんと現れた胸を凝視する。
「結構、大きいね。
６０年前でこんな大きかったら皆から見られてたでしょ」
『あぅ～……確かに男子とか、たまに先生からも視線は……』
自分の胸を見つめられている恥ずかしさから、
さよは斜め上なんかに顔を逸らしている。
さよが抵抗を諦めると、無骨な手が可愛らしい指を一本一本撫で、
手の平をなぞり、腕をまんべんなく擦りながら登っていく。
鎖骨を撫でて、脇に横島が顔を寄せる。

「さよちゃん、いい匂いがする」
『やっ……』
脇の匂いを嗅がれるというのは、
女子にとってこれほどの羞恥も無い。
そんな事されるぐらいなら裸見られた方がマシという子も存在するくらいである。
だが、それでさよは自分の匂いというものを意識した。
霊になると忘れてしまいがちな感覚が、嗅覚である。
自分から一切匂いのしない霊は、匂いそのものを忘れてしまう。
だからこそ、あえての匂いを意識させるのだ。
それが生前の記憶を強く思い出す。
さよもまた、思惑通りに生前の事を思い出し、
十代の少女特有の汗臭さとほのかな甘い匂いを出し始めた。
「乳首も小さめで可愛いなぁ。
こうツンと誘っていやらしい」
『ひゃあ!?』
ついにさよの胸に横島の手が伸びてきた。
さよは刹那並に、むしろ以下かもしれない程小柄だ。

だが、胸はかなり違っていて身長の割には結構ある。
脇を嗅がれて泣きそうなさよの胸を
ふにゅふにゅと揉んで撫でる。
くにくにと乳首の形もしっかりと認識させ、念のためか口にも含む。
吸ってもみるし、舐めても見る。
あくまで処置をしているはずである。
そのはずだが、横島の手の滞在期間は何故か胸だけが異常に長かった。
それだけしっかりと存在感を増すべき場所だったのだろう。
そして、長らく胸を撫で続けた手が、
あばらの浮いた横腹を撫で、お腹、背中と進む。
途中、何度かまた胸に戻りつつ、
上半身を撫できってしまうと、横島はまた、さよの頭を撫でてキスをした。
そうして、今度は自分のズボンを降ろしたのである。
現れたのは鬼こん棒。
父親の通常時ぐらいしか見た事の無かったさよに、これは強烈すぎた。
嗅覚を取り戻したさよの鼻に、生臭い男の匂いが漂ってくる。
「という事で今日の最後の処置だ。

舐めてくれる?」
『な、舐める……こ、こんな……だって、これって……』
もう一度言うが、さよは６０年前の１５歳である。
フェラチオは一般的では無かった。
エロ本なんかも流通していない時代だった。
それから６０年、呑気に誰とも交流もなく過ごして来たのだ。
フェラの事を知る事など無かった。
ぎりぎり性交の事だけは知っているという程度なのだ。
それも、男の人に迫られてもこれをさせてはいけない、
という事で教えられたようなレベルだ。
生殖器であるが、小便を出す所でもあるはずのモノを舐める。
それがさよにとってどれほど高いハードルか、
現代人では中々分かりづらい事だろう。
「無理そう?」
さっきまではなんだかんだ言いながら
気持ちよさそうに撫でられていたさよだったが、
想像もしていなかった事に驚き、声を失っている。

「どうしても嫌なら、今日した事を毎日何度もする方法もあるよ。
時間はかかっちゃうけど……」
『……いえ、やります。
お、おちんちんを舐めたらいいんですねっ』
グッと拳を握り、さよは意気込む。
『で、ど、どうすればいいんでしょう……
あ、しゃがむといいのかな……』
えーっと、えーっととまごつきながら、さよが横島の前に正座をした。
座る、と言えば正座の世代である。
そして、ゆっくり、ゆっくりと顔をちんちんに近づけると、まじまじと見つめている。
禁欲を宗とする世代でも、異性への興味はある。
『じゃ、じゃあ……』
恐る恐る、近づくとちろりと舌をつける。
『な、舐めましたっ』
ガッツポーズである。
やってやったぞ、と鼻息荒く顔を輝かせるさよに横島から残酷な言葉が発せられる。
「あーっと、そうじゃなくて舐め続けて貰わないと……」

『ええっ!?
まだなんですかっ!?』
ショックを隠し切れない様子のさよに、
やっぱり横島は懐かしさを感じていた。
産まれたのが３００年前のあの娘もそうだったな、とか。
他にも妖怪娘なんかもそういう反応だった。
「口でするなんて汚らわしい」とか言いがちだ。
性には人間よりも開放的なのに、変態的な行為には劇的に嫌悪感を示す。
「ごめん、説明が悪かった。
俺が良いというまで舐めて、出来れば口に咥えて欲しい」
『口に……分かりました』
目を閉じ、もう一度決意しなおすとさよは意を決してぺろりと舐めた。
一度やってしまえば、慣れてくる。
ちろちろ、からぺろぺろになり、べろべろになってちゅぱちゅぱと変わる。
さよは元々霊気に対しての素質が無かった。
だから、はっきり言ってとても不味いし臭い。
しかし、霊体にとって横島の精液は麻薬のように中毒性があった。

霊体そのものの強化にすらなる霊薬である。
先走り液をちゅうちゅうと吸って「なんで」と思いつつも、うっとりとしている。
小さな口を精一杯広げて、中に含んでいる。
「どう?」
『はう、なんか不思議です。
臭いのに、なんでかもっと舐めたい気がしてきます』
ちゅぱちゅぱと下手糞に吸い付いて、もごもごとする。
忌避感は薄れたようだが、全く知識の無いさよはやはり下手だった。
ぎこちなさは興奮出来る要素だが、このままではいつまでもいけない。
そう判断した横島はさよの頭に手を添えた。
「さよちゃん、突くよ。
喉で扱いて貰う。
きついかもしれないけど頑張って」
『ふ、ふぐう!?』
ぐいっと肉棒をさよのか細い喉に押し込む。
すぐに引き抜くが、また強く押し込む。
『んー、んーっ!』

さよはじたばたと手を動かして慌てるが、横島の腰は止まらない。
生者にすればむせたり、息が出来なかったりで危険でもあるだろう。
だが、さよなら無茶しても大丈夫である。
それに、がんがん突いたりはしない。
さよも少しづつ落ち着いてきて、
喉を広げて受け入れればいいと気付いた。
苦しくても、臭くても、無視されていた頃よりずっと幸せだという思いが、
さよにはあった。
何をされたとしても、もう横島から離れられないと自覚していたのだ。
びゅるっとさよの喉奥を精液が叩く。
霊気を扱う素質の無さと、霊体である事で
さよには臭くて不味いのに中毒性があるという妙な事になってしまう。
「さよちゃん、飲んで」
素直に従い、ごくんと飲む。
すると身体がはっきりと色づいてきた。
『わぁ、すごいっ……
これで私も皆から気付かれる霊になれるんですねっ』

「うん、今でも随分違うよ。
これを毎日続けたら、物質化も出来るようになる」
『ま、毎日ですか……』
終わりじゃないと聞いて少し項垂れたさよだったが、
すぐに顔を上げて拳をぎゅっと握った。
『でも、頑張りますっ。
きっとクラスメイトの一員になりますからっ』
横島だけしか見ている者がいないのが勿体ない、
華の咲くような笑顔だった。

近衛近右衛門の失敗

麻帆良学園の土曜日。
学園都市で学校が休みだから街は静か――という事もなく、
朝の通学ラッシュが無いだけで
むしろ、授業が無い日という事で一段と賑やかになる。
拠点としてビルを手に入れた翌日、横島は朝から街に出ていた。
若々しいパワーに溢れた喧騒に包まれている街は、
人の少ない時間に見たものとはまるで別な場所だ。
日本の中ではあるが、魔法使いが管理している治外法権の街だ。
ルールから違う。
学生でも学園側に届け出を出せば、店を出してもいいのだ。
ほとんどがフリマの延長程度のものだが、稀に本気の店もある。
その一つであり、代表格でもあるのが「超包子」である。
ワンボックスのワゴンを改造した屋台風の店で、
屋台の前に椅子とテーブルの置かれたオープンカフェ方式で本格中華が味わえる

コスパの良さと味で評判が高い。
『あ、古菲さんだ』
「ん、知り合い？」
『はい、クラスメイトです』
「へー、これまた可愛い子だなぁ。
君達のクラスってレベル高すぎじゃないか」
褐色で小柄なチャイナドレス娘が手早く料理を運んでいる姿が見える。
午前中の微妙な時間ゆえに、まだ客もそう多くない。
チャイナドレスの横のスリットから見える太ももに釣られて
横島はこの店を利用する事に決めた。
この店の利用客としてそう珍しくも無いパターンだ。
超包子の常連は大体が、「味のファン」「店主のファン」
「オーナーのファン」「ウィトレスのファン」に大別されるのだ。
ウェイトレスのファンは味のファンの次に多い。
「いらしゃいネ。
あら、あんまり見ないお兄さん。
初めてカナ？

ご注文は？」
「おっと、こっちも可愛い。
凄いな、可愛い女の子だけでやってるのか、ここ」
ワゴンの窓口に注文に行くと、応対してくれたのは黒髪お団子の美少女だった。
さよが挨拶しているが、当然返事は無い。
「フフ、そんなに褒めても安くならないヨ」
「いや、お世辞じゃないんだけどな。
炒飯と麻婆豆腐とチンジャオロースと
小籠包と蟹と玉子のスープと君のお名前と連絡先を頼めるかな」
実は昨夜、刹那と楓が来てくれなかったので
横島は金策に行っていた。
街の浮遊霊や地縛霊に聞けば悪い事してる奴はすぐに見つかる。
麻帆良の街は魔法使い達が頑張っているので、悪質な輩はほぼいないが、
他の街なら簡単に見つかる。
懲らしめついでに金品を頂いただけだ。
おかげで今の横島は懐に余裕があり、食べたいだけ頼める。
「す、凄い食欲だネ、最後の以外は承たヨ、お兄さん。

ワタシは超鈴音（チャオ・リンシェン）
この超包子のオーナーでもあるから、贔屓してくれると嬉しいナ」
「するする。
毎日通いつめちゃう。
でも、君みたいな若くて可愛い子がオーナーなんだ？
凄いな、商才もあるんだね」
オーナーを名乗ったからだけではなく、
客商売だから、と感じさせないにこやかな応対に感じ入り
横島は素直に感心していた。
無責任なバイトの若いねーちゃんだと、こんなナンパ客に
眉を顰めたり気持ち悪がったりする事もある。
さよ情報で中学二年生だと分かっているので、
増々その凄さが際立つ。
「お兄さん、ナンパは困るナ。
貴方のような人に贔屓して貰えるのは嬉しいガネ」
やんわりと押し返す超に対して、横島もにこやかに代金を払って引いた。
さすがに横島もこの状況で本気のナンパはしない。

ナンパしていい状況かどうかぐらいは経験則から学んでいる。
「中二でもうオーナーかー。
親から貰ったとかじゃなくて、自分で立ち上げてってマジで凄いな」
『超さんは学年トップの成績で、様々な発明もしてるし、
麻帆良の最強頭脳なんて仇名もあるぐらいですから』
何故か嬉しそうにさよが教えてくれる。
クラスメイトの事を話したり出来るのが嬉しいのだろう。
「身体も鍛えられてたな。
おそらく中国拳法だろうが、あの年にしてはかなりの練度だ」
『そうなんですか?』
「あっちのウェイトレスの子とほぼ互角と言った所か。
さよちゃん達のクラスは凄い子ばっかりだね」
えへへーと笑うさよを撫でて、簡易なテーブルに着く。
幸いにも可愛い女の子がレジとウェイトレスをやっているので、退屈はしなかった。
可愛い女の子が働いてるのを見てるだけで癒される程度に、
横島は大人になっている。
「お待たせアル。

炒飯と麻婆豆腐と青椒肉絲と小籠包と蟹と玉子のスープよ。
お客さん、一人で食べきれるノカ？」
「残したりしないから大丈夫だ。
あ、もし、無理って言ったら一緒に食べてくれるなんてサービスが……」
「そんなのないアル。
自分で食べる量も把握できないような男は最低ネ」
言葉とは別に古菲はにこにこしている。
残す男が最低なら、健啖家に好感を持つタイプなのかもしれない。
「それじゃあ、ごゆっくり」
「おう、いただきます」
『わー、美味しそうですー』
しっかりと手を合わせ、全ての料理を８：２でちょっと分割する。
２の方はさよへのお供えだ。
こういうのは気持ちだ。
公家や三方に乗せて捧げたりしなければ、お供えじゃないという事は無い。
「美味いっ。
これは美味いな」

一口食べた後は、もう止まらなかった。
炒飯は干し海老のだしとほのかな醤油と焦がしネギが利いている、
麻婆豆腐は肉の旨味と甜面醤が引き立てあい、抜けるような辛味が刺激的だ。
青椒肉絲は牛肉の旨味に筍とピーマンがシャキシャキとした調和を奏で、
小籠包はほのかにゆず風味、どっしりと肉の脂、木耳コリコリと
三つ全てにほのかに味を変えてある工夫がしてある。
そして、スープは生姜の香る蟹の出汁が奇跡の出会いを果たしている。
がつがつとかき込み、スープをぐびぐびと飲み干す。
十代の頃と変わらないような勢いの食べっぷりだが、
実は変わっている事もある。
一粒も一滴もこぼさないで食べているという事だ。
マナーとしてはなっていないが、
こんなに旨そうに食える人間もそういないという食べっぷりである。
好感抱く者と嫌悪感抱く者と半々といった所か。
作る側からすれば嬉しい反応ではある。
「ごちそうさまっ！
無茶苦茶美味かったよ。

ありがとう」
「いやいや、お兄さんの食べっぷりは見てて気持ちよかったヨ。
どうやら気に入ってくれたらしいナ」
「そりゃ、こんだけ美味いの気に入らない奴なんていないだろ。
営業時間は決まってるの？」
本気で気に入ってしまった横島は、食器を返しに行くと
料理人にお礼を言い、連絡先を聞き出した。
ナンパではなく、営業しているか確認の為である。
それくらいに美味かったらしい。
お供えのおかげでご相伴に預かったさよも嬉しそうだ。
『食べてみたかったんですー』
と、にっこにこである。
お腹をさすりながら帰っていく横島を
超包子の面々が仕事をしつつも見送っている。
「イレギュラーか……敵対したら厄介だナ」
可愛らしい少女オーナーの目の奥は、表情のように笑ってはいなかった。

早めの昼食を終えた横島は、また街をぶらつき始めた。
遊び半分ではあるが、「目的」の為の行動でもある。
正確に言うと目的の為に何をしたらいいのかを探っている段階だ。
近所の幽霊から聞いた話の中で、いくつか調べてみようと思っている所はある。
しかし、まだ街の事もよく分かってない段階では早いと感じていた。
それで街を歩いているのだ。
美女でもいたらナンパしようというのもある。
ビルの方は昨日の内に早速、電気ガス水道を通し、
ベッドとタンスと冷蔵庫だけ買って
『改』『修』で、一気に住居として作り替えてしまった。
元がオフィスビルだったので、給湯室、トイレはあっても風呂は無かった。
当たり前であるが、無いという訳にはいかず
それで一々工事して貰ってたら時間がかかる。
それで文珠で一気に作り替えたのだ。
改めて文珠の利便性は反則である。
横島としては後は女の子を連れ込むだけ、なのだが
そうはいかなかった。

というのも刹那は珍しく日中から任務があるらしく、
昨日はその打ち合わせで来れなかったし、
楓は魔法を知ってしまい、知ってしまった事を知られたので
研修を受けさせられているのだ。
女といちゃつく予定でも無ければ家にいる意味がない。
『あれ、近衛さんだ……
どうしたんだろう?』
周りから見えないのを良い事に
さよのスカートの中をふにふにと触ったりしながらだらだらと歩いていると
何かを見かけて彼女が声を上げた。
「知ってる子?」
『クラスメイトです』
さよの知り合いなど、クラスメイトか元クラスメイトぐらいだ。
視線の先には豪華な赤い着物を着こなしながら、
あまり愉快そうではない顔を浮かべている少女がいた。
暗い顔でベンチに座って溜息を吐いている。
服装の豪華さ、容姿の可憐さとのギャップに痛々しさすらあった。

「……さよちゃんに似てるな。
さよちゃん、実は子持ちだったって事無い？」
『ええーっ、いませんよぅ。
私、恋愛した事も無かったんですからっ』
怒った振りをして、さよがえいっと横島の腕に抱き着いた。
このへなちょこな力で抱き締めるのが精一杯の害意らしい。
「おお、気色ええ……じゃなくて、子孫って訳じゃないのか。
まあそう言う事もあるか。
それより、なんか元気ないみたいだな」
『近衛さん、いつもにこにこしてる子なんですけどねえ。
何かあったんでしょうか』
と、こちらも釣られたように暗い顔になっている。
表情まで似ると、余計に容姿が似ている事が分かる。
しかし、優先順位としては気が沈んでる風の彼女の方だ。
横島はすたすたと彼女の前に近づいていった。
「こんにちは、近衛木乃香ちゃん。
ちょっとお話させてもらっていいかい？」

「えっ、だっ、誰ですか……
うちの事知ってる人……？」
近衛木乃香が戸惑うのも無理はないだろう。
見ず知らずの大人の男から声をかけられたら
大抵の女子中学生はこういう反応をする。
むしろ、不審者と思われようが平然と声をかけれる横島の方がおかしい。
「知っているといえば知っているかな。
でも、知らなくても声をかけたと思う。
君のような美しい女の子が落ち込んでいるのを見るのは辛すぎる」
「あはは、おにいさん気障やわぁ。
そんな事、誰にでも言うとるんちがう？」
「いやいや、男なら誰だって同じ事思うって。
今見せてくれた笑顔の為ならなんだってするのが、男って生き物なんだ」
わざとらしく格好つけて横島はおどける。
別にブサイクではないが、
二枚目とはいかない横島の気障でカッコつけたポーズは
見事に木乃香の顔に笑みを浮かべさせた。

木乃香の性格が人を疑ったり拒むのに向いてない事もある。
世の中に悪い人がいるのは知っているけど、
ほとんどの人はいい人だと信じているような子なのだ。
「お兄さん、本当にうちが暗い顔してたから来たん？
面白い人やなぁ」
「そう？
まあ、木乃香ちゃんが笑ってくれるならなんでもいいんだけどね。
何かあった？
あ、自己紹介しとらんかったな。
俺の名前は横島忠夫。
美女の笑顔を守る事を使命としてる男だ」
クルっと回ると、横島の手には花が一輪握られていた。
それをいかにも恭しく差し出す。
回っている隙にすかさず後方の花壇から霊波触手でもぎとったのだ。
ナンパする為に手品の練習もした事のある横島だ、
このくらいの芸当は朝飯前である。
「わぁっ、凄い。

今の手品？」
「いい男は可愛い女の子の為にいつも花ぐらい常備してるんだよ」
「嘘やぁ。
だって、これ、そこの花壇の花やんか」
そう言いつつも木乃香はちょっと機嫌良さそうに笑って花を受け取っている。
いい感触だ、と横島は木乃香の隣に座ろうとすると、
黒服を着た強面の男が六人もベンチの周りに現れた。
「あ、ええよ、ええよ。
この人、悪い人じゃないと思うわ。
時間までお話するぐらいええやん」
木乃香が言うと、黒服達はそれ以上は近づかずベンチを囲んだだけで突っ立っている。
普通のナンパ男なら威圧感で逃げて行ってしまうだろう。
だが、横島は全く気にもしなかった。
基本的に男は視界に入らないタイプなのだ。
本来ならば木乃香には刹那が常に護衛に付いている。
だが、今日はお見合いの為に学園長は

わざわざ刹那に任務を与えて、違う場所へとやっていた。
この後の事を後に知った学園長は、あまりの裏目ぶりに叫び声をあげたという。
余談である。
「木乃香ちゃんってお嬢様？
こんないかついのがいつも周りに？」
「そんな事ないけど……今日は特別やからな」
「特別？」
「……うち、これからお見合いなんよ」
『ええーっ』
零してしまったのは横島の明るい雰囲気と、
よく知りもしない男だったからだろうか。
聞かせるような話じゃないと分かっているのに、
木乃香はうっかりと悩みを打ち明けてしまっていた。
「うちのお爺ちゃんがな。
なんかお見合いさせたがんねん。
うち、まだ中学生やし早いと思うんやけど……」
「見合いかぁ。

それでこんな格好なんだな。
凄く奇麗で可愛いけど、普段する恰好じゃないから何事かと思ってたよ。
でも、確かに中学生でお見合いは早いな」
「そやろ？
うちもそう言うてんけどお爺ちゃんが聞いてくれへんねん」
『悪いお爺ちゃんですねっ。
孫のお見合いを勝手に決めるなんてダメですよ』
木乃香は元々大人しい性格で我儘を言わないタイプである。
周りに気を遣って愚痴も言わないようにしている。
それが今日だけは不思議な事に、
溜まっていたものをぶちまけてしまっていた。
初めは小さく不満を言っているだけだったが、
徐々にヒートアップしていって、
熱くいかにお見合いが面倒くさいかを語り始めた。
断るに決まってるお見合いをなんでせなあかんの、とか
うちかて好きな人見つけて恋愛した気持ちぐらいある、とか
読みたい本とかあるのに休みが潰れる、とか。

木乃香がぷんぷんと不満を言ってても、
横島は頷いたり、肯定したり、促したりと上手に聞き役に徹していた。
この程度はモテる為には必須の技能であるし、
木乃香の不満など可愛いものであったし、
容姿も可愛いから目の保養になるしで、横島からすれば嬉しい楽しいものだった。
美女、美少女と一緒ならば、この男はそれだけで満足なのだ。
「今からあるの、お見合い？
そんなに嫌なら断ればいいのに」
「うん、そやけど……うちが断ったら迷惑かかるし……
横島さん、ありがとな。
誰かにこんなに愚痴言ったの初めてやわ。
聞いてくれて嬉しかったえ」
『木乃香さん……』
うっかり愚痴を零してしまったが、
木乃香は生来優しい性格で周りを気遣える子だ。
それは横島にも発揮されるようで、にっこりと笑ってお礼を口にした。
その笑顔の可愛らしさが一押しとなり、

横島に一つの犯罪を決意させた。
「じゃあ、木乃香ちゃん、誘拐してあげようか。
いや、違うな。
許可求めたらおかしいか。
ごめんな、木乃香ちゃん、誘拐させてもらうわ」
「え、それ、どういう事なん……？」
微笑み返してきた横島の言葉についていけず、
木乃香が戸惑っていると、突然風景が一変した。
大きい窓と内装に室内にいる事は分かる。
ついさっきまで外のベンチに座っていたのに、
全く一瞬のうちに室内である。
「へ？」
としか言葉は出ない。
ぽいーんと跳ねた事で、ベッドの上にいる事に気付き木乃香は草履を脱いだ。
訳が分からなくても、土足でベッドは無い。
内に根付いた躾は緊急時でも出てしまうものだ。
「木乃香ちゃんともっとお話ししたかったから、誘拐させてもらったよ。

悪いね」
「ど、どういう事？
さっきまで外おったやんな。
どこなん、ここ……」
キングサイズのベッドの上で、女の子座りをして木乃香が呆然としている。
それはそうだろう。
一般人が『転』『移』されたのだ、理解できるはずが無い。
ここは昨日買ったばかりの横島の家の二階。
ベッドの置かれた寝室兼居間である。
まだベッドの他にはタンスと冷蔵庫しか無い、広さも相まって殺風景な部屋である。
「ちょっと、俺の力で転移したんだ。
ワープしたって言った方が分かりやすいかな。
まあ、手品だよ、手品」
「嘘や。
こんな凄い手品ある訳無い……
もしかして、横島さんってまほーつかいなん？」
「いや、俺は魔法使いじゃないよ。

霊能者って分かる？
退魔士とか除霊士とか呼び方は色々あるけど」
それなら分かるけど、と木乃香は妙な顔で首を傾げた。
関西呪術協会の娘である。
退魔士を名乗る人を見た経験はある。
お札みたいなのを使って手品めいた事をする人も。
しかし、こんな超常現象を起こすのは見た事も聞いた事も無かった。
「うちが知っとる霊能者とちがうえ。
こんなん、まほーや、まほー」
「いや、俺は魔法使いじゃないんだって」
この状況に驚きはしても怯えていない木乃香に、横島が驚く。
危害を加える気はない、という意思表示をやるつもりだったのに
必要が無さそうである。
「とりあえず、何か飲む？
と言ってもお茶と珈琲ぐらいしか無いけど」
「わー、冷蔵庫すっからかんやん。
どうしたん？」

「昨日買ったばかりだからねー」
「あー、そうなんやー」
なんとも気の抜ける木乃香の態度である。
器が大きいのだろう、誘拐されてきた家でもうのんびりし始めている。
「数時間したら解放するから、それまでくつろいでて」
「……おおきにな、横島さん。
お爺ちゃんには本当の誘拐やないって、言うとくわ」
「何言ってんだ、木乃香ちゃん。
これは誘拐だよ。
被害者が誘拐犯にお礼言ったらおかしいって」
そう言って横島がにやっと口角を上げると、
木乃香は朗らかに笑った。
「そやなー。
でも、うちの為に横島さんに前科つくんは嫌なんや」
「警察にしっぽ掴まれるようなヘマしないって。
これでも逃げ足は人十倍ぐらいあるから」
覗きとか下着ドロとか警察に追い回された経験は積んでいる。

全くダメな方向に自信満々な横島にけらけらと木乃香は転がった。
「横島さんっておもろいなぁ。
知り合ったばっかりって気がせんわ。
警察から逃げるのもまほー使うん？」
「いや、本当に魔法じゃないって。
そうだ、証拠見せようか。
そもそも木乃香ちゃんの事を知ってた理由でもあるし、
さっきから五月蠅いし」
冷蔵庫から冷えたお茶のペットボトルを出して木乃香に渡すと、
横島はさよと手をつないだ。
この時点で横島は一つ誤解をしている。
木乃香が魔法使いと言った事と態度から魔法を知っている子だと思ったのだ。
木乃香は「おとぎ話の魔法使い」のイメージで話したのだが、
横島は「実際にいる魔法使い」の事を言っていると思っている。
さよを見せようとしたのも関係者だと思ったからだった。
「木乃香ちゃんは幽霊とか信じる？
見た事は……」

「おったらええな、と思うけど
見た事はないなぁ」
「そっか。
今から見えると思うから、驚かないでくれる？
すごくいい子だからさ」
「え、見えるの？
うそぉ……」
隣に座った横島に手を握られ、ドキドキしていると
もっとドキドキする事が木乃香の目に映り始めた。
殺風景な何も無い部屋が見えるだけだった空間に、
徐々に色が付き始め、人の形が浮かび上がって来る。
まさか、本当に、嘘。
固唾を飲んで見つめている木乃香の前で、
はっきりと女の子の姿が現れた。
前髪を切り揃えたストレートロングな髪型も、
顔かたちも良く似た女の子が。
「こちら、相坂さよちゃん。

分かるかな、木乃香ちゃんのクラスメイトなんだけど」
『こんにちわー。
私の事見えますか？
声聞こえます？』
木乃香の方は呆気に取られてしまっているが、
さよは目をきらきらさせて木乃香を見つめている。
念願叶ってクラスメイトと話せるかもしれないのだ。
わくわくが止まらない様子である。
「き、聞こえる……聞こえるけど……
クラスメイトってどういう……あ、もしかして座らずの席の？」
『そうですー。
出席番号一番、相坂さよですー』
抱き着かんばかりにさよは木乃香の肩を掴んで見つめている。
「ふぁぁぁ……ほんまに幽霊なんやねぇ。
こちらこそよろしくなー。
近衛木乃香いうんやぇー」
『知ってますっ。

私、ずっと皆と仲良くなりたかったんですっ。
うう～、お話出来るなんて～』
うるうると泣きそうになっているさよと、
もう事態を飲み込んだのかおっとりと挨拶をする木乃香。
二人の容姿が似ている事もあって、横島すら妙だと思う空間が形成されていた。
「この子、さよちゃんはずっと木乃香ちゃん達の教室にいたんだ。
見えなかっただけでね――
横島は簡単にさよの事を木乃香に説明した。
６０年前の幽霊である事、
ずっと誰にも気付かれず寂しい思いをしていたこと、
それでも誰も恨まず悪霊になる気配が微塵も無いいい子な事、
出来れば友達になってやって欲しいという事。
「そーいう事やったんかぁ。
そんなんなるに決まっとるよー。
っていうか、もううちら友達やんな」
『と、と、友達っ。
横島さん、聞きましたっ!?

今、木乃香さんが友達って……』
ふぇ～んと嬉し泣きを始めたさよを、
二人が優しい笑顔で見守っている。
木乃香はもうすっかり新しい友達が好きになってしまっていた。
「今、さよちゃんが見えてるのって横島さんおるからやんなぁ？
うちらだけで遊んだりって出来ひんの？」
しばらく話をしている内に木乃香が質問してきた。
当然の疑問である。
横島の鍛えられた手に包まれてるのが気恥ずかしいというのもある。
教室にいるんなら教室で会話出来たらもっといいと思う。
こんなに友達欲しがってるなら、他の子達とも仲良くさせてあげたいとも思う。
木乃香は自分が見合いをすっぽかしている事も忘れ、
さよの事を考えていた。
今の三人の体勢は横島は左手で木乃香の右手とつなぎ、
右手でさよの左手を掴んでいる状態だ。
さよにも木乃香にも霊波を流しているから
木乃香にさよが見えているのであって、

まださよ単独で見えるほどの存在にはなっていない。
「今は無理だよ。
さよちゃん特訓中だから、その内俺がいなくても見えるようにはなる。
木乃香ちゃんかなり素質ありそうだし、
木乃香ちゃんが霊能修行した方が早いかもだけどね」
『うう～頑張ります。
こうして木乃香さんとお友達になれたんだし
友達同士で遊びに行ったりしたいですっ』
特訓が辛いのだろう、さよは顔をしかめながらぎゅっと拳を握っている。
「特訓ってそないきついん？」
『きついっていうか、気持ちいいんですけど……
味がちょっと……』
「味？」
遂に出来た同性の友達にテンションが上がってしまっていたさよは
うっかりと口を滑らせていた。
「横島さん、どんな特訓やの？
うちも同じ特訓すれば早く見えるようになる？」

「一つは、こうやって霊波を凄く薄ーくして撫でるんだ。
さよちゃんを傷つけないように、ここにいるって教える感じ。
こういう形なんだよって刻むっていうか……」
そう言って横島の手がさよの腕をさすると
擦られた所が少し色づく。
目に見えるだけ、分かりやすい。
「わぁー、横島さんは触れるんやねぇ。
うちはすかすかや、すかすか」
木乃香も小夜に触ろうとするが、手がすり抜けてしまっている。
横島のやっている事は霊能者でも真似できる者のいない神業に近いので
しょうがないとしか言いようが無い。
「まあ、修行したからなー。
俺だって最初から出来た訳じゃない」
「そうなんや。
幽霊って見える人はそういう体質やと思うとったえ」
「見えるぐらいだと、生まれつき見える人もいるよ。
でも、霊波とか霊気を操って、となると無理だ。

超天才って呼ばれる人でも修行がいる」
はーっと感心している木乃香だが、この程度の話は
本来実家で聞けたはずの話である。
魔法から遠ざける方針のせいで、
霊能や符術、呪術からも遠ざけられた弊害がこういう所で出ていた。
「木乃香ちゃんがやる気ならまずは霊気を意識して出す所からだな」
「横島さん、教えてくれる？」
「いいけど、授業料高いよ？」
「高いの？
いくらなん？」
「木乃香ちゃんの唇」
ぷーっと木乃香が吹き出した。
キザ芸を前に披露したせいで、もう横島のシリアス顔自体が
木乃香には面白く感じられてしまうらしい。
「恰好つけんといてよ、横島さん。
わろてまうやん」
「今のは笑わせるつもりやなかったんだけどな。

隙あらば口説くのは男の義務やから」
「義務で言うたん？」
「いや、本気で言うた」
また木乃香がけらけらと笑う。
『落ち込まないで、横島さん。
あとで私がしてあげますからね』
「うう、さよちゃんはええ子や。
存在感高める為だとしても嬉しいぞっ」
慰めているつもりか、さよが透き通った手ですかすかと横島の頭を撫でる。
そんな事をしていると、ようやく笑いのおさまった木乃香が
握っていた手を離して、どんと横島の胸板に頭突きをしてきた。
「っ木乃香ちゃん……？」
「……あんなぁ、横島さん。
うち、嫌とはいうてへんえ？」
顔を伏せたまま、木乃香は密着して話す。
上げた後ろ髪と着物の襟の間に見えるうなじは、ピンクに染まっていた。
「木乃香ちゃん……」

寄りかかって来ている木乃香の頬を撫でる。
さらさらと親指で柔らかく熱いほっぺたを手の平で包むと、
木乃香は真っ赤にした顔を上げた。
優しくて面白くて幽霊見えるようにしてくれて友達作ってくれて
恰好良かったりもする大人の男。
恋とか愛とかに興味もあるし、一緒におったらドキドキするし、
キスぐらいええかな……これが恋って事なんかも分からんし確かめて見んと……
木乃香にとって、これが初めてのトキメキだった。
「んっ……」
ちゅっと、紅の塗られた薄い唇に横島が吸い付く。
すぐに離して、もう一度。
木乃香は目を閉じたまま、黙ってそれを受け入れた。
やがて、どちらともなく舌が触れ合った。
木乃香の傍に置かれていたペットボトルが床に落ちた。
誰も拾う暇を持たなかった。
「キスってこんなに気持ちええんやね……」
鼻をこすり合わせながら、木乃香が囁く。

「横島さん、何かしてへん？
うち、おかしい。
熱いし、気持ちええし、美味しい」
今度は木乃香の方から横島の口にむしゃぶりついてきた。
じゅるじゅると吸い付いて、
ぎこちなくも貪欲に横島の舌を探して小さな舌が蠢く。

「横島さん……横島さぁんっ……」
キスの合間に呼ぶ声にせつなさが混じり出す。
まとめた髪を揺らしながら、
木乃香の方が上になってベッドの上に二人転がった。
木乃香の霊力素養がありすぎたのだ。
本来、知り合ったばかりの男とこのような事をする子ではない。
体質のせいで超強力な媚薬と惚れ薬を飲んでしまったようなものなのだ。
「んんっ……」
寝転んでキスをしながら、横島が膝を立てた。
着物の裾を割って入り、太もも部分にしみを作る。

木乃香は古風にも襦袢の下には何も着けていなかった。
ぬるっと擦られて、木乃香が声を上げる。
そうして横島は目の前の小柄な少女を抱きしめて、ぐるりと上下を入れ替えた。
ベッドに木乃香を押し倒したのである。
「木乃香ちゃん……もう止まらないよ」
ベッドの上に寝転がらされて、キスした相手にこう言われては
奥手だった木乃香にも意味は分かる。
荒い息を整えもせず、木乃香は横島を見つめ返していた。
「うちは……誘拐されてんやから……犯人さんには逆らえんえ……」
赤い顔をして、木乃香が横を向く。
その言葉を許可として、横島の手が着物の裾に差し込まれた。
「はぁっ……！」
にゅるりとした粘液の存在を確認すると、分泌源であるクレバスを指がなぞる。
丘で粘液をぬぐい、むくむくと固くなった芽をつつき、
摘まんで指の腹で転がす。
そっぽを向いたまま、耐えるように声を上げる木乃香を
横島は間近で見つめて、首筋に唇を落とした。

「あっ、あっ、ぁぁぁぁ……」
しっかりと閉じられていた木乃香の瞼が痙攣する。
蠢く横島の手を太ももで挟み込むと、
何かに耐えるようにして震え、それから小さく息を漏らした。
木乃香の初めての絶頂だった。
「今、すごい気持ちよかったん何……？
電気走ったみたいやったぁ……」
戸惑っている木乃香に横島が微笑む。
「今、イッたんだよ、木乃香ちゃん。
オーガズムとか、絶頂とか分かる？」
「いまのがそーなんや……
こんな気持ちぇえんやなぁ、そら大人も夢中になるわ……」
「もっと気持ちよくなるよ。
ちょっとだけ我慢してくれればね」
もっと？と更に戸惑う木乃香から離れて、
横島は素早く服を脱ぎ去った。
最後までやる気だ。

息子も張り切っている。
「ひゃあぁぁ、そんな大きいん!?
そんなん、そんなんて……」
木乃香が驚き目を見張る。
しかし、横島は淀みない動きで再び木乃香に覆いかぶさった。
「木乃香ちゃん入れるよ。
最初は痛いけど、すぐ気持ちよくなるから我慢して」
横島から足を広げられ、あてがわれる。
迎え入れる為の汁をどろどろに出して、
なぞってくる棒状の肉を木乃香は図らずも潤していく。
気が昂って、見えてしまったのか思い出したのか、
木乃香はさよの名前を呼んだ。
「さよちゃん見んといて……
うちのいやらしいとこ見んといてぇ……」
それが処女だった木乃香の最後の言葉だった。
ぐぐっと亀頭が少女の性器を成人させていく。
お尻の下に広がる着物の裾に、粘液に混じって血が垂れていく。

「うううう……」
きつすぎて痛いぐらいに締め付けてくる穴を
横島はぐいぐいと無遠慮に突き進んでいく。
シーツを握りしめた手が白さを増していく。
半分ほど受け入れさせると、横島は動きを止めた。
木乃香は１５１㎝と小柄だし、刹那と違って純人間だ。
これくらいが限界だろう。
横島は前後に突き動かして、木乃香を揺すりたい衝動を抑えて、
内側から霊波ヒーリングを行っていく。
突っ込んだままなので処女に戻るような事は無い。
癒着していた肉を引きはがされた痛みを軽減し、癒すだけだ。
「ふあぁぁ……なんやの、気持ちええわぁ……」
癒される気持ちよさなので、性的な快感とは違う。
しかし、暖かさと優しさ、安らぎのようなものが身体に染み渡っていく。
優れた資質を持つ木乃香は人一倍その心地よさを感じているようだった。
「動いても大丈夫そう？」
「うん、ええよ……」

横島が少しづつ腰を前後し始める。
浅く、浅く、入り口付近だけを擦り、カリで粘液を掻き出すように。
それから木乃香のお腹を内側からごりごりと抉る。
「っっっ～～」
口を開けて、声にならない声を木乃香が上げる。
悦楽の波が木乃香の中で頂点と達し、横島の首にしがみついた。
清らかだった媚肉が横島を締め付ける。
木乃香の肉が出せと、注げと促してくる。
その要求に素直に答え、横島は早めに木乃香の中に欲望をぶちまけた。
そして、その霊薬の投入が木乃香の歓喜をまた一段深く押し上げた。
「あああぁぁぁ～～」
木乃香の意識が飛んで行った。
震えながら横島に抱き着いて離れない。
こうして関東魔法協会の理事長の孫であり、
関西呪術協会の長の娘である近衛木乃香は誘拐犯の手に堕ちたのだった。
ようやく事態を知らされた刹那がよりにもよって横島に
「大事な人が攫われたから助けて」と電話をかけてくるまで、あと十分。

木乃香は幸せなまどろみに浸り、憂いの無い笑顔を浮かべるのであった。

ＪＣにやにや眺め罪

外観は普通のビルだ。
それが横島の家に着いた刹那の感想だった。
横島は色々と普通じゃない男だ。
新築にしか見えない奇麗さに、
「こんな所にビルを建てる工事などやってただろうか？」と
疑問は浮かんだが、他に目立った特徴は無い。
それがむしろ違和感ですらある。
一通り外周をぐるっと周っておかしな部分は無い事を確認すると、
正面玄関らしき両開きのドアを眺める。
〝男は入るべからず〟
〝美女専用ドア〟
ドアの右と左にそれぞれ書かれた言葉に呆れつつ、
前に立つとドアはさっと開いた。
普通の自動ドアなのか、本当に美女が立つと開く仕掛けなのかは刹那には分からな

い。
常識で考えればただの自動ドアだろうが、
横島という男にかかれば美女検知システムぐらい作れそうでもある。
そして、横島が自分を美女の範疇に入れてくれている事も刹那は疑っていなかった。
何しろ、横島がどれだけいきり立たせていたか身をもって知っているのだ。
昨夜、忙しいから来れないと伝えた時の横島の落ち込みようも、だ。
今度会った時は覚悟をしないといけないと、下着を濡らした事も思い出す。
中に入ると何も置かれていない広いフロアだった。
奥の方にトイレと階段。
窓は無く、換気扇だけがある。
防犯性は高いが、普通にはあり得ない構造だ。
材質もよく分からない。
床は石材と思うがつるつるに磨き上げれていて、まるで鏡のようだ。
まさか横島がスカートっ娘のパンツを覗く為に鏡面仕上げにしていると思わず、
刹那は土足でいいのかと不安になりつつ階段まで辿り着いた。
四階まで続く階段は吹き抜けの螺旋階段だ。
踏板も手すりも骨組みも踊り場も、透明度の非常に高いガラス製である。

これもミニスカ娘でも来た時の為のものだが、やはり刹那には理解できない。
いきなりお洒落な階段に驚くだけだ。
恐る恐る階段を上り、刹那は聞き耳を立てる。
すると微かに二階から音が聞こえる。
話し声に思えるが、内容は不明だ。
そろりそろりと慎重に階段を上っていく。
二階のドアの前まで来ると刹那はもう一度、中の様子を伺った。
出来れば一方的に木乃香を確認したい。
しかし、そういった刹那の思いもむなしく中の様子は分からなかった。
今度のドアはノブがついている。
〝この門をくぐる美女、一切の衣服を捨てよ〟
入口と同じような謎の文の書かれたドアを、そーっと刹那が開く。
そして、その中で見た光景は、
全裸の横島に後ろから抱かれ脚を掴まれて、
Ｍ字開脚させられている着物姿の木乃香と、
その木乃香そっくりの幽霊が露わになったその局部をまじまじと覗いているという
全く理解の出来ないものであった。

「せやから、言うたのに……」
『ごめんなさい……』
「ごめんな、木乃香ちゃん」
背を向けて拗ねる木乃香に、さよと横島が謝り倒す。
呆然としていた所を見つかった刹那が中に入っても、
やっぱりよく分からない光景は続いていた。
「木乃香ちゃんのお願い何でも聞くからさ。
機嫌直してよ、ね？」
『うう……私に出来る事ならやりますから～』
パンツ一丁で横島が何とも情けなく謝る姿に、
刹那はちょっと思う所もあるが、木乃香が怒るのも分かる。
詳しく説明された訳では無いが、木乃香は横島とこの謎の幽霊に頼まれて
局部を見せる事になり、見せている最中を自分に見つかったという事らしい。
怒っているというよりも恥ずかしいのだろう。
刹那は木乃香の感情をそう推理し、
そして自分では木乃香を宥める事は出来ないと諦めていた。

「ほんまに何でも？」
「ほんとほんと、木乃香ちゃんの機嫌が直るなら何でもするって。
木乃香ちゃんに嫌われるのだけは勘弁や」
「ほんならな……」
木乃香が何事か横島に耳打ちする。
その仲良さそうな光景に何となく二人の関係を察し、
刹那の胸に黒い感情が湧く。
「そんな事でいいなら全力を尽くすよ」
「ほんま!?
約束やぇ」
知り合ったばかりのはずなのに、仲良い様子を見せられ
刹那はベッドの上の横島の隣に勢いよく腰かけた。
昨日の早朝は自分をあんなにしたくせに、と思う。
そういう自分に驚きながらも止める事は出来なかった。
「そろそろ説明してください！
まずは何故お嬢様を攫ったのか。
私は学園長に説明しないといけないんですかね！」

怒った顔で密着すると、横島の手が腰に伸びてくる。
刹那はスケベな顔して密着してくるぬくもりに怒りが霧消していく事を感じながら、
なるべく怒ったふりをして、横島に話を促した。

「――――――取り合えず、お嬢様を攫った経緯については理解しました。
そういう事情であれば、分からなくもありませんし……」
「いやあ、刹那ちゃんならそう言ってくれると思ったよ。
というか居たら同じことしたんじゃないの？」
「せっちゃん……」
横島を挟んで反対側に座る木乃香が嬉しそうに見てくる。
「あ、いえ、そんな大それた事、私には出来ません」
「またまた～、じゃあなんで護衛から遠ざけられたんだ？」
「それは、どうにか中止にしようとはしたかも知れませんが
お嬢様を誘拐という手段は……じゃなくて、
そもそも護衛とは何の事でしょう？
私は捜索のお手伝いを引き受けただけですが」
言い訳はしてみたものの、自分でも嘘の下手さは理解している。

案の定、横島も木乃香も刹那の言い分を信じた様子はない。
「刹那ちゃんが普段は日中忙しいって言ってたの、
木乃香ちゃんの護衛をしてるからじゃないのか」
「そうなん？
せっちゃん、うちの事守ってくれてたん？」
「えっ、その、ちっ、違いますよ。
えーーーーっと、えっとですね……」
刹那はコンプレックスから拗ねたような態度を取ってたりするが、
元来素直すぎる性格である。
その上、コミュ力も無いし、トーク力も無い。
いい感じの嘘が全く思い浮かばなかった。
しかも横島の向こう側から覗いてくる木乃香が、
不安そうな表情を浮かべている。
「……護衛をしている事もあります。
今日みたいにしていない事もあります」
結果、嘘は言ってないというギリギリな線が刹那の出した結論だった。
ほとんど毎日、護衛しているけども、極稀に出来てない日もあるので一応嘘ではない。

「そうやったんや。
ありがとうな、せっちゃん。
うち、せっちゃんに嫌われてるんかと思うとったんよ」
たたっと嬉しそうに木乃香が刹那の傍に駆け寄ってきた。
結果、今度は刹那が横島と木乃香に挟まれる形となった。
凄く嬉しいような、凄く恥ずかしいような、凄く怖いような気持ちになって
刹那は返事が上手く出来なかった。
「き、嫌いになど、私がこのちゃんを……
す、すいません、お嬢様を嫌いになどなりません……」
「このちゃんってまた呼んでくれるん？
お嬢様なんて呼び方やめてえな。
昔みたいに、な」
木乃香と二人きりならまず逃げただろう。
今だって逃げられるなら逃げ出したい。
だが、横島の手が後ろからお腹を掴んでいて刹那は逃げようが無かった。
「こ、このちゃん……」
「んふー、せっちゃん。

もう一回言うて」
「……このちゃん」
「せっちゃん」
にこにこの木乃香に釣られて、刹那の顔にも笑みが浮かぶ。
本当は、ずっとそう呼びたかったのだ。
正体を知られて嫌われるのが怖くて、
それならいっそと自分から遠ざかった。
逃げられない状態だから、という言い訳が刹那に一歩歩ませていた。
「そ、それより、このこのちゃんそっくりの浮かんでいる幽霊はどちら何ですか？」
『わ、私が見えるんですか？』
「おー、さすがは刹那ちゃんだな。
さよちゃんが見えるなんてな」
「せっちゃん、凄いわー。
うちやって、やっと見えるように……って。
見えてるー、どないしよ？
横島さんから離れたのに見えてるー」
『ええー、木乃香さんも見えるようになったんですかっ』

木乃香も木乃香に似ている幽霊もはしゃぎ出す。
木乃香に似ている分、嫌いにはなれないが
何なんだこの幽霊、という思いはある。
「この子は相坂さよちゃん。
刹那ちゃんや木乃香ちゃんのクラスメイトだよ」
「クラスメイト……？」
『あ、あの、私、出席番号一番、相坂さよですっ』
「ほら、せっちゃん、この子あの座らずの席の子やえ」
「え……座らずの席？
出席番号一番って……本当にいたんですか」
出席番号一番は名簿に載っているが会った事のある者がいない存在だ。
一年生の初め頃は話題にもなったが、
そのうち不登校かなんかだろうと忘れてしまっていた。
「幽霊だったんですか……」
『はいっ、私は誰からも気付かれなかったけど、
ずっと皆さんを見てたんですよ。
それで、横島さんが見つけてくれて』

「これでも大分存在力を強化したんだよ。
　刹那ちゃんも今まで見えてなかったんだろ？」
「なるほど、そういう事ですか……
　存在力を強化ってそんな事出来るんですか」
　京都神鳴流はただの剣術ではなく、退魔を請け負ってきた流派だ。
　当然、妖怪だとか怨霊だとかとも戦う。
　知識もあり、霊気を使える分、刹那の方が横島の無茶苦茶さが分かってしまう。
「……出来るんでしょうね、貴方なら。
　どういう事をするんですか？」
「霊気を纏って撫でてやるんだ。
　こういう風に」
『ひゃんっ!?』
　今度こそ刹那は目を見開いた。
　横島の手がさよの頬を撫でるのが、
　素手で幽霊を触っているようにしか見えないのだ。
　霊能者だとしても余りに非常識である。
「ま、まさか、それで霊気を纏ってるんですか!?」

「うん」
『ひゃうぅ』
耳の裏を擦られてさよは悶えている。
信じられない神業だが、やっている事は女子中学生の幽霊を
卑猥な触り方で感じさせているだけだ。
そのギャップに刹那は頭を抱えた。
「せっちゃん、それ凄い事なん?」
「凄いどころじゃないですよ。
霊体を攻撃するでなく触るだなんて聞いた事もありません」
「そーなんやー。
横島さんって凄いんやなー」
木乃香の呑気な言葉に気が抜ける。
そうこうしている内にさよはくったりとして、宙に漂い出した。
「まあこうして撫でる事で輪郭を認識させてやる事で
存在力を高めていくんだけどさ。
一つ問題があるんだ」
「問題……ですか?」

「そう、さよちゃんは自分のあそこをはっきりと見た事無かったらしくてね。
魂に思い出させるのに時間がかかる。
それで木乃香ちゃんに協力して貰ったんだ」
「……そういう事だったんですか」
初めに見た光景の謎が明かされ刹那は頷き、木乃香は顔を赤くした。
男の子と違い、女の子は自分のを見るには鏡が必要だ。
自分のものをちゃんと見た事無いという女子はそこそこいる。
「うん、そういう事なんだ。
けして恥ずかしがる木乃香ちゃんが可愛いからとか、
着物着たまま脚を開くのが素敵だからとか
そういう理由では無いんだよ、うん」
言い訳めいた横島の言葉が逆に思惑を伝えてくる。
ただ、今も恥ずかしそうにしている木乃香を見ると
刹那は気持ちが分かる気がした。
「もぉっ、横島さんっ」
「うおおおっ……」
ごちんと木乃香が金槌で横島の頭を叩いた。

なかなかの音がして横島が痛がってのけぞるが、刹那は全く心配もしない。
「話は大体分かりました。
私は学園長に報告に行ってきます。
出来ればお嬢様も無事なお姿を見せて上げられるとよろしいかと思いますが……」
「お嬢様？」
「……このちゃんも一緒に来てくれた方がいいと思うんだけど」
大げさに頭を押さえている横島を刹那はちらりと見る。
事情は分かったから必須では無いが、
誘拐実行犯の横島抜きで行くのもおかしいかなと思ったのだ。
だが、無理に連行など出来ない。
しかし、意外にも横島の方から解決してくれた。
「そういう事なら俺も行った方がいいな。
俺が悪いんだし。
嫌がる木乃香ちゃんに見合いをさせた事に一言いってやらんといかんしな」
『私も行きますっ。
木乃香さんは友達ですからねっ。
もし、木乃香さんを怒るような事したら、わって驚かせちゃいますよ』

と、さよまで言い出したので全員で学園長の所に行く事になった。
歩き方がぎこちない木乃香を横島が抱きかかえて歩こうとして刹那に止められ、
結局、刹那が木乃香を支えて歩く事になり、木乃香が喜ぶといった事があったが、
言うべき事はそれぐらいだった。
スーツ姿の青年と豪華な着物姿の少女とそれを支えて歩く制服姿の少女。
おまけに見える者には浮遊霊の少女まで連れた一団がどう見えたかは分からない。
ただ、いくら賑やかで派手な者が多い麻帆良の街でも、奇抜だったのは間違いない。
学園長室。
夕方と言ってもいい時間になって、ようやく横島達は到着した。
遅くなったのは木乃香のペースに合わせたのと、
途中、喫茶店で食事をしてきた為だ。
「こんちはー」
「失礼します」
「お邪魔するえ～」
『こんにちはー。
ここが学園長室なんですね。
初めて来ましたー』

入るや否やさよは室内をきょろきょろと見渡し始めた。
どこにでも自由に行き来できるはずの幽霊なのに、
さよは学校内でも行った事の無い場所が多かった。
生来の怖がりらしく、暗い所も知らない所も怖いらしい。
『あれ、私が見えてます?』
只でさえ洋梨のような頭をして人間離れした見た目の学園長が、
目を見開いて口を開けている様はホラーでしかない。
孫娘の挨拶に返事も忘れて目で追っているのだから、
見えてないはずが無かった。
「あ、ああ、勿論じゃ。
しかし、随分とはっきりくっきり見えておるのう……」
「俺も一応霊能者ですからね。
それぐらいの事は出来ますよ。
あー、じゃあさよちゃんの席を確保してくれてたりしたのは学園長ですか?」
『そうなんですか?
ありがとうございます』
「お爺ちゃん、さよちゃんの事知ってたん?

ほなら言うてくれたら良かったのに～」
この発言にたまげたのは学園長である。
魔法とか裏関係とかから遠ざけていた孫が、幽霊を見れるようになっている。
幽霊を見れる事と魔法は直接は関係無いが、
秘匿されているという共通点はあるし、幽霊に禁足事項は無いので
このまま幽霊と交友させれば、魔法も裏もすぐに知られてしまうのは間違いない。
「ほしたら、もっと前からさよちゃんと話したり出来たのになぁ」
『あー、でも私も横島さんに特訓つけてもらってますし』
「ほっかぁ、知ってても横島さんおらんかったら見えてへんかったんやねぇ」
しかも、既に仲良くなっている。
これには学園都市を治め、関東最強の魔法使いとして知られる近衛近右衛門といえども
すぐに対処を思いつかなかった。
「心配かけたみたいですみません。
木乃香ちゃんを攫ったのは俺です」
横島が机の前まで進み出て、深々と頭を下げた。
なかなか堂に入った謝り方である。

謝罪初心者では到底出せない熟練の気配を感じさせる。
だが、その姿勢とは裏腹に出てくる言葉は謝罪とは思えないものだった。
「ただ、心配かけた事と無関係な相手側には謝りますけど、
今後も木乃香ちゃんに見合いをさせるなら、毎回攫いますよ。
それだけは了承しといてください」
「な、なんじゃと!?」
「あんなぁ、お爺ちゃん。
横島さんはうちの為にやってくれたんえ?
怒らんといてやって?」
木乃香が手を合わせてにっこりと微笑む。
「し、しかし、まだまだ会いたいという人が……」
「いや、だから、いいですよ、セッティングしてくれても。
ただ、毎回木乃香ちゃんが攫われて俺とデートする事になるだけです」
「そうなん?
そんならお見合いの席作ってくれてもええよ」
『わー、今の熱々ですねー』
これでは謝罪ではなく、脅迫である。

しかし、実力行使に出られない以上、学園長に取れる手は限られている。
「学園長、働きすぎなんじゃないですか。
土日が、休みがどれ程貴重か忘れてません？
大人になっても大事だけど、中学生にとっても休みは大事なものなんですよ。
大人の都合でそれを潰すのはやめてあげましょうよ」
実感のこもった横島の言葉に、学園長はハッとなった。
事実、近衛近右衛門はほとんど休みなく働いている。
近右衛門だけではない、立派な魔法使い（マギステル・マギ）なら
それが当たり前なのだ。
周りにもそういう人間が多い為に忘れていた視点だった。
普通の中学生として過ごさせてやりたいと思っていたはずだったのに。
「……そうじゃの。
儂が悪かった。
木乃香、すまんかったのう」
「え、う、うん。
ええよ。
美味しいもん食べたり、色んな人と会えたりするんも楽しかったとこあるし……

これから無しいうんならそれでええから……お爺ちゃん、頭上げて」
刹那も「良かったですね」なんて声をかけ、
さよまで加わって女の子同士で仲良く喜びあっている。
女子中学生がきゃっきゃと喜びあっている光景に
学園長室に和やかな空気が流れた。
二十後半の男と年齢不詳の爺が女子中学生を見てにやにやしているという、
もはや犯行現場と言っても差し支えない部屋から数キロ先、
その部屋を覗いている者がいた。
頭から生えた白い突起物、無機質な瞳の奥の望遠レンズ、
メイド服に包まれた硬質ボディ。
ガイノイドにして木乃香や刹那達2―Aのクラスメイトでもある絡繰茶々丸である。
中等部校舎から数キロ先にある大学研究棟の屋上に彼女はいた。
「じぃ～……」
更には普段は付けられていないコード類が多数、彼女に付けられている。
そしてそれを気にする風もなく、彼女は瞬きもせずに横島達を覗き見していた。
「ちっ、ジジイも腑抜けおって……！
あんな怪しい奴を野放しにするなど」

苛立たし気に呟いたのは金髪碧眼の少女、エヴァンジェリンだ。
茶々丸の主人である彼女が見ているのは、彼女の視覚情報である。
といっても傍にいる訳ではなく、茶々丸のいる建物の中。
研究室の中でモニターに映し出された映像を見ているのだ。
「そうは言っても、エヴァも突っかける気はしないんダロ？
同じコトではない カ？」
「ふん！
全盛期の私ならあんなものどうという事も無いわ！
ジジイも情けない。
手下を突っかけるぐらいやればいいのだ！」
ぷりぷりと椅子でふんぞり返りながら苛立っているエヴァンジェリンの周りには
超鈴音と同じくクラスメイトの葉加瀬聡美が一緒にモニターを眺めていた。
「戦闘力を見たいのは同感ネ。
未知のままじゃ作戦も立てられないヨ」
「そうだ。
邪魔をしてくるかは分からんが、万難を排すには対策はいる」
「そうですねー。

私はあの人が使うというその霊力というのが気になっているんですが、
お二人は分かりますか？
どのようなエネルギーなんでしょう」
葉加瀬聡美のキラキラとした目に見つめられてエヴァは顔を逸らした。
何も分からない訳では無いが、説明が面倒だったからだ。
この葉加瀬聡美という少女は研究者らしい探求心で、
完全に納得するまで詳しく説明を求めてくるのだ。
なぜ、なんで、どうして、と何度も何度も聞かれる事を思うと
エヴァのような性格の者からすると知っている事でも話す気が失せるというものだ。
「魂の力と聞いたあるネ。
詳しい事は分からないヨ。
感知するにも才能がいるとかいうふざけたモノらしいガネ」
「魔法以上に不可解な力だからな。
生命とか魂とかに関与するらしいが、私も専門ではない。
ただ茶々丸には反応しないという仮説は正解だったようだ」
「うむ。
今の所気付かれた様子はないネ」

モニターの中では学園長と横島が何事か話しており、
刹那と木乃香がはしゃいでいる。
学園長の背中側からなので表情は伺えないが、
雰囲気的に険悪とは思えない感じだった。
「実際、どれくらいのレベルを想定してるんですか？
長瀬さんや桜咲さんが負けたという情報しか無いんですよねー」
「あの真名がいくら積まれても御免だと言って来たからネ。
少なくとも高畑センセイぐらいはあるだろうナ」
「タカミチか……どうにかけしかける方法は無いものか」
様々な物の溢れた研究室でモニターを見つめながら話し合う少女達は、
学園長室の三人とは対照的に、女子中学生とは思えない雰囲気を漂わせていた。

韮じゃない

茜射す街の川べりを横島は歩く。
残念ながら今は一人だ。
学園長室から出て、少女達とは別れた。
木乃香のお願い〝刹那と仲直りするのを手伝って〟を実行した結果、
上手く行きすぎて彼女達は空白の時間を埋めようと女子寮に帰っていった。
しかも、さよまで連れてである。
せっかく友達になったんだし、と言われれば仕方も無い。
さよ自身が友達の部屋に行ける事に大喜びしてしまっていたから、
引き留める事など出来ようはずもない。
そんな訳で横島は改めて麻帆良の街を歩いているのだ。
この街はいかにも異世界らしく、元の世界には無い雰囲気の街だ。
異国感に溢れながら日本であり、見慣れぬ風景でありながら
元気で賑やかで懐かしさを感じさせる。
学生の街だからこそのエネルギーを感じるこの街を、横島は既に気に入っていた。

日の落ちる前の喧騒、今外に出たという者と
急いで帰ろうとする者が交差する流れの中で美人を探していると、
それとはまた別種の喧騒が横島の耳に聞こえてきた。
「今日こそは……って奴だ！」
「少しは強くなったアルか？
かかてくるといい」
レンガ敷きの広場で十数人の男が、一人の少女を取り囲んでいる。
男達はあまりガラの良くない風体で、少女の方は
「超包子」のウェイトレスをしていた古菲である。
褐色肌に金髪の二つ結び。
横島は美少女なら一目見ただけで忘れない。
「うおおおっ」
「甘いアルヨ」
大振りなパンチをかいくぐり、古菲の掌底が男の腹に突き刺さる。
大柄な男が崩れ落ちると、また別の男が蹴って来るが
古菲はすかさず飛び退き、即座に踏み込み肘を男の脇腹にプレゼントする。
初めは助けるべきかと思った横島だったが、

囲んでいる男達と古菲のレベルの違いに観戦モードになってしまっていた。
面白がっているギャラリーもいるし、気にも留めずに通り過ぎる人達もいる。
聞こえてくる声を聴くに、どうやら日常茶飯事らしい。
男達は次々に向かって行き、のされていくが
その表情はどこか幸せそうでもある。
古菲がいくら美少女とはいえ殴られて嬉しいか？
と考えた横島だったが、嬉しいような気もしたので深く突っ込まなかった。
そもそも実力で劣っていても十数人もいれば、いくらなんでも勝てる。
古菲はその若さからすれば驚異的な強さだが、超人とまではいかない。
複数で仕掛けず、順番にやられていくのは時代劇の悪党のようだ。
要するにこの男達は古菲に殴って欲しくて来たファンなのだろうと横島は結論付けた。
「まだまだ功夫が足りないアルね」
さすがに疲れたのか息遣いも荒いが、古菲が勝利宣言をする。
汗舞い散る美少女の姿に横島が見惚れている内に、男達は全員のされてしまっていた。
格闘技の試合を観るようにしていたギャラリーから拍手が起こる。

横島も一緒になって拍手し、人が散り始めてから汗を拭く古菲に近づいて行った。
「おー、お見事」
「ムッ、お兄さんは今朝のお客さん？」
「あれ、覚えてくれてたのか。
もしかして、運命感じてた？
いやー、奇遇だね、俺も一目見た時からビビッと来てたんだ。
どうかな、せっかくここで奇跡の再会を果たしたんだ。
これから夜景の奇麗なホテルにでも……」
ナンパしながら近づくと古菲は呆れ顔で、横島の手を振り払った。
いや、振り払おうとした。
しかし、するりと躱されて横島に肩を触られてしまう。
どうされたのかも分からないまま、動揺しているうちにスッと横島は離れた。
そして感じる違和感。
いくつか打撃を受けたはずの場所から痛みが消えた。
更には疲労も無く、バッチリ目覚めた時のように身体が軽い。
「ああ、ごめん、ちょっと強引だった？
また今度、お店行くよ。

君に会いにね」
恰好付けてみても横島ではあまり様にならない。
案の定、古菲は横島に見惚れたりしなかった。
ただ、今の横島の動きの不可解さと、何故か痛みや疲れが消えた事に戸惑っている。
横島はただ霊波ヒーリングを行っただけだ。
いくつか攻撃を受けていたようだったし、
こんな美少女に跡が残ってはいけないという程度の事だが、
ここら辺はやはり常識のズレがある。
横島のいた世界では霊能等の超常的な力も秘匿されていなかったし、
使えるアピールでナンパなど珍しくも無い話だ。
この場合はナンパする気すらなくて「お疲れ」ぐらいのノリなのだが、
古菲からすればあり得ない事だった。
「まっ、待つアルよ!
お兄さん、何したアルか?」
「え、何ってヒーリング……
あーっと、マッサージみたいなもんだよ。
身体軽いだろ?」

「それはありがとうアル……じゃなくて！
その前の動きも、こう……」
何やら手をぶんぶんと振って、さっきの横島の動きを古菲がなぞる。
それから「あー」「うー」と唸りながら言葉を重ねて、
説明をしようとして、結局は諦めた。
諦めた結果、古菲から出る言葉と言ったら、
「勝負して欲しいアル！」
と、まあこうなる。
困惑するのは横島である。
喧嘩売られるような事をした覚えはない。
珍しくセクハラもせずナンパもあっさり引き下がったのに。
「いやいや、古菲ちゃんはアレか。
戦闘民族の類か。
戦う理由が無いだろ」
「お兄さんは滅茶苦茶強そうな匂いがするネ。
理由はそれだけで十分ヨ」
古菲がアチョーと手刀を構える。

この理由になってない戦う理由に、横島は友人を思い出して目を細めた。
新技が出来ただの、閃きそうだの、戦術確認だのと
何かにつけて戦いに挑んできたツリ目の戦闘民族には
面倒もかけられたが楽しくもあった。
「……悪いけど、俺は遊びで戦わないんだ」
「アソビではないよヨ！
真剣勝負ね！」
「戦った結果、取り返しのつかない事になっても？」
殺気をピンポイントに古菲に向ける。
性格的に殺気を放つのは得意ではない横島だが、
それでも場数を踏めばある程度は出来るようになる。
無駄な戦いを避けるには有用な手段だ。
「……それでも勝負して欲しいアル」
古菲はすっかり蒼褪めて震えている。
だが、それでも退かなかった。
ノリやテンションで言っている訳ではない。
強者と戦いたいという思いは本気だった。

「……分かった。
ただ、場所は変えてもいいかな。
ちょっとここは見学が多い」
「それは構わないアルが……」
通り過ぎていく人達はいるが、
もう既にギャラリーしていた連中はいない。
古菲には横島の言っている事が分からなかったが、
戦ってくれるという事なので素直に頷いた。
魔法で姿を隠して覗いたり、超望遠で覗いたりしている者がいるとは
彼女では思いもしない事だった。

二人が移動してきたのは、横島の家と化したビルの屋上。
前に幽霊達と宴会をした場所である。
「ここは……？」
「ここ俺ん家だから遠慮しなくていいぞ。
壊しても何しても構わないから。
いや、まあ、面倒だからなるべく壊さない方がいいけどな」

真新しいビルの屋上は障害となる物は一切ない。
中に入る為の階段部屋が隅にあるだけで、まるでリングのようだった。
視線を遮る物も無いが、元から文珠で結界を張ってあるので
許可してない者が乱入してくる心配はない。
ついでに言えば遮音も兼ねている。
本当は連れ込んだ女の子の喘ぎ声対策のつもりだったが、
戦闘音も近所に聞かせるべきではないだろうし、結果オーライだろう。
「横島忠夫だ」
「古菲アル」
中央まで進み出て、二人は相対する。
道中、自己紹介もしていたし、色々な話もしていたが、
戦い前の礼儀として名を名乗った。
何の流派の流儀という事も無いが、互いに一礼をして向かい合う。
「ルールとか何か決めたい事ある？」
「無用ネ。
これでも競技者では無いつもりアルヨ」
「服もそれでいいのか？

着替えてもいいけど……」
横島はスーツ姿だが、古菲はチャイナ服を着ている。
スリットからスパッツを履いているのが見えるのだから、
脱いだ方が動きやすいだろう、という配慮だ。
いや、古菲が自主的に脱ぐ姿を見たいという気持ちも多分に入っているが。
「気遣い無用アル」
「じゃあ、いつでもいいぞ。
君の動き出しを合図にしよう」
「それはどうもありがとうアルねっ！」
言葉が終わるか終わらないか。
待ちきれなかったとばかりに早速、古菲が仕掛ける。
地を蹴る音と震脚の音がほぼ同時に鳴る、左肘での突進。
数ミリ届かない。
続けて右の崩拳。
数ミリ届かない。
身体を低くして足払い。
やはり届かない。

即座に腕を支点にして身体全体を回すようにしての足払い。
これもまた僅かに届かない。
古菲の得意とする刑意拳（ぎょういけん）は攻めにこそ特徴がある。
受けが無い訳でもカウンターを取る技も無い事は無いが、
相手の反応に惑わされず休みなく攻め続ける事こそ真骨頂なのだ。
そして、もう一つ、独特の歩方と体裁きでリーチの誤認を起こさせるのも。
にも拘わらず、きっちり見切られている事に古菲は喜びを隠せなかった。
「攻めてこないアルか？」
「何が起きてるのか分からない内に負けちゃ納得しないだろ？」
にんまりと笑みを浮かべて、古菲が飛び掛かって来る。
古菲が使うのは刑意拳だけでは無い。
八卦掌に、刑意拳と祖を同じくする心意六合拳、八極拳も多少学んでいる。
その全てを持って古菲は横島に襲い掛かった。
鉞を模した拳の打ち下ろし、その勢いを利用して右足での蹴りから左後ろ回し蹴り。
流れるような技の連携、
一見して踊っているかの如き動きは八卦掌のものである。
「いい動きだけど素直すぎる」

古菲の怒涛の攻めの合間に、横島の手がふにっと少女の膨らみを揉む。
古菲は一瞬だけ表情を変えるが、怯まなかった。
蛇拳での突きの連続を放ち、鳥の構えから水面蹴り、
飛び上がるようにして右の蹴り上げに続けて左で蹴り上げ、
そこからの脚の打ち下ろし。
その合間に今度は股の中心をふにふにと揉まれてしまう。
「あぅっ……」
「虚が足りないな。
素晴らしい攻めの連携だけど、読みやすいぞ」
横島も中国の伝説の英雄を師匠にしていた男だ。
自ら望んだとはいえ死んでもおかしくないどころか、
生きているのがおかしいというレベルで修行したのだ。
武術も一通り叩き込まれている。
いくら古菲が才能があって、努力を惜しまなかったとしても
積んだ経験が違い過ぎた。
文珠ブーストで最大効率で習熟出来る男が、
発狂するレベルで修行し続けたのだ。

１４歳に追いつかれては形無しだろう。
「なら、これはどうアルかっ！」
今まで以上の速度で古菲が踏み込み、接近する。
頭突きで腹部を狙うが、これも届かない。
が、それは古菲も織り込み済み。
前傾姿勢から飛び上がり、仕掛けるのは胴回し回転蹴り。
この奇策に横島が取った手段は、
接近し空中でスパッツを脱がせるという更なる奇策だった。
ずりんとスパッツを下着ごと膝までずり下ろし、古菲の勢いを止める。
空中で逆さまのまま、お尻丸出しになった少女に抱き着き、
お腹を掴んで股間に顔を埋め、横島は古菲を地面へとたたきつけた。
横島流奥義「まんぐり返し式パワーボム」
露出させた局部に顔を埋めてのパワーボム・ホールド。
古菲と地面の間に自らの脚を差し込んで、
頭と首を保護してやっているのは横島なりの情けというものだ。
フォール技で拘束してからのスムーズなクンニへの移行が可能な大技である。
対象が大きな隙を見せなければ出来ない上に、

かなりの実力差も必要な為、色んな意味で舐めプと言われている。
キング・オブ・舐めプと言うと、カリスマ性がありそうに聞こえるから困る。
「ひやぁっ……」
古菲からすれば、何をされたかも分からない。
胴回し回転蹴りを仕掛けたはずが、気づけば頭を下にして拘束され
視界には下着ごと下ろされたスパッツが膝で止まり、自らの脚を封じている。
更には開放的になった下半身に荒い息を吹きかけられ、
ぺろぺろと舐められているのである。
理解不能な状況すぎて悲鳴も出ない。
「あっ……やぁっ離すアル……離してッ……」
じたばたと動こうとしても、上半身は抑え込まれて動けない。
腕は横島の脚に挟まれて動かせず、
下半身を太ももの裏を掴まれてはどうしようもない。
人体の構造として、この体勢から力で上回る相手を撥ね退けるのは不可能である。
それに尻の穴まで見られている体勢で、クリトリスを舐められて力も入らない。
「いやっ……やぁ……っ」
とは言え、さすがに体勢的にも感覚的にも何をされているのか、

徐々に分かって来る。
自らの最も臭い部分をさらけ出し、間近で嗅がれ、舐められている。
必死に抵抗しようとするが、鍛え上げた脚は空中を掻くだけで役に立たない。
古菲はただ困惑し、やがて未知の快感に嬌声を上げ始めた。
「あっ……ああっ……」
僅かに色素の薄い割れ目に横島の舌がちろちろと上下する。
喧騒が遠くに聞こえるビルの屋上で、
まだ肌寒い季節に浅黒いお尻の間から香ばしい湯気が立ち上る。
こもっていた汗の匂いと、少しだけ尿の匂い、
そして芽生え始めた少女の雌の匂いが混じりあい、横島の雄を刺激する。
唾液以外の液体が割れ目を潤わせ始めると、古菲は大人しくなってしまった。
「やっ……ぁ～～っ……」
ぴくんぴくんと震えると、古菲の身体から力が抜けた。
ぴゅぴゅっと暗くなった夜空に、逆さまにされた古菲から透明な液体が噴出されて、
頭上を通り越して、ぴしゃっと屋上のコンクリートを黒く沁みさせる。
ひくひくとほのかに色の濃い尻穴が震え、
未だピタリと閉じた割れ目はひくついて透明な汁を溢れさせている。

古菲は小柄で細身だが、意外にも肉付は良い。
胸にも尻にもちゃんと柔らかい肉を蓄えている。
横島は古菲が達した後も解放せず、さわさわと尻肉を撫でながら
剥き出しにさせた穴をくぱっと開いたり、
キスをしたり、しこりのように固くなった肉豆を舐めて愉しんだ。
「うっ……うう～っ……」
そうして横島が調子にのって、未成熟な果実を弄んでいると
すすり泣く声が漏れ始めた。
古菲は負けて泣くような武術家ではない。
己の鍛錬に恥じる事無い誇り高い研究家でもある。
だが、同時に未だ１４の少女なのだ。
身動きとれない状態にされて、恥ずかしい場所を見られ、
嗅がれ、触られ、舐められ、イかされていたのである。
それも奥手な処女が、だ。
涙も零れようものである。
むしろ、今までよく気丈に耐えたと言ってもいい。
「あ、ご、ごめん。

ごめんな、古菲ちゃん」
「うぐっ……うう……」
慌てて拘束を解いて、横島は横たわった古菲を抱き起した。
しかし、もう古菲の目には大きな涙が溜まっていた。
横島が抱き起したのが合図となったように、
大きな瞳からぽろぽろと涙があふれだした。
「ごめんごめん、悪かった。
よしよし、怖かったなー」
横島は泣き続ける古菲を膝にのせて抱きしめると、背中を撫でた。
ゆっくりと優しく、
先程まで少女をまんぐり返しで拘束していた男とは思えない程、穏やかに。
やがて、古菲も落ち着いてきて涙が止まる。
ぐすぐすと鼻をすするが、それからもしばらく横島は抱き締め続けた。
時折、頭を撫でたりして、古菲を覗き込む。
「……泣いたりしてごめんなさいアル。
負けて泣くなんて、情けないヨ……」
「ああ、いや、俺がいたぶり過ぎたな。

古菲ちゃんがあんまり可愛かったから、ちょっと調子に乗った。
俺こそ悪かった」
悪かったなどと言っているが、横島は反省はしていない。
同じようなシチュエーションになったら、
当然のように少女の身体と反応を愉しむだろう。
だが、この場では謝って見せる。
エロい事は最大限行うが、いい顔もしたいのが男というものだ。
「お兄さん、横島さんって言ったネ。
横島さん、私の老師になってくれないか？」
「老師？」
「ワタシ、横島さんほど強いヒト見た事無いアル。
もっと色々教えて欲しいアル」
涙をぬぐった古菲は、もうすっかり明るい表情で横島にお願いする。
二人は抱き合ったままだ。
この距離で詰めよれば、もうキスする距離である。
返事代わりに横島が迫ると、古菲は避けなかった。
唇と唇が触れ合い、肌の触れ合いの延長からぺろぺろと舌が挟まる。

「んっ……」
舌と舌が絡み合うと、古菲の腕も横島の首に周った。
そうすると、横島の手は古菲の背中から徐々にずれて前をまさぐり出す。
小柄な割になかなかしっかりとある乳房を服越しに揉みしだき、
もう片腕は小さなお尻を撫でさする。
「月謝は身体で払ってもらうよ」
このような体勢でそう囁かれては、いくら奥手の古菲でも意味は分かる。
「ワタシ、強い男が好きアル……」
顔を赤くして、そう答える。
それが古菲の精一杯の返事だった。
「じゃあ、続きはベッドの上で、だな」
そう言って横島は古菲を抱きかかえたまま立ち上がった。
横島にも気付かれないぐらいに、古菲は小さく頷いた。

弟子足る者

キングサイズを超えて広いベッドの上に、
すっかりしおらしくなった古菲を横たえる。
脚にぶら下がっていたスパッツを下着ごと脱がせても、
黙って脚を上げて脱がせやすいように協力的ですらある。
それで調子に乗った横島は脱がせた下着を顔に近づけた。
「嗅いじゃ嫌アルッ！」
これにはさすがに古菲も黙っていられなかった。
一日履いていたパンツを嗅がれて平気な処女もなかなかいないだろう。
だが、慌てて身を起こした古菲を迎え撃つように、横島は抱き締めた。
右手で抱き締めて、左手はパンツを握ったまま、リーチ差を活かして遠ざける。
「うう～……返すアル～……」
何とか取り返そうと古菲が抱き締められた体勢から、右手を伸ばす。
自然と自分からおっぱいを押し当てる事になる。
小柄で細身ならがついてるものはついてる古菲だ。

その柔らかな感触を楽しんでから、横島はパンツを放した。
ベッドの外に捨てられ、古菲も一安心、とした所で
横島の手が浮いていたお尻に滑り込む。
「ひぅっ……！」
菊門に指をあてがわれ、古菲が悲鳴と共にきゅっとお尻を締める。
尻穴というのは人類にとって急所だ。
女性器よりも触られる事に抵抗があるかもしれない。
そこを横島の指はふよふよと指の腹で押した。
まだ入り口で、突っ込んだりはしていないが、
古菲は固まってしまっている。
「やっ……そこっ……」
「そこっ、どこ？」
ぐぐっと中指を侵入させる動きをして、いやいやする古菲を眺める。
横島はあまりＳっ気は無いのだが、どうもこの古菲という娘は
その横島でも苛めたくなるような可愛さがあった。
「言わないと止めてあげないよ」
「あぅ～……」

横島の意地の悪いのは、ここで霊波も使って愛撫している事だ。
未開発の尻穴などいきなり触られて気持ち良い筈もないが、
こうして霊波も使うと話は別だ。
そうして、この快感が霊体に与えられているのか、
尻穴からもたらされているのか分からないようにしている。
羞恥と快感のダブルで古菲の反応を愉しんでいるのだ。
「お、お尻……お尻の穴触るのやめて欲しいアル……」
泣きそうな弱弱しい声で、古菲が呟く。
その可愛らしい反応に満足し、横島は唇を奪った。
しかし、触るのを止めたりしない。
「お尻弱いの？
格闘家なら鍛えないといけないぜ」
「そ、そうアルか？」
「そりゃあそうだろ。
関節技や抑え込みの脱出技として尻穴に指を突っ込むのは常套手段だし、
触られるだけで不味いなんて、分かりやすい弱点だろ？」
「確かにそうアル！」

横島はぐにぐにと古菲のお尻を揉みながらもっともらしい事を言う。
今言った事は嘘ではないが、横島は古菲に弱点克服させる気はなかった。
「さあ、そこにごろんと寝転がって足を開いて。
古菲の弱い所を見てやるからな」
「う、うん……」
古菲は素直だ。
言われた事を信じ、羞恥で顔を赤くしながらもベッドの上に寝転び
そっと両足を開く。
「この布が邪魔だなぁ」
チャイナ服の前垂れが脚と脚の間を上手に隠している。
そう思うなら自分でめくればいいのに、横島はわざわざ古菲に告げる。
そうして、顔を股間の前まで近づけて、太ももをさする。
「さあ、めくって」
「うう……」
見ていいよ、という姿勢になるだけでも恥ずかしいのに
完全に見せる姿勢の恥ずかしさは顔から火が出るかと思うほどだ。
しかし、それでも古菲は意を決して前垂れを手にもって、めくりあげた。

羞恥から同時に脚を閉じようとするが、それは横島が許さない。
露わになった局部とそっぽを向いて羞恥に耐える古菲の顔を交互に眺め、
横島は手を伸ばした。
大陰唇は毛も無く、つるつると綺麗で脚を開いてもまだぴたりと閉じている。
その上には僅かばかりの若草が生え、腹と局部の境目だと主張しているようだ。
ついーっと指で大陰唇をなぞると、ひゃんと古菲が脚を閉じる。
「ほら、とじちゃダメだって」
「うぅ～……」
ゆっくりと脚が開いて来るとまた指でぷにぷにとつつく。
「とても綺麗だよ。
でも、こんなに感度がいいと不味いな」
「不味いアルか……？」
「ああ、こんなに感度が良くちゃ、
戦ってる時に触られたら負けてしまうだろ？
痴漢にだって勝てないかもしれない」
「そっ、そんなっ……あっ……やっ……」
割れ目を撫でながら口調だけ神妙に横島が囁く。

純真な古菲はもうすっかり横島の言う事を疑ってない。
何しろ現在進行形で感じさせられて、力の入らなさを実感させられている。
いきなりこんなに感じさせてくる横島が特殊だなんて、
処女の古菲には分からないのも仕方ないだろう。
「さ、もっとよく見せるんだ。
自分で脚を抱えて。
そう、そう。
ぐっと力入れて?」
古菲の手を膝の裏に誘導して持たせると、持ち上げろと横島が指示してくる。
古菲もさすがに躊躇するが、横島は何度も何度も根気強く脚を持ち上げるように要求する。
もうほとんど剥かれている状況で、抗いようもなく、
促すようにお尻の下に手を差し込まれると、
古菲はとうとう自分から両足を抱え上げ、性器をさらけ出した。
「いい子だ。
さあ、もうちょっと力入れて。
お尻の穴まで俺に見せるんだ」

お尻を撫でながら横島が優しく囁く。
古菲は涙目になりながら、言われる通りに更に脚を抱え上げた。
腰が浮いて、上に向けて性器も尻穴も丸見えになる。
こうして恥辱に震える姿は、言ってみれば今だけしか味わえない特別なものだ。
抱かれる事に慣れてしまえば、恥ずかしさは薄れていく。
ゼロにはならないかもしれないが、涙まで浮かべる程恥ずかしがるのは処女の今だけだろう。
その特別を味わいつくそうと、横島は燃え上がっている。
「可愛いよ。
古菲のすごく可愛い所が良く見える」
「やぅっ……ん……」
お尻を撫でていた手を滑らせて、わずかに色素の濃いひだの中心に
横島の中指がゆっくりと侵入していった。
「ぁ……ぁ……っ」
こういう時の為に横島はいつも手の爪は全て深爪している。
更に傷つけないよう用心して、優しくゆっくりと古菲のお尻の穴に潜らせていく。
こちらの穴は感じさせても粘液など出ない。

ぎゅうっと閉じられた穴をくすぐるように動かして、指が入っていく。
「力抜いて？
古菲の弱い所を全部見せるんだ」
温かい柔肉の中に右手の第一関節まで中指を入れてしまうと、
横島は古菲のお尻をぐぐっと持ち上げた。
そして、左手は古菲の首の下に敷いて、顔を近づける。
「ほら、お尻の中に指を入れられると抵抗できないだろ？」
「う……はいアル……」
お尻の中に入れた指で、古菲の下半身を上下させる。
恥ずかしさで身体を真っ赤に染めた古菲は、
弄ばれている己の身体を見せられてなお抵抗出来ない事を知らされた。
更に恐ろしい事に突っ込まれて中をぐにぐにと掻かれると
尻穴が気持ちいいという事も、教えられた。
元々、性欲が薄く色恋にも興味無かった古菲はその手の知識が無い。
素直に尻穴が弱点だという横島の話に泣きそうになりながらも、納得していた。
「勿論、こっちも鍛えないといけない」
「ひゃっ……」

尻の穴に引っ掛けた中指はそのままに、今度は親指で古菲のおまんこを撫でる。
未熟なスリットは湿っていて、触られた刺激で水音を鳴らしてしまう。
親指の腹でくにっとめくられて、ピンク色の媚肉を外気に晒す。
「んっ……」
「ほら、少し広げただけでこんなに反応してる。
戦ってる時、例えば上段蹴りを外したら恰好の弱点を晒す事になるだろう?」
ぐぐっと尻を持ち上げられ、またまんぐり返しの体勢にされ
古菲は弄られている自らの性器と尻穴を見させられる。
横島の指を汚そうと分泌する汁も、それに伴う水を掻きまわすような音も、
ずっぷりと入れられた中指を咥え込んで離さない穴も。
お前はいやらしいのだ、と。
こうして弱点を苛められて悦んでしまう女なのだ、と目でも耳でも理解させられる。
「気持ちよくていいんだぞ、古菲。
無理矢理突っ込んだら痛いからな。
気持ちよくしてやってるんだ。
弱点を攻撃されるのを怖がり過ぎないようにな」
「あ……ありがとアル……」

このような状況で口を開く事すら恥ずかしいが、
性格の生真面目な部分が出て、古菲はお礼を言った。
親指と人差し指で女性器をぱくぱくと開閉されて遊ばれ、
糸引く粘液を見せびらかされ、からかわれても、
強くなる為の一手ならば感謝出来るのが古菲という女の子である。
「これから古菲を強くする為に俺のチンポ入れるからな」
「ち、ちん……をアルか……？」
「これより最適な物はないからな」
そう言うと、横島は古菲の中から手を離す。
突っ込まれていた指が引き抜かれると、中の空気が僅かに漏れて
臭い匂いがほのかに漂う。
古菲は匂いの元が己だと気付き、羞恥の極みに目を閉じた。
しかし、横島は全く気付かぬ振りで立ち上がり、服を脱いだ。
ここをからかうと古菲はお尻を弄られる事を嫌がるようになるだろう。
恥ずかしがる姿が可愛いとはいえ、横島もさすがに線引きはする。
しれっと見えないように文珠『浄』を生成、即使用もしていた。
古菲が泣きそうな顔で目を閉じている間に、横島は全裸になった。

目にもとまらぬ早脱ぎである。
空中で全裸になる通称「怪盗脱ぎ」も可能な早業である。
そうして全裸になった横島は腹まで反り返る自慢のブツを
古菲に見せつけて、覆いかぶさった。
「古菲の弱い所をこいつで強くしてやるからな?」
そう言われても古菲は言葉も出ない。
そもそも成熟した男性器を見るのが初めてなのだ。
赤黒い血管の浮き出した猛る肉。
太く、長い。
そして反り返った先端はてらてらと怪しく輝いている。
「は、はいアル……」
古菲の知識の無さが逆に頷かせた。
男の性器というものの平均も知らぬ。
横島が入れるというからには入るのだろう、そんな感想である。
そもそもあんな不気味な物を、という戸惑いはあるのだが、
そういった物も全て古菲は飲み込んだ。
横島の強さは紛れも無いものだ。

ならば、後は信じるのみである。
単純ゆえの強さが古菲にはある。
「よし、じゃあ、いくぞ」
抱え上げたあそこに、横島のブツがあてがわれる。
スジに沿ってブツを滑らせて、お互いの粘液を混じりあわせる。
にゅぽにゅぽと前後に擦られ、
「あ、これ、気持ちいい……？」
と古菲が感じ始めた頃、それはずっぷりと入っていった。
「……ッ!?」
尻を上にあげた姿勢の古菲に横島が上から挿す。
産まれてからずっと癒着していた肉が、カチカチに漲った棒で引き裂かれる。
無理だと訴える媚肉に、横島のチンポは容赦なく押し通っていく。
痛みから膝裏を抱えた腕に古菲は更に力を入れて、差し出すように股を広げる。
ミチミチと肉をかき分けカチカチの肉が古菲の体内に入っていく。
まだ13歳の若く未成熟な肉壁を押し広げ、
耐える少女といやらしい男が一つになる。
「目を開けて見て」

息もし難い痛みに耐えている古菲に、横島が囁く。
額に汗を浮かべた古菲は言われた通りに目を開けると、
強引に押し広げられた自身の秘裂と
ぶっ刺された太い肉の棒があった。
「一つになってるの分かるか?」
「は、はい……アル……」
はっきりと貫かれた自身の性器を見せられ、
古菲はゾクゾクする不思議な感覚に襲われた。
とても痛いし、恥ずかしいのに、奇妙な満足感、達成感がある。
自分は男を、横島を悦ばす身体を持っているんだと理解する。
女であるという事を強く意識させられる。
ズズっと浅く引かれると、赤い血のまとわりついた肉の棒が現れ、
またズブズブと押し込まれていく。
「うぐぐっ……」
小さくくぐもった悲鳴が古菲から上がる。
横島はいつもの霊波ヒーリングを行っていない。
それは横島が古菲をMだと決めつけているからだ。

勝つために鍛えている者は別だが、
鍛える為に鍛えているような奴はM、という偏見が横島にはある。
その偏見が横島にかつての弟子を思い出させていた。
何をされても慕ってきた少女。
朝起こすならフェラで、とか
いつでも濡らしておけとか、下着禁止とか弟子の条件としてつけていた。
日課の散歩がきつかったので、散歩一回につき八回犯すという条件にしたら
散歩をねだる回数が増えた事もあった。
あのドMな少女と古菲は被る部分がある。
非処女になったばかりの古菲で、上から押しつぶすように扱く。
「くっ、ちょっと緩めてくれ。
締め付けがキツすぎる」
「あ……ううっ……！」
当たり前だが古菲はまだ女性器の使い方など知らぬ。
意思を持って扱うという事すら頭にないだろう。
そんな未熟な穴に対して、強引に突っ込み、ぐりぐりと腰を回す。
さあ、起きろと。

動き出して纏わりつけと、擦り上げる。
パシパシと肉と肉が叩き合う音が鳴り、声も上げられない古菲が呻く。
どれ程経ったか、古菲には分からなかった。
肉棒は何度も何度も古菲を責めてきた。
痛みに耐えるしかなく、ただただ時の過ぎるのを待っていた古菲だったが、
徐々に感覚が変わってきていた。
痛みが消えた訳ではない。
痛みが気持ちよさでもあると気付いた。
腹の奥を突かれる苦しさが待ち遠しくなる。
突かれる度に少しづつ、受け入れられる長さが伸びていくのが分かり嬉しくなる。
「あっ……んっ……」
うめき声が媚びた声に変わり、浮かんでいる涙の意味が変わった頃、
ようやく横島は古菲の中に精を放った。
「ふう……」
どっぷりと古菲の膣に出して、横島は息も絶え絶えな少女を見つめる。
浅黒い顔を汗と涙に塗らして、放心している。
愛おしくなってキスをすると、ぎこちなく返してくる。

挿入したまま、しばらく舌を舐めあって、横島はずるりと引き抜いた。
「あ……」
奇妙な喪失感に戸惑う古菲の眼前に、
その破瓜の血と精液と愛液で塗れたチンポを突き出した。
「な、なにアルか……？」
「舐めてキレイにするんだ」
「な、舐める……？
これをアルか……？」
てらてらとぬめる肉棒に古菲の形の良い眉が歪む。
湯気が出ていそうな程、自身から引き抜かれたばかりのものだ。
さすがに「はい」とはいかない。
「古菲、師匠がチンポを出したら舐めるのが弟子の務めだ」
「そ、そうアルか……
うう……分かったアルよ……」
そう言われてはもう拒否できない。
古菲はおずおずと小さな舌を出した。
見るからに汚れてもいるし、そもそもチンポは小便を出す所でもある。

口に入れるというのは忌避感が強い。
それでも、この人を師匠にと決めたのだからと覚悟をして
古菲は目をつぶって口に含んだ。
「んんっ!?」
予想を裏切る甘露に、古菲は咥えたまま目を見開く。
元より気を使っていた古菲は、霊気にも素質があったらしい。
ぺろぺろと舐めだした姿に横島もにっこりである。
「師匠がチンポを出したら咥える。
胸を揉まれたら下着を脱ぐ。
尻を撫でられたら、下着を脱いでおねだりする。
弟子の心得だぞ」
「ふぐぅ……」
返事を聞く気はない。
横島は口に咥えさせたまま、古菲の顔にまたがり
ぎこちなくも懸命に舐める少女の舌にぐっと逸物を押し付けた。
「んんっ!?」
喉に当たる程、押し付けられ古菲の脚がばたばたと泳ぐ。

「動くぞ」
腰を引いてカリを舐めさせると、また喉に向かって付き入れる。
とは言っても、速度は遅い。
ゆっくりと舌の上に擦り付けて、苦しそうに鼻息を荒げる少女の喉に一当て。
またずるずると引き抜いて、唇付近で舐めさせる。
「朝でも夕方でも晩でもいいから、明日から毎日来いよ」
「ふぁいあぅ……」
「今日の体勢でまんことお尻とチェックするから」
「んぐぅ……」
「毎日ヤルから」
「っんっんんん!?」
「お尻も強化しないといけないから開発もするぞ」
「んんーんんーーっ!?」
「ほら、喉でチンポしごいて」
返事も出来ない状態で、横島から注文が来る。
それは多岐に渡るものだった。
今行っている行為の具体的な改善点から、

毎日の生活を根本から変えるもの、
恥ずかしい行為の強要に弟子の心得など、だ。
拒否出来ないまま、頭を掴まれて口内に精液を注がれた頃には
菲は膣出しされる為に日参することを決められていた。
「ふぅー……気持ちよかった」
びゅるびゅると少女の口内に精を放って、
横島は幸せそうに呟いた。
なお、まだ抜いていない。
古菲の顔にまたがったままだ。
放たれた精を懸命に飲み干し、出してくれないチンポを
小さな舌がぺろぺろと掃除する。
掃除するだけ、また硬度を増してくるブツに恐怖を覚えるが
弟子入りを志願したのは自分の方だからと諦める。
実はそれだけでも無いのだが、ついさっきまで処女だった13歳に
自覚を求めるのは酷だろう。
「んー……風呂と飯はどっちが先がいい？」
「……ご飯はどうするアルか？

外食するならお風呂入りたいヨ」
「そうだな、ちょっと待ってくれ。
連絡取れたら買って来てもらうか」
起き上がる気力もなく、寝転がったまま古菲は首を傾げた。

魔法も使えないのに魔法関係者になってしまった楓は、
長かった講習を終え、横島の家に向かっていた。
両手には大きなレジ袋を複数持って。
（全く、人使いの荒い御仁でござる……）
元より来るつもりだったが、
金は倍払うからと食事や飲料などを頼まれ、少し遅くなった。
それに持ってきたら、それで終わりではないだろう。
あのスケベな男の事だ。
自分の身体も使うつもりだろう、と楓は下着を湿らせていた。
（美女専用ドア……）
ふざけた文言の書かれたドアの前に立つと、自動で開く。
そこで楓が見た物は、フロアの半分はある寮のものに匹敵する広さの風呂と、

その上で、宙に浮いて古菲をバックで犯す横島の姿だった。
「あっあっあっあっ……」
パンパンとリズムよく尻を打ち付ける音の合いの手のように、古菲の声が混じる。
中空で犯されるという体勢に、古菲は掴むものもなく前屈姿勢で
尻を突き出したような恰好で揺すられていた。
「あっ、楓ちゃん来てくれたか」
「はぁ……古（くー）もでござるか……」
「えっ……楓っ!?
やっ……ダメっ……」
頭を抱える楓に気付いた古菲が、上体を起こして腰を掴む手をぺしぺしと叩く。
離して、と訴える行為だが、無論横島は離さない。
意思が伝わらなかった訳ではない。
「離したら、落ちるって」
「ふぐぅ……」
こうして逃げられないようにする為に霊気で自分の分だけ足場を作っているのだ。
離してくれない事を悟った古菲が、せめて動かないでとなお抗議するが
勿論、こっちの主張も通らない。

それどころかピストンは激しさを増し、大サービスで霊波ヒーリングまで横島は行使する。
「あっああああああ～～～っ！」
突如、増幅された快感に古菲が絶叫し、身を震わせる。
のけぞった身体の形の良い乳房をむにゅっと掴むと、
泣きながら震える少女の奥に精を放った。

「さあ、もう機嫌直してくれって」
すんすんと鼻をすする古菲を片手で抱き寄せながら、
横島は首筋や頬にキスをする。
古菲は怒っている訳ではないのだが、
クラスメイトの前で犯され膣出しされて平静でいられるような狂人では無かった。
「そうだ、さっきの宙に浮いてた技教えてやろうか。
すぐには無理でも、修行したらそのうち使えると思うし」
「本当アルかっ!?」
ざばっとお湯に波立てて古菲が振り向く。
反対側に抱き寄せられている楓が視界に入るが、

今度は落ち込んだりしない。
「ああ、弟子だしな」
「古（くー）は弟子入りしたでござるか？
拙者もそれをお願いしようと思っていたのでござるが……」
ここは風呂である。
当然、皆裸だ。
お湯に浮かぶ脂肪が古菲の視界に入った。
「……弟子入りしたらエッチな事いっぱいされるアルよ」
「それはもう散々された後でござるゆえ……」
「楓も？」
「それはもう」
一緒に裸になって風呂に入っている時点で、分かりそうなものだが
一応、楓は恥ずかしい姿を見られた古菲の為という理由で剥かれたのだ。
戸惑っていた古菲に関係までは教えていなかった。
「まあまあ弟子同士になったんだから仲良くしてくれよ」
女子同士の会話を聞いて、横島が両手で両者の乳を揉む。
「あっ、やめっ……」

「んっ……あっ……」
ひとつはたぷたぷと、ひとつはふにふにと愉しんでから
横島がざばーっと立ち上がる。
気まぐれに触られた側は息を切らしている。
「そうだな、古菲の攻撃と避けた時も使ってたんだが分からなかったか？」
「わ、ワタシのアルか……？」
戸惑い、首を振る古菲の視線は横島の顔に向けられている。
だが、楓はもう元気を回復し反り返っている横島のものに
視線が引き寄せられてしまっていた。
快感を教え込まれた後、一日半もお預けされているのだから、仕方がないのかもしれない。
「これは霊気という力なんだが、ただの気とは違う。
気は留まらないからな。
どうやっても物質として固まらない。
霊気は収束させると物質化する。
こんな風にな」
そういって横島は湯の上に霊気の板を作り、その上に乗る。

「板状にするだけでも足場になる。
更に伸ばして風呂の縁とか底までやると固定も出来る。
さっき、楓ちゃんが買ってきてくれた物を二階に運んだのもこれだ」
「ああ……!
アレはそういう事だったアルか。
ぼーっとしてたから夢かと思ったアル……」
強制絶頂されて意識朦朧とするなか、口での掃除を強要されていたのだ。
視界の端で買い物袋だけが楓の手から離れて飛んでいくのを
見間違いか何かと思ってしまっていた。
「これは形も自由自在だ。
勿論、修行次第だけどな。
応用するとこういう事も出来る」
霊気の板の下からオールの先のような物が、いくつも生えて来て動き出す。
その力で横島ごと板が水面を泳ぎ出した。
「あっ……それは足の下から生やしたアルか?」
「そういう事。
これで動けば筋肉の動きを一切見られないから見切られづらい。

自分のベストな体勢のまま動けるからカウンターも取りやすい。
勿論、これで直接攻撃も出来る。
どれだけ有用か分かるだろ？」
「凄いアルっ！
どうすれば習得できるアルかっ？」
わくわくと前のめりに聞いて来る古菲に、横島はいやらしく微笑んだ。
「とりあえずは精飲か、膣出しだ。
もちろん、俺からじゃないとダメだぞ」
そういって、霊気を消し横島は自分の脚で立った。
楓の前で。
「という訳で楓ちゃん。
お尻出して」
「そ、そんなっ、ここででござるかっ？」
慌てて立ち上がり、拒否するそぶりをする楓。
だが、視線は変わらず横島の下半身に注がれている。
「古菲のやらしいとこ見たんだし、楓ちゃんも見せないと不公平だろ」
ゆっくりと近寄って来る横島から身を隠すように、

胸と局所の前に楓は手をやった。
身をよじり、高い背を少しかがめて、上目で横島を覗く。
楓は露出狂という訳ではない。
ただ、あの反り返る棒に腹の中をぐちゃぐちゃにされる事を思うと、
とろとろと身体が勝手に準備してしまうだけだ。
「はい、お尻向けて」
「あぅぅ……」
胸と局所を隠すだけで手はもう無い。
お尻を掴まれ、撫でられて、ぐいっと反転させられる。
そうして、とんと優しく背中を押されると楓は諦めてお尻を突き出した。
「うぅ……古（くー）、出来れば見ないで欲しいでござる……」
「わ、分かったアルよ……」
「まあ、そう言わずにっと」
むにっと開いて、楓の媚肉がねちゃっと粘液にまみれている事を確認し、
横島は前戯もなしに突っ込んだ。
「ぁあっ……」
いくらたっぷり濡れていても横島のものは極太で

いきなり最奥にまでは入れない。
ずぷぷと粘液が泡立つ音をさせながら、楓の秘裂が広げられ
受け入れていく。
古菲はお湯に漬かり、ぶくぶくと水面に息を吐いて、
楓が雌の顔になっていくのをじっと見ていた。
「それで話の続きなんだけど……」
楓の豊かな尻をぱしんぱしんと奏でながら、横島が霊気の話を続け出した。
だが、それを聞いている者は誰もいなかった。
楓は水面を乳房でかき混ぜながら、声を立てないように頑張りながら
白い裸身を赤く羞恥で染めて。
古菲はあの飄々とした楓が横島に女にされて、
悦びながら尻を振る様に意識を持っていかれていた。
この日、風呂の中でも、上がってからも、食事してからも、
弟子の義務というものを二人は思い知らされた。
こうして中国武術研究会のアイドルは、
膣出しされに男の家に通う事になってしまったのだった。